妄想科学ADV

CHAOS;CHILD

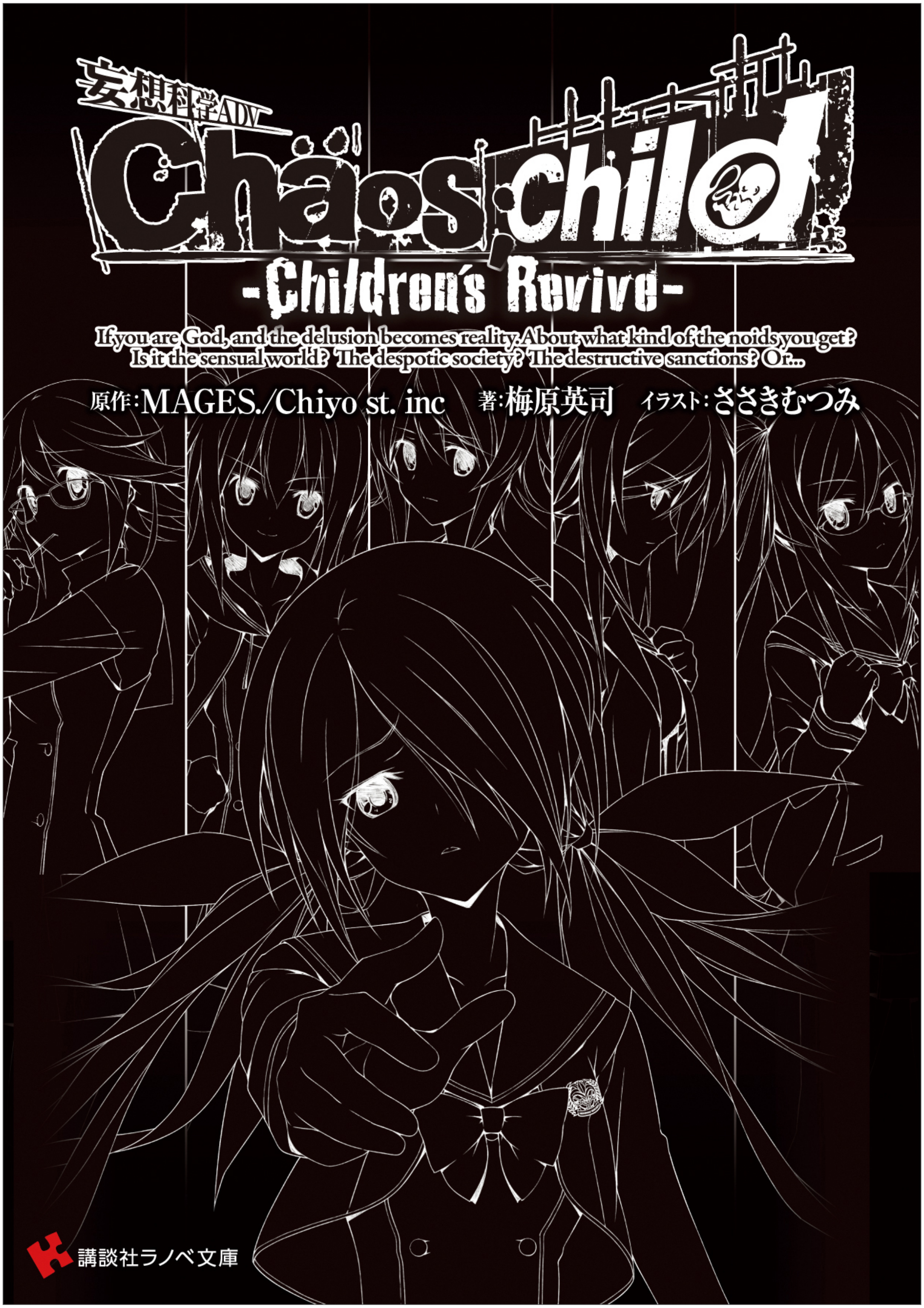
-Children's Revive-

If you are God, and the delusion becomes reality. About what kind of the noids you get?
Is it the sensual world? The despotic society? The destructive sanctions? Or...

原作：MAGES./Chiyo st. inc　著：梅原英司　イラスト：ささきむつみ



講談社ラノベ文庫


妄想科学ADV
CHAOS;CHILD
-Children's Revive-
If you are God, and the delusion becomes reality. About what kind of the noids you get?
Is it the sensual world? The despotic society? The destructive sanctions? Or...
原作:MAGES./Chiyo st. inc 著:梅原英司 イラスト:ささきむつみ
講談社ラノベ文庫

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。
ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。




私たちは元症候群者であるというレッテル、
碧朋学園に通っているというレッテルが
貼られている以上、
元通りになどなりません。
お洒落な店にいた
あのカップルの立ち位置に、
私たちは戻ることなど一生できません。
けれどどうか、私たち元症候群者自身が、
一人残らずしっかりと考え、
悩むことが出来るよう、
力を貸して下さい！


考えてみれば、あなたからの
ちゃんとした手書きの手紙をもらうのは、
今回が初めてなのですね。
メールはいくらもしたけれど、
手紙をもらったことはなかった。
あれだけ姉弟として一緒に過ごしていたのにね。

Chaos;Child
-Children's Revive-

原作：MAGES./Chiyo st. inc

著：梅原英司

講談社ラノベ文庫

イラスト／ささきむつみ

デザイン／福永真未・小沼由季乃（RedRooster）

CONTENTS

No.
DATE

序章

南沢（みなみさわ） 泉理（せんり）

その一

前略

返事、ありがとう。手紙が無事に届いているようで安心しました。

こちらはつつがなく過ごしています。どうするか悩んでいたおこたですが、結局、昨日買ってしまいました。共同の新しい家具を買うのは本当に久しぶりで、結人（ゆうと）もうきも選んでいるときからうるさかったのだけれど、もしかしたら内心は私がいちばんはしゃいでいたのかもしれません。

それに合わせて、居間を少し模様替えしました。ソファの前の小さなテーブルがあったでしょう？　あの、天板の端に傷があったやつ。あれを物置にしまって、そこにおこたを置きました。そしてソファは逆側の壁に。ちょっと狭苦しくなるかなと思ったのだけれど、二日も経つとそれらしく見えるものなのね。

今、ご飯はそこで食べています。有村（ありむら）や香月（かづき）が遊びに来るたび、帰る時間になってもおこたから出ようとしないので、引っ張り出すのに苦労しています。勝手に座椅子を買ってこようとしているので、それはなんとかやめさせようとしているのだけれど。

本当に、変わりないです。家のみんなも、学校の友人たちも、みんな元気です。

返事を貰（もら）って気がついたのだけれど、考えてみれば、あなたからのちゃんとした手紙を貰うのは、今回が初めてなのですね。メールはいくらもしたけれど、手紙を貰ったことはなかった。あれだけ姉弟としていっしょに過ごしていたのにね。

拓留（たくる）。

どんなことでも教えてね。くだらないことでも頼ってね。手紙のこともそうだけれど、私が気づいていないあなたのことが、きっとまだたくさんあるんでしょう。

正直に言うと、それは少し悔しい。だけど、どこかそれが楽しみでもあるの。

今さらだと思うことを教え合いましょう。前にお互いに聞いた話を、もう一度初めからしましょう。思いつかなくなったら、何度でも同じ話をしましょう。その中で、私はゆっくりとあなたに気づいていきたいと思っているの。勝手なこと言って、ごめんね。

急に冷え込んで来ました。

くれぐれも、身体には気をつけて。お腹を出して寝ないように。

また、手紙書きます。

草々

南沢（みなみさわ）　泉理（せんり）

一章

山添 うき

数年間にわたったその生活が自分に何をもたらしたのか、山添うきは上手く言葉にできなかった。冷静になって考えられる時間が経った今でもそれは変わらない。軟禁状態であったことは事実なのだから、おそらく外の人間からすれば、人権を無視された酷い生活に見えたのだろう。

しかしうきはそう感じたことはなかった。病院の地下の狭い部屋。与えられたことは実験の被験者であった患者の世話だけ。閉じた場所で繰り返される日常。当時のうきにとってそれは完璧だった。

自分の居場所はここであると、うきは思っていた。

ひどく印象に残っている一人の患者がいた。

老婆だった。正確な年齢はわからなかったが、孫がいてもおかしくない年頃だった。胸まで伸ばした黒髪が綺麗な、容姿も美しい女性だった。髪が自慢なのだろう、週に一度は決まった黒色で染め直すことをせがみ、枝毛一本許せない性格だった。刃物を渡すことは禁止されていたため、うきは四六時中その女性の枝毛を切ってあげていた。

「動物園行く？」

それが彼女の口癖だった。というよりその言葉しか話さなかった。髪を染めて、枝毛を切って、お腹がすいた、トイレに行きたい、まだ寝たくない、そのすべてを「動物園行く？」という言葉で表現した。うきが意図を摑めず困惑していると、彼女は自分の右手の甲を血が滲むまで噛んで不満を示した。

地下にいたすべての患者同様、精神に異常をきたしていた。なんとかコミュニケーションを図るため、うきは地下を管理していた研究者の一人に彼女のことを尋ねた。動物園というのが彼女にとってなんなの



「……うん」

「探そうと思って何度も叫んだんだけど、みんな叫んでたから、よくわからなかったんだ。大人の背中が壁みたいに見えた。逃げなきゃって思ったら、お姉ちゃんが手を引っ張ってくれて。とにかく、人のいないとこへ行こうって、ずっと引っ張ってくれた」

すごいね、とうきが呟(つぶや)くと結人(ゆうと)は頷(うなず)いた。

被災した当時、結衣(ゆい)はまだ小学二年生で、結人に至ってはその翌年からようやく小学校に上がるという年齢だったのだ。

「僕、ずっと泣いちゃってて。でもお姉ちゃんは泣いてなかった。ずっと、見ちゃだめ、見ちゃだめって、歩きながら僕を守ってくれてた。……僕の代わりに、いろいろ見なきゃいけなかったんだ。僕を引っ張らなくちゃいけなかったから。僕は、泣いてただけで、なにもできなかったんだ」

「……大丈夫？」

結人は話しながら膝を抱えていた。うきは自然と結人に身を寄せ、肩を抱いた。結人は動かなかった。

「お姉ちゃんも僕も喉がカラカラになって、足が痛くてもう動けないって思ったときに、誰かに追いかけられたんだ。大人の、男の人たちだった。必死で逃げた。どこかの崩れそうな建物に入って、お姉ちゃんが初めて手を離そうとしたんだ。僕は離してほしくなくて泣こうとしたけど、喉が痛くて変な声しか出なかった。お姉ちゃんは、ここに隠れてなさいって何度も僕に言って、僕をドアが壊れた部屋の中に置いていった。そこは……暗くて」

結人の手に力が入っているのがわかった。うきは慌てて話すのをやめさせようとしたが、結人は肩を抱いているうきの手を握り返してきた。

「お姉ちゃんは走って逃げた。あいつらは、お姉ちゃんを追いかけて……。僕は、怖くて動けなかったんだ。何もできなかった。しばらくして、お姉ちゃんとあいつらの、声が聞こえてきて」

「ユウ、ごめん、もういいから」

「動けなかったんだ。きっと、すぐ近くにいたのに。何も見えない暗い部屋で、お姉ちゃんの、泣いてる声を、聞いてただけだったんだ」

うきは結人を振り向かせて、思い切り抱きしめた。結人が胸の中で泣きながら呻くのが聞こえてきた。それでも力を緩められなかった。

「暗い所にいると、ときどきお姉ちゃんの声が聞こえる気がするんだ。お姉ちゃんは、僕を助けてくれたのに。僕は、何もできなかったんだ」

泣きながら話す結人を抱きしめるうち、いつの間にかうきも涙をこぼしていた。互いの寝巻きで涙を拭いながら、二人はしばらく動かなかった。

部屋の寒さを感じ、うきは自分と結人に布団を被せて横になった。

結人は泣きながら、時折胸の中で「……お姉ちゃん」と囁いていた。一度、なに、と返事をしてから、結衣のことを言っているのだとうきは気づいた。けれど結人は何も言わなかった。

「……お姉ちゃん」

「なに」

結人はずっと囁き続けた。うきも延々と返事をし続けた。

二人とも泣き疲れて眠るまで、抱きしめ合ってそうしていた。

抱きしめ続けた。

翌朝早くに泉理（せんり）は帰ってきて、開口一番「どうしたのその顔」とうきと結人を見て驚いていた。

二人ともすっかり目が腫れ上がっていた。「なんでもないよ」と結人がうきに薄く微笑んできたので、うきは微笑み返して頷（うなず）いた。

泉理は「なに、お姉ちゃんには内緒？」と言いながらも、楽しげに笑ってそれ以上訊（き）いては来なかった。

うきが学校から帰宅し、小森（こもり）も含めて全員で夕食の相談をしていると、訪問者があった。

「突然ごめんなさい。ちょっと、いい？」

玄関先で出迎えたうきは顔を見た瞬間に、あっと思い当たった。スーパーでときどき見かける主婦だった。いつだったか、小森が睨（にら）み付けるとそそくさと去っていった女性だ。

うきが驚いたまま立ち尽くしていると、主婦は「ちょっと、上がらせてもらっていい」と言いながら、了承も取らないまま玄関に上がり込んできた。小学生らしき男の子を一人、伴っていた。

「ちょ、ちょっと待ってください」

うきは二人をその場に押し留めて、二階へ泉理を呼びに行った。降りてきた泉理は、やはり見知った顔だったのか、主婦を見るなりわずかに眉を寄せた。

「なにか……？」

「ああ、あなたお姉さんよね。いえね、たいしたことじゃないんだけど、この子のことでね」

主婦は、後ろに隠すようにしていた小洒落た服の男の子を横に並ばせると、笑顔を浮かべた。男の子はあからさまに面倒くさい、という顔をしながらそっぽを向いていた。

「昨日ね、この子がふざけて投げた石が、ここの子に当たっちゃったって言うもんだからね」

あ、とうきは声を上げた。男の子の、小洒落た服装が目に入ってきた。

「……結人は、投げつけられたと言っていましたが」

泉理は距離を詰めるように一歩前へ出た。口調は穏やかだったが、手が握りこまれているのを、うきは見た。

「だから、ふざけててね。そうなんでしょ？」

男の子は申し訳程度に頷いた。ポケットに手を突っ込んでいた。

「まあ子どものしたことだから、こうやって大人が出てくるのもどうかとは思うんだけどね。その、大ごとにしてもなんじゃない？」

「どういう意味でしょうか」

「だから、大ごとにしてもなんじゃないって」

「……はっきりおっしゃってくれますか」

　すると、主婦は笑顔を消して泉理を睨みつけてきた。そこには明らかに侮蔑の色があった。あんたたちのような立場の奴が何様だと、目が語っていた。

「あらそう。じゃあ言うけど、騒がないでくれるとありがたいんだけど」

「騒ぐ？」

「だから。病院で事情を話したり……その、そういうこと」

「要するに、石をぶつけられたことには目をつぶれとおっしゃりたいんですか」

「ぶつけてないわよ。遊んでいただけでしょ」

　ふざけるな、と前に出ようとしたうきの身体を泉理が押し留めてきた。その手が震えていた。

　泉理は深く息を吐いた。必死に感情を押し殺そうとしているようだった。

「……今回の件をどうこうするつもりはありません。ただ、結人くんに謝ってください」

「なんでよ。遊んでいただけじゃない」

「謝ってください」

　繰り返す泉理に、主婦はぐっと顔を寄せた。

「あなたね。恥ずかしくないの、子どものしたことにむきになって」

「謝りなさい！」

怒声は唐突に、背後から響いた。
小森だった。結人の手を握り、ずんずんとやってきて主婦の眼前に立った。
「私はその場にいました。遊んでいたわけじゃありません。お子さんは明らかに、故意に結人くんに石を投げつけました。謝りなさい」
「……なによ大げさに」
「当たり所が悪ければ失明していてもおかしくなかった。謝りなさい！」
小森の剣幕に主婦はたじろいだ様子を見せたが、すぐに馬鹿にしたような笑いを浮かべた。
「あなた、ここの人なの。保育士さん？」
小森は頷いた。
「大変ね、お仕事とはいえ。でもね、謝るとか謝らないとか、そんな大ごとじゃないのよ。故意にとか失明とか、熱くならないで」
わかるでしょ、と主婦は笑みを深めて、同意を求めるように小森の肩をぽんぽんと叩いた。
「……そうですか。謝らないと」
「だから、そんなことじゃないのよ」
すると小森はため息をついて、うきたちのほうへ振り返った。
何かを確認するような目を向けられ、うきが何も返せないでいると、小森は「……あーあ」と言いながら頭をがりがりと掻いた。

　そして、主婦のほうに向き直った。
「では、謝罪がない場合、被害届を提出させていただきます」
「……は？」
「容疑は傷害。お子さんの名前と年齢、それからお宅の住所を教えてください」
「ちょ、ちょっとあなた何言ってるの」
「申し遅れましたが」
　小森は上着のポケットに手を突っ込み、手帳を取り出して掲げた。
「警視庁生活安全部の小森といいます。少年犯罪などを担当している部です。いいですか、お子さんのやったことは、完全に犯罪行為です」
　主婦は唖然(あぜん)として小森と掲げられた警察手帳を見ていたが、それはうきも同じだった。結人(ゆうと)もあっけにとられて小森を見上げていた。
「疑うなら名刺を差し上げますから、そこの番号に問い合わせてくださって結構です。お子さんの名前と年齢、それからお宅の住所を」
「あ、謝って」
　言い募る小森に、主婦は男の子の肩を小突いた。男の子は小森の態度と言葉に怖気(おじけ)づいたのか、すぐにポケットから手を出してぺこりと頭を下げ、「……ごめんなさい」と消え入るような声で言った。
「私じゃない。結人くんに謝りなさい」

「す、すみませんでした」
結人は下げられた頭に何も返せなかった。というより、あまりのことに混乱しているようだった。
男の子が頭を上げると、小森（こもり）がいきなりその小洒落（こじゃれ）た服の胸倉を掴（つか）み上（あ）げ、力任せに引き寄せた。
「いいかクソガキ。顔は覚えたからな。次やったら、問答無用で牢屋（ろうや）にぶち込むぞ」

ぐつぐつと鍋が煮えたぎる音がリビングの炬燵（こたつ）の上に響いていた。
膝は大丈夫だからリビングで食事にしようと小森が言い出したきり、会話がなかった。ときどき泉理（せんり）が思いついたように灰汁（あく）を掬（すく）う以外、動きもなかった。
「えーと……ね。私は、その……」
気まずそうに小森がちらちらとうきたちを見てきたが、視線を合わせるたびに逸らされた。居心地が悪く、うきは結人を見たが、やはり居心地悪そうに見返されるだけだった。
やがて、煮え立ちすぎていると思ったのか泉理がカセットコンロの火を止めた。
そして、やれやれというように大仰に息を吐いた。
「小森歩美（あゆみ）さん。二十八歳独身。警視庁の生活安全部所属で、埼玉の出身ですって」
え、と泉理以外の三人の声が重なった。
「短大で保育士の資格を取ったあと、上京して東京の保育園に就職。二十五歳のときに退職して、その年の内に警察官採用試験に合格。保育士としての資格と経験が買われて生活安全部に」

まるで書面を読み上げるようにつらつらと続ける泉理に、小森が顔をひきつらせた。

「ちょ、ちょっと、泉理ちゃん……？」

「青葉寮に配属された目的は三つ。一つは保育士としての業務。一つは警察官として加害者家族の保護。最後の一つは……拓留の量刑を操作するためのネタを探るためですって。検察がいざ求刑するときに、どうとでもできるように」

「……無期懲役か……それ以上かってこと？」

弁護士を目指している結人が言った言葉に、泉理はわからない、と首を振った。

「簡単には判断できない事件だから。小森さんが家計簿のプリントアウトを持ち帰ったり、私たちの部屋を調べたり、父のことを探っていたりしたのは、そういうことみたい」

「だ、だだ漏れじゃん……」

小森は頭を抱えて呻いた。

「……いつからばれてたの？」

「家探しや父のことは結人が一週間ほど前に気づきました。警察の方というのは二日前です。すみません、先日きな臭い電話が聞こえてしまったので調べてもらったんです。詳しいプロフィールや目的がわかったのは今朝のことです」

「……もしかして、渋谷署の神成さん？」

はい、と泉理は頷いた。

神成（しんじょう）は一連の事件の際に、うきたちが世話になった刑事だ。聞けば泉理は、レントゲン室で小森（こもり）の電話を聞いた夜に神成に連絡を取り、小森のことを調べてくれないかと頼み込んだそうだ。ほどなく警視庁の人間であるということがわかり、追加の情報を昨夜病院に泊まった際に、居合わせた神成から受け取ったという。

「記者の人じゃなかったんだ……」

呆然（ぼうぜん）と呟（つぶや）く結人（ゆうと）に、「そう見えてたの？」と小森はわずかに苦笑した。

泉理はそれを見て同じように口元を歪（ゆが）めたあと、小森に向き直って言った。

「さて。小森さん。私は今言ったあなたのプロフィールを、今日の夜にあなたが帰ったあと、結人とうきに知らせて、あとは黙っておくつもりでした。私たちがあなたのことを知っていると、あなたに教えるつもりはなかった」

「……だろうね」

「話したのは、あなたが自分から警察の人間であると言ってくれたからです。どうしてですか？」

「あの親子に腹が立ったから。特にあの母親。見たあれ。あり得ないでしょ。なんなのあの態度」

即答した小森は、忌々（いまいま）しい、という感じに机を叩（たた）いた。正体がバレたせいなのか、遠慮のない態度だった。うきと結人は驚き半分困り半分で、視線を泳がせた。

泉理は苦笑していた。

「小森さん、結構武闘派なんですって。カツアゲしてた少年たちを捕まえるときにやり過ぎちゃって、始末書を書いたこともあるみたい。二回ほど」

「なんでそんなことも知ってるの」

　頬（ほお）を赤らめて小森は叫んだ。

　怖さを感じたうきと結人は体重をずらして、バレないように小森から距離を取った。

「……それに。昨日、泉理ちゃん言ってたでしょ。大人になるってどういうことって」

「ええ」

「私は、考えたことなかったから、そういうの。……そんなあなたたちを見てたら、こそこそ正体を隠していろいろ探ってる年上の私はなんなのよって思っちゃったの」

「……そうですか」

　自棄（やけ）ぎみの小森の口調を聞いて泉理が笑ったのにつられ、うきと結人も笑顔を浮かべた。

「……この際だから訊（き）いちゃうんだけど。事件のことに関して何か知っていることはない？」

「取り調べで話した以上のことはありません」

「それは、うきちゃんも結人（ゆうと）くんも同じ？」

　二人は頷（うなず）いた。

「神成さんとあなたたちは、まだ何か知っていると上の人たちは見てる。神成さんにお会いしたことはないけど、私はあなたたちと過ごして、それは事実だろうなって思ってる。それでも、何も知らない？」

「知りません」

繰り返す泉理にうきたちも続いて頷いた。小森は真偽を測るように一人ひとりを見てきたが、うきたちが視線を逸らさずにいると、「……そっか。わかった」と諦めたように呟いた。

すると泉理はカセットコンロの火をつけ直した。

「じゃあ、食べましょう」

「……え」

小森が驚いたように泉理を見た。

「いいの」

「何がですか」

「追い出さなくて」

「そんな決定権、私にはありません。保育士の資格、持ってらっしゃるんでしょう？」

「そうだけど……」

「それに、今日のことは本当に助かりました。正直、私も摑みかかりそうでしたから」

話はおしまい、というように泉理はおたまを取り、小森の分の鍋をよそった。小森は、本当にいいの、というようにうきたちを見ていたが、やがてはにかんで泉理から取り皿を受け取った。

そのときふと、うきの中に考えが浮かんだ。
大事な決断であるはずのそれは、自然にまるで躊躇いがなく口から出ていた。
「じゃあ小森さん、移動してください。そこ、ユウの指定席なので」
え、と三人がうきを見てきた。うきは結人を見返した。
「ユウ、いいよね？」
「うん」
訊かれた結人も躊躇わなかった。
泉理の隣から足を抜いて、本来の自分の場所へ移動した。
追い出された小森は泉理の対面の席の前で立ち尽くしていた。
「姉さん、いいでしょ？」
驚いている泉理にうきが問いかけると、しばらく返事が返ってこなかったが、ややあって「まったく……」と呆れたように微笑んで頷いた。
「やっぱり、昨日の夜なにかあったんでしょう」
泉理は本当に嬉しそうに言った。小森はわけがわからない様子だったが、泉理に促されておとなしく席に着いた。
「なに、どういうこと？」
「小森さん。私よりうきのほうが、よっぽど大人なんですよ」

「……うそお」
それぞれ鍋をよそい、思い思いにつついた。
うきは三人の顔を見て、言った。
「今度の休み、みんなで上野の動物園に行ってみませんか」
突然の提案に三人は箸を止めた。
「……いいけど。あなた、パンダ好きだっけ？」
ううん、とうきは姉にかぶりを振った。
「ただ、行ってみたいの。行ったことがないから。そこがどんなところなのか、知っておきたいの」

間章

南沢 泉理

その二

それで当日は、夕方から雨が降ってしまったのですが、めぼしいところは全部回ることができました。じつは私も行ったことがなかったの。あなたは行ったことがある？　一つアドバイスをしておくと、いくらパンダでも寝てるところを見せられたら、寝てるね以外の感想なんて出てこないから、パンダが見たかったら開園直後とかエサの時間に行ったほうがいいみたいです。あの子、一度もこっちを向いてくれなかったの。

　結局いちばん印象に残ったのは、触ることができたウサギでした。わかってたことだけど、あの子、かわいいでしょう。最近、うきと結人（ゆうと）が代わる代わる飼えないか聞いてきます。昨日なんて、ウサギがお尻についたシャープペンを二人とも持ってて、ちらちら見せてきたの。あれ、完璧に作戦立ててるのね。受けて立つつもりですが、正直私がいつまでもつか自信がありません。

嬉（うれ）しいニュースを一つ。
最近、結人が例の発作を起こしていません。完治したとはまだまだ言えない期間しか経っていないんだけれど、なんだか最近明るい気がするの。間違いなく、結人にとって良い兆候だと思います。
　どうやらうきと何かあったらしいんだけれど、教えてくれません。隠し事はなしだって言ってるのに。まあ、だいたい想像はついているんだけどね。
　二人を見ていたら、なんとなくあなたが家に来たときのことを思い出しました。

うきが姉であろうとがんばっているからかしらね。意識が戻っていないあなたを、私が世話していたあのときです。初めて爪を切ってあげたときの緊張は今も覚えてます。痛くないか、傷つけないか不安だった。そんなときは、姉なんだから長女なんだからと気張ってそれを打ち消してました。あなたにはなんのことか伝わるでしょうが、きっとそこには本当の自分を誤魔化す意味合いも少なからず含まれていたんでしょう。

　ごめんね。私は、あなたを利用していた。

うきは、大丈夫です。私なんかよりよっぽど、ちゃんとした姉になってくれます。

あ、ついでだからこの際はっきりと書いてしまいますが。あなたあのときの話をするときに、いつもこの話題は避けていたんでしょうけれど、すみませんが排泄（はいせつ）の処理もわたくしがしておりました。年頃の男の子としての心中はお察ししますが悪しからず。ご了承ください。

以前お知らせした小森（こもり）さんについては、詳しいことは書けませんが大丈夫です。安心してください。少し喧嘩（けんか）っ早（ぱや）くて負けず嫌いなところがありますが、立派な保育士さんです。うきたちをしっかりと守ってくれると思います。

　家のこととしては、小森（こもり）さんにお任せしていた掃除と洗濯を、以前のように当番制に戻しました。小森さんの比重が重めのものなのですが、そうしないと私もうきも結人（ゆうと）も、どうしても気持ちが悪くて。ご飯

は相変わらず私が中心になって作っています。うきと張り合うように小森さんが料理を練習しているのだけれど、まだ時間がかかりそうです。二人に言わせれば我が家の食卓のハードルはとてつもなく高いそうなのですが、少なくとも小森さんに関しては私でなくともダメを出すと思います。ゆで卵を作ろうとして手を切るということが、私にはどうしても理解できません。あなた、わかる？

そうそう、炬燵(こたつ)ですが、結局有村(ありむら)でも香月(かづき)でもなく、小森さんが座椅子を買ってきてしまいました。予想どおり、全員が居心地良さそうにしてしまって、なかなか炬燵から出ようとしません。このままだと春になっても片づけようとしないのは目に見えているので、口うるさく言っているんだけどね。

相変わらず寒い日が続いています。くれぐれも、風邪などひかないように。

また、手紙書きます。

草々

南沢(みなみさわ)　泉理(せんり)

二章

香月（かづき） 華（はな）

香月華（かづきはな）がその女子生徒に声をかけられたのは、休み時間に自分の教室で、携帯機のゲームに熱中しているときだった。

「あの、それ昨日発売されたやつですよね？」

赤い縁の大きな眼鏡と、胸まで伸ばしたストレートの黒髪が印象的な女子だった。見た顔であるような気もしたし、そうでない気もした。少なくとも同じクラスではなく、話したことは一度もないはずだった。

突然話しかけられたことに戸惑いつつも、華は頷（うなず）いた。確かにこのソフトは昨日発売されたものだった。

「あたしの行きつけのとこ、売り切れちゃってて。移植前と比べてロード時間とかUI、どうなってます？」

「ん……ロード時間はほとんど変わってない。UIも簡略化されてるけど、違和感はないかも」

ゲーマーか、と思いながら華は答えた。すると女子生徒はなるほどと頷いたあとに、急にぐっと顔を寄せてきた。

「私、隣のクラスの初山瑞希（はつやまみずき）っています。すみません、ちょっと小耳に挟んじゃったんですけど、香月さんも〝エンスー2〟やってるんですか？」

放課後。

世間話のついでに初山とのことを華が喋（しゃべ）ると、雛絵（ひなえ）はへえと頷（うなず）いて、実におもしろいことを聞いたとでもいうふうに机に身を乗り出した。



「……拓留先輩は、それで、良かったんでしょうか」
　華と雛絵はもちろん、泉理たちが座ることを躊躇っていた席に、今小森は座っている。うきが言い出したことだと泉理から聞いていた。そうしなければならない。理屈も感情すらも理解できた。
　しかし、それでも。
「……それは」
　泉理の躊躇うような小さな呟きがはっきりと聞き取れた。華は目を逸らさずに言葉を待った。
「良かったに決まってんじゃん。かの偉人は言いました」
　切り出したのは雛絵だった。いつもの飄々とした口調だった。
「『大切だからこそ、しかし我々は離れなければならない。大切なものに甘えて、その大切さをまさに自分たちの手で貶めてしまう前に』。私たちを誰だと思ってやがる。私たちが共有している経験の強さをなめるなよ」
　あっけにとられた華とは対照的に、泉理は薄く微笑んだ。
「……小森さんのときは、正直うきに助けられたの。それから、小森さん自身にも。あの人から、自分の壁を取り払ってくれたからね。私は弱いから、何もできなかった」
「弱いって、どの口が……」
　ぽつりとこぼした雛絵に泉理は満面の笑みを浮かべた。雛絵は顔を引きつらせて後ずさった。

「あなたは強い子でしょう。初山（はつやま）さんがどんな子かは知らないし、あなたと何があったかも知らないけれど、少なくとも症候群に関することについては、あなたは初山さんより強い。本当に私が言えたことじゃないけど、であれば、わだかまっているものを取り払うのは……」

申し訳なさそうに言葉を濁した泉理に、華（はな）は頷（うなず）いた。言われなくても十分にわかった。

華はスマホを取り出し、先ほどの画像を見た。

くだらない。その一言だった。まったくもって、本当にくだらなかった。

「……ひな」

「なに」

「さっきの、誰の言葉?」

雛絵はもったいぶるように胸を張った。

「有村（ありむら）雛絵」

へえ、と自然と声が出た。文芸部も馬鹿にしたもんじゃないなと、華は思った。

「すみません、ちょっと用事ができたので、ここで失礼します」

「え、今から?」

雛絵は驚いて劇場を指差した。上映が始まる寸前になっていた。もうロビーには華たちしか残っていなかった。

「大切だからこそ離れなきゃいけないんでしょ?」

華が言うと、雛絵はパンフレットをばたばたと振って慌てた。
「そ、それとこれとは話が違うじゃん。お金払っちゃったんだよ。てか私、ぶっちゃけ三人で観(み)るの久々だから楽しみにしてたんだけど。このあとのコースも決めてあるんだけど」
「何も違いません。行ってらっしゃい、香月(かづき)」
「はい」
上映のブザーがロビーにまで響くと同時に、華は走り出した。「裏切り者！」とわめく雛絵の口を泉理が塞いだ。
握りしめたスマホの画像をスライドしながら、さてまずなにから取り掛かるか、と華は口元を興奮ぎみにつり上げた。

華(はな)が初山(はつやま)の家にやってきたときには、夜の八時半を回っていた。
初山が電話に出なかったので事前の許可なく来てしまったが、応対してくれた初山の母親は遅い時間にもかかわらず快く中に通してくれた。先日訪れたばかりの華の顔を覚えてくれていた。
母親に確認したところ、初山は部屋に閉じこもってしまっていた。やはりネットの画像が原因ということだった。「気持ちを考えると、無理に引っ張り出すわけにもいかなくて……」とこぼした母親の顔には疲れがあった。部屋の前まで案内してくれたときに、「私が話しますから」と華が告げると、母親は深々と頭を下げた。

「瑞希(みずき)、入るね」
華は返事を確認せずにドアを開けた。鍵はかかっていなかった。親との約束で、学校には行かなくてもいいし、部屋から出なくてもいいから鍵はかけないということになっているらしかった。
「……なんで」
呆然(ぼうぜん)とした声を出した初山はベッドの上に座っていた。
華はその姿を見て驚いた。胸まであった髪が、肩まで届かないほどに短くなっていた。眼鏡もかけていなかった。
しかし、どこかで見覚えがあった。華はすぐに思い当たった。ネットの画像だった。リハビリ中の初山の姿が、老化現象を除けば今の初山の姿とそっくりだった。
「……なんで?」
先ほどより少しはっきりとした口調で初山は繰り返した。
「画像のこと、聞いたから」
華がテニス部の友達の名前を出すと、初山は「……そっか」とうな垂れ、膝を抱えて顔をうずめた。
「電話、出れなくてごめん」
「……ん。私も、ずっと瑞希のこと避けてたから」
「……やっぱり、そうだったんだ」
たいしてショックを受けた様子もなく、初山は言った。

「ウィッグだったんだね。眼鏡も伊達(だて)？」
顔をうずめたまま、初山はわずかに頭を動かして肯定した。
「前にリハビリのときに撮られたことが原因なんでしょ？」
「なんで知ってるの」
初山は驚いて顔を上げた。
「それも友達から聞いたから。変装してたんだ」
「だって……嫌だから」
「テニス部に顔出さなくなったのも、それが原因？　他の幽霊部員の人たちは、身体が前みたいに動かないって思っちゃうことが原因かもだけど、瑞希(みずき)はテニスやってるところを絶対に撮られたくなかったんでしょ。テニスコート、外だもんね」
初山(はつやま)は諦めたように笑って、「さすが、宮代(みやしろ)さんの後輩だね」と言った。
「それなんだけど」
華(はな)はベッドの初山に近づき、ぐっと顔を寄せた。
「拓留(たくる)先輩は、瑞希が思ってるような人じゃない。あの事件は、症候群の人たちへの警告なんかじゃなかった。自分の姿にだって、気づいてなんかなかった」
初山は気圧(けお)されたのか身体をのけ反らせていた。華はさらに顔を近づけた。
「……拓留先輩が何を考えていたか、どういうつもりであの事件を起こしたかなんてわからないけど」

嘘を並べたとき、気持ちが傷んだ。耐えるために華は唇を噛み、爪を掌に食い込ませた。
「結衣ちゃん……妹さんのことだって、本当は望んでなかった。伊藤先輩だってそう。先輩たちは、そんな人たちじゃなかった」
「……そんなわけないじゃん。だって、あんな、日本中を騒がす事件だったんだよ。そうだ、知ってる？　日本だけじゃなくて、結構海外でも話題になってたね」
どん、と華はベッド脇の壁を叩いた。
言葉を続けようとした初山が驚いて押し黙った。
「瑞希は、どうしたいの」
「……え？」
「拓留先輩や伊藤先輩を自分の都合の良いように持ち上げて、どうしたいの。症候群の中にも正気の人がいたかもって思い込みたいの。それともそのことに気づいたのは自分が最初っていうことにして、他の症候群の人たちとは違うと信じたいの」
新聞部として事件を追っていたときのことが思い出された。心地良さとは真逆の感情が心臓をうるさくした。華は耐えて喋り続けた。
「そんなことしても、瑞希が元症候群者っていう状況は変わったりしない。画像の拡散や、拡散させてる人たちが減るわけじゃないんだよ」
「……そんなこと、思ってないよ」

否定する初山にはしかし力がなかった。目を逸らして顔を俯(うつむ)け、冬の外に叩き出されたように震えていた。

「だ、だって、そうだ、ほら。宮代さんがいちばん早く病気から快復したじゃん。偶然にしてはでき過ぎじゃない？　やっぱり最初から自分の姿に気づいてたんだよ」

どかん、と華は再度壁を殴りつけた。初山が身をすくませた。

壁紙にひびが入り、わずかに凹んでいた。

「拓留(たくる)先輩を、逃げ道にしないで」

初山(はつやま)は怯(おび)えていた。華(はな)は構わずにスマホを取り出して時間を確認した。二十一時前だった。付けっぱなしだった部屋のパソコンの前に、初山をベッドから引っ立てるように引きずりおろした。

「ちょっと、痛い！」

「見てて。時間だから」

ツイぽに入り、例の画像の拡散元のアカウントに飛んだ。

「やめてよ」

初山が目を逸らした。モニタにはあの四コマ漫画調の画像が表示されており、昼間映画館で見たときよりも拡散数が増えていた。

二十一時を回り、華は更新ボタンを押した。画面は拡散数がわずかに増えた以外変わらなかった。ベッドに戻ろうとした初山を、華は摑(つか)んでその場に引き留めた。「なに、まじやめてよ」と訴えてくるのを無視

し、それから華は数十秒おきに更新し続けた。
　五分が過ぎたころ、唐突に画面が切り替わった。『このページは存在しません』という文言が表示されていた。
「え……？」
　困惑する初山をよそに、華は念のためもう一、二回更新した。やはり『このページは存在しません』と表示された。華は「……ん」と頷いた。
「画像貼った最初の奴が、アカウント消して逃亡したんだよ。まあ、逃げられないと思うけど」
「……なに、それ」
「画像に学生証が使われてたでしょ。あれ、漫画喫茶でコピー取られたときのだよ」
　漫画喫茶のマシンやその他の設備は多くの人間が利用するため、不正行為に使用されたり破損したりしたときの措置として、顧客の身元を確認する目的で、身分証明証をコピーする場合がほとんどだ。華と初山が利用した漫画喫茶もそうだった。
　初山もそれはわかっていたようで、「それは、そうだと思ってたけど」とこぼした。
「取得した個人情報を勝手に第三者に提供するのは違反だから。症候群者の権利とかを守る活動をしてる団体に連絡して、抗議してもらった」
　熱心に対応してくれた団体だった。休日にすみませんと華が電話口で謝ると、むしろ活動にはっきりとした利益が見込めないこういった団体は、休日に活動しているほうが多いということだった。二十一時ご

ろに、店を通じて画像を拡散した本人と連絡がつくと言っていた。やはり従業員の一人が拡散元だった。泡を食って削除するだろうと思っていたが、案の定だった。

「瑞希（みずき）が漫画喫茶で女の人に撮られたって言ったじゃん。そいつ、拡散した従業員と友達だったんだよ」

　信じられないように初山（はつやま）はモニタを見つめていた。それから自分で何度も更新したが、表示は変わらなかった。

「でも……」

　初山は祈るような表情でキーボードとマウスを操作し、ツイぽをさらった。そこに出てきたのは、初山の画像が加工してある、例の四コマ漫画調の画像だった。

「……だよね」

　落胆した声が響いた。拡散元が消えたからと言って、すでに拡散してしまった画像のデータそのものが消えるわけではなかった。個人で保存して再度アップロードしたものなどに関しては、雨後の筍（たけのこ）のごとく延々とネットにはびこり続ける。

「……ん。だから、今回の人は逃がさないことにした」

　華（はな）は慣れた手つきで単語を打ち込み、ツイぽの表示を切り替えた。

「なにこれ」

　そこにあったのは、やはり四コマ漫画調の画像だった。しかし写っているのは初山ではなかった。華だった。初山と同じような構図で、症候群にかかる前、リハビリ途中、学生証、そして現在の華が写っていた。

「昼間に作った画像。拡散した奴のアドレスに直接送ってやったの。すぐにそいつのツイぽで拡散された。それもいっしょに団体に抗議してもらって、ついでにそのことを含めて逆にそいつのFACEMOOKとかを炎上させた。もうそいつの本名とか、学歴とか、あと瑞希の写真を撮った女の人のプロフィールとかもネットで晒(さら)されてる。二人、付き合ってた」

華はブラウザを操作してこの件がまとめられているページに飛んだ。目に黒線が入っているが、受付にいたあの店員だった。隣に、女性が写っていた。「……あいつだ」と、初山が呆然(ぼうぜん)と呟(つぶや)いた。

「……どうやったの」

「……ん。……まあ、いろいろ」

協力を仰いだ、久野里澪(くのさとみお)の不機嫌そうな声を華は思い出した。

最初は「知るか。自分でやれ」と断られたが、泉理(せんり)たちといっしょに月に一度、病院に代わる代わる泊まり込んで症候群の研究に協力していることを持ち出すと、舌打ちをしたあとに「お前の今の画像を送れ。一人笑いものにしたのと、連続して二人笑いものにしたのとでは、ネットの奴らの反応が顕著に違う」と言われて一方的に電話を切られた。

あとは状況を見つめるだけだった。あっという間に華の四コマ漫画調の画像が拡散され、何をどうやったのか、「あの病気の患者を次々と無断で晒している奴が話題に」というページが突然あちこちに立てられ、華(はな)の予想を超える速さで、拡散した従業員の暴き立てが始まった。

澪（みお）は気のない返事をしていたが、とてもそうは思えない手際の良さだった。夕方過ぎに再度連絡があり、「相手のＳＮＳに追い込みが始まった。そろそろ怯（おび）え出すタイミングだ。あとでメールで概要を送る権利団体に連絡を取れ。女が出たら男に代わってもらうように言え。団体員のリストもあとで送る。異性の奴のほうが動き出しが違う。拡散されて困っているんですと弱々しさを装って、男が女を手助けする際の満足感を誘導しろ。学生証の件を念押しして個人情報を晒（さら）されたと、団体として公式に動く口実を与えろ。もしその男に知識がないようだったら、個人情報保護法の第二十三条に違反していると言い添えろ。念のためお前も読んでおけ。お前が利用した漫画喫茶の規約の上から三番目にも明記してある。そのあとは団体の動きに合わせて好きにしろ。次のお前の泊まり込みは来週だからな」と不機嫌な声で一息に言われて、やはり返事をする前に電話を切られた。

この人は馬鹿なんじゃないか、と華は呆（あき）れた。明らかに楽しんでいると思った。

「拡散した人が追い込まれたって知れば、この画像みたいなことは、減っていくかも……だから」

「でも……なんで華まで、自分の……」

「そうする必要があったから」

実際にそれを言い出したのは久野里（くのさと）なのだが、華はむしろこれでいいと思っていた。

「それに、こんなの……なんでもない」

拓留（たくる）が決断したことに比べれば、自分のくだらない画像がネットに出回ることくらい、ささいなことにすぎない。

　モニタを見つめる華を、初山（はつやま）は呆然（ぼうぜん）と見ていた。
「……これが新聞部の、拓留先輩のやりかたなの。漫画喫茶の店員も、瑞希（みずき）の写真撮った女の人も、画像を拡散した奴らも……それから、店員の個人情報を晒した奴らだって。都合の良い情報に飛びついただけ」
　華はモニタの電源を落とした。相変わらず拡散や炎上が続くのだろうが、もう追う意味はなかった。
「瑞希も、そんなことはしないで。何考えてるかわかんないけど、拓留先輩と伊藤（いとう）先輩を、瑞希の都合に合わせないで」
　向き直って言った華に、初山は追い詰められたように目を潤ませた。見られないようにするためなのか下を向いた。
「……私、どうすればいい?」
「…………ん」
　昔の友人に同じことを言われたことを華は思い出した。
　剣道部の友人だ。姉妹のようだった。自分の声のせいで家族ごと壊してしまった友達だった。聞かれたとき、華（はな）は何も言葉を返せなかった。
　あのときとは状況が違っていた。しかし自分自身も違っていると、仲間といっしょに経験したことが華に自覚させていた。

「……踏ん張りなよ。拡散された規模は違うけど、私と瑞希（みずき）は同じ立場だから。私は踏ん張る。ほとんどがおもしろいからっていうだけで、私たちを苦しめてる。そんな連中のために、私たちが苦しんでやる必要なんか、絶対にない」

　パソコンの前を離れ、ドアに向かった。出ていく直前、華は顔だけで振り返った。

「……私の親友が言ってたんだけど。友達は出来るものじゃなくて作るものなんだって。私は今、作ろうとしてる。瑞希を友達にしようとしてる。でも瑞希が踏ん張れずに、まだ拓留（たくる）先輩や伊藤（いとう）先輩を逃げ道にするんなら、無理。友達にするのは諦める」

　反応は返ってこなかった。初山（はつやま）は床を見続けていた。

「……瑞希の、好きにすればいい。できれば友達になりたいと思ってるけど。……壁、へこませてごめん」

　華はドアを閉めた。

　何か教えてほしそうにしている母親に会釈だけして、華は初山の家を辞した。

　申し訳ないとは思いつつも、もう喉がからからだった。こんなに喋（しゃべ）ったのは、症候群にかかる前以来だなと華は思った。

　翌日の学校の休み時間だった。

　華が相変わらず携帯機のゲームに興じていると、その画面に影が落ちた。

　顔を上げると、初山が立っていた。華はぽかんとした。

「……なんか言ってよ」
「……ん。……えっと、その」
　黙って見つめあっている二人の空気が異物に映ったのか、クラスメイトたちがちらちらと視線を向けていた。
　髪が短かった。眼鏡もかけていなかった。
「……視力、どれくらいなの」
　ようやく聞いた華に、初山は「二・〇」と答えた。妙な間が流れたあと、どちらからともなく微笑んだ。
「テニス部、また行くの」
「うん。そうするつもり」
「……ん。瑞希、昼休み時間ある？　ちょっとお願いがあるんだけど」
　了承した初山を伴って、華は昼休みにいつもの部屋に向かった。
　ドアを開けると、すでに雛絵（ひなえ）と泉理（せんり）が来ており、お昼ご飯を広げていた。華（はな）と瑞希を認めると、雛絵は背もたれに思いきり体重を預け、スカートを翻して両足を机に乗せた。
「おうおうよく顔が出せたもんだなあ裏切りもんが。連絡一つ貰（もら）えなかった私と先輩の昨日の孤独を聞かせてやろうか。映画のあとのパスタは旨かったなあ。デザートのタルトもなかなかだったし。しかも安かったなあちゃんと苦労して調べたから。繰り返すぞリピートだ苦労して、調べたから。ああもったいない」
「有村（ありむら）、行儀悪い」

　泉理がぴしゃりと足を叩(たた)くと、雛絵はおとなしく机から足を下ろした。「初山(はつやま)さん？」と泉理が優しく訊(き)くと、雛絵の態度に面食らっていた初山が頷(うなず)いた。

「あの、部活のことなんですけど」

　華はそう言って、以前雛絵から貰った入部及び入会届を鞄(かばん)から取り出した。

　泉理が目を見開いた。

「決めたの？　どこ？」

「いえ、その前にちょっと聞きたいんですけど。部活とか委員会って、五人以上いないとだめなんでしたっけ」

「原則そうだけど……？」

　疑問を浮かべながら泉理は答えた。

碧朋(へきほう)学園は泉理たちの世代が第一期生にあたる、歴史の浅い学校だ。開校時に部活や委員会を設立した際は特に人数の規定はなかったが、現在は五名以上の所属が原則となっていた。

　華はそうですよね、と頷いた。

「じゃあ、新しく部活作りたいので、泉理先輩入ってくれませんか。ひなも」

　珍しく泉理が「……は？」ととぼけた声を出した。不機嫌そうに窓の外を見ていた雛絵も、唖然(あぜん)として華を見てきた。

「名前はまだ決まってないんですけど。概要は書いておきましたから」

華は呆けている泉理に書類を渡した。泉理は華の顔を見ていたが、華が書類に視線を落とすと、ようやく受け取ったことに気づいたように、書類に目を凝らした。

「『元カオスチャイルド症候群者を取り巻く環境について考える部活』……？」

はい、と華は頷いた。後ろの初山から驚きが伝わってきた。

「……ん。瑞希の件でいろいろ考えちゃって」

泉理はその概要だけが書いてある書類をじっくりと見たあと、華を見てきた。華がはにかむと、わずかに泉理は微笑んだ。

「……そう。いいでしょう、認めます。けど一つ約束して。昨日のことだけど、あれ、久野里さんでしょう」

やっぱりわかるか、と華は頷いた。泉理たちに連絡するのを忘れていたため、心配してネットで追いかけてくれていたのだろう。

「あんなことはもうしないで。ああいったことをエスカレートさせるわけにはいかない。私は二度と間違えるつもりはありませんからね」

「……はい」

華はしっかりと頷いた。言われなくてもそうするつもりだった。

「あと、部活じゃなくて委員会にしなさい。活動内容がそのまま学校全体に関わってくることだから、そのほうがいい。生徒会の傘下扱いにすれば、私も掛け持ちしやすいし、有村も部活に二つ入るよりは許可が下りやすいから」

「わ、私はまだ入るとは決めておらんなあ」
　突然今までの自分のキャラクターをなぞるように、雛絵（ひなえ）がまた背もたれに体重を預けて椅子を揺らし始めた。華も泉理もそれを無視した。
「部長……じゃなくて会長はあなたね。副会長は私がやります。それで、初山（はつやま）さん？」
「は、はい？」
　突然話を振られて初山は姿勢を正した。女帝の噂（うわさ）は下級生にも健在のようだった。
「あなたも、入ってくれるのかしら」
「え……っと」
　華が初山を見ると、「……お願いって、これ？」と訊（き）いてきた。華は頷いた。
「名義だけでいいから。テニス部との掛け持ちになっちゃうけど」
「……わかった」
　初山は真剣な顔で頷いた。「でも、ときどき手伝うよ」と言った初山に、華も頷いた。
　入会届の前に委員会の設立を申請する専用の書類を提出する必要があり、それぞれ直筆のサインが要るということで、華と泉理、初山はその書類に自分の名前を記入した。会長の欄がいちばん上だった。自分の名前が泉理より上に書かれていることに、華は妙なくすぐったさを感じた。
「有村も」と、泉理。
「さてどうしようかなあ。慰謝料的に何かを奢（おご）ってもらわなければ気が済まんなあ」

「早く書きなさい」
雛絵はおとなしく自分の名前を書いた。なおもぶちぶちと「だってさあ、楽しみにしてたのにさあ」と不満を漏らしていた。
華が雛絵から書類を受け取ると雛絵はまたつんと視線を窓の外に向けた。不満は相当根深いようだった。これは今度本当に何か奢ってあげなくちゃいけないかなと華は思った。
「ね、もしかしてさ」
何か感じるところがあったのか、初山が華と雛絵を見比べて、華の肩をつついた。
「なに」
「華の親友ってこの人?」
「まさか。そんなわけないじゃん」
「それ返せ!」
書類に伸びてきた雛絵の手を華はかわした。身まで乗り出そうとした雛絵を、泉理が片手で鷲摑みにして強引に座らせた。
「それで、もう一人のあてはあるの」
「はい。瑞希と同じでテニス部の人ですけど。名義は貸してくれるって言ってました」
それを聞いた初山は、思い当たったのか「……あ」と口を開けた。
泉理は少し驚いたような表情を見せたあと、満足げに頷いた。

「じゃあ、その人のサインを貰(もら)ってきて。できれば今日中に。明日の生徒会会議で議題に出して承認をとって、明後日には学校側に提出するから。部屋はここでいいでしょう?」

　華は頷いた。

「言っておきますけど引きこもってゲームばっかりやってたらすぐに解散させますからね」

　軽くかぶりを振ったあと、華は笑った。

「ん、大丈夫です。忙しくなるかもですし。それに、友達と出かけたりしたいですから」



間章
南沢(みなみさわ) 泉理(せんり)
その三

結局、名前は「学生自治研究会」に決まりました。

学校側としても、生徒側から積極的にこういった内容に取り組みたいという要望が出たのは、基本的には喜ばしいことのようでした。保護者からも好意的な問い合わせが来て、気の早い人は具体的な活動内容の提案までしてきました。香月（かづき）はちょっと面喰（めんく）らっているみたい。設立一日目にして「辞めたい」と言ってきたので、お尻を叩（たた）いてあげました。確かにちょっといきなり忙しすぎたのね。

そう、設立に関して謝っておかなければいけないことが一つ。

学校側に設立願を提出した際に、設立に反対してきた一人の先生が、新聞部のことを持ち出したの。「元新聞部の部員が会長と副会長で舵（かじ）を取って、新聞部の二の舞にならないと言えますか」って。それでそれまで好感触だった場の流れが変わってしまって。学校側からすると再開して間もない今の時期、対外的に発展する可能性のある活動に関しては敏感になっていたのね。

どうしても、言わざるを得なかった。「宮代拓留（みやしろたくる）が部長を務めていた部ではありません」って。大きな声で、はっきりと目を見て訴えるしかなかった。

本当に、ごめんなさい。

自治会の活動自体は、香月（かづき）が頻繁に駄々（だだ）をこねる以外は、今のところ順調に行っています。有村（ありむら）は文芸部とどちらが本業なのというくらい参加してくれているし、以前書いた香月のお友達二人も、テニス部の

合間を縫って手伝ってくれています。

そう、そのお友達二人と有村が一時期おもしろかったの。最初は香月の横に堂々と有村が座っていたんだけどね。香月が有村を挟んで二人と楽しそうに話していると、なんだか手持ち無沙汰みたいにして私に話を振ってきて。気持ちはわからないでもなかったんだけど、本当に有村と二人が対立して空気が悪くなっても嫌だったから、適当に返事をして自分でどうにかしなさいって信号を送っていたの。

そしたらある日突然、有村が「もう限界だ。第一回学生自治研究会カラオケ大会を開催することに私が決めました」って宣言して。嫌がる香月と私（お小遣いがなかったの）をひっ捕まえて全員をカラオケボックスに軟禁してね。「一人十曲歌うまで帰ることは許しません」って言うの。

二人と仲良くなりたいんだろうなっていうのはわかっていたから、仕方なく付き合ってね。でも五人だから五十曲でしょう。結局五時間半かかりました。お財布事情としては泣きそうだったんだけど、まあ楽しかったです。嫌がってた香月が、声は小さかったんだけど意外と上手だったのが印象的でした。

そういえば、あなたとは行ったことがなかったね。あなた、どんな歌を歌うの？　私は古い曲しか知らないの。十曲歌わされたときも、最初は四人に合わせてなんとかぼんやりと聴いたことがある新しい曲を歌っていたんだけど、途中で諦めてね。

私はよくわからないんだけれど、最近の曲の歌詞の浅さっていうのを有村が非難し始めて、それを香月のお友達二人が擁護して言い争いになって。結局それが良かったみたいね。翌日から四人で会話していました。

ああそれと、私事として変わったことというか、なんというか……。
今日、クラスの男の子から告白されました。

三章

有村（ありむら） 雛絵（ひなえ）

無言の応酬による教師との攻防が続いている最中、有村雛絵は鞄に入っている小説の内容を思い出そうと頭を探っていた。

　良くない傾向だった。自分で書いている小説の続きを考えるのではなく、読んでいる小説のことを考えているときは、気分が沈んでいる証拠だと雛絵はわかっていた。もっとも、事件以降は読むばかりでまったく書けてなどはいなかった。

　職員室だった。担任の教師は椅子に座り、脇に雛絵を立たせたままこつこつとペンで机を叩いていた。机には何も記入されていない進路希望調査票が載っていた。

　今回はずいぶん粘るな、と雛絵は思った。

「……確かに、期限の終業式まではまだ間があるんだけどな」

　職員室の大きな窓ガラスの反射に雛絵が顔をしかめたとき、担任が言った。

「お前以外は全員提出しているんだ。最悪、第三希望まで埋めなくてもいいんだが」

「まだ、進学と決めたわけじゃないんですけど」

「……うちのクラスは全員進学だぞ?」

　知ってます、と雛絵は頷いた。進路希望調査票には、進学と就職のどちらかに丸をつけ、進学の場合は第三希望まで大学や専門学校の名前で埋めることになっていた。雛絵のクラスメイトに、就職を希望している者は一人もいなかった。

変わらない雛絵の態度に、担任はペンを動かす手を止めた。明らかに仕方なさげな表情をして、進路希望調査票を雛絵に返した。

「週明けまでに決めておいてくれ」

終業式は週明けではなかったが、「わかりました」と雛絵は恭しく進路希望調査票を鞄にしまった。処世術処世術と頭で呟きながら、一礼してその場を離れた。

「と、そうだ。研究会の発表、がんばってくれよ。親御さんたちも期待してるみたいだから」

「うーす」

去り際にかけられた声に、雛絵は顔だけ振り向いて答えた。

職員室のドアを静かに閉めてから、言われんでもがんばっとるわいと舌を出した。

雛絵がいつもの部屋、元は新聞部の部室であり、今は学生自治研究会の会室にやってくると、泉理がノートPCに向かって猛烈な勢いでキーボードを叩いていた。横には書類が積まれており、雛絵が職員室に呼び出しを受けた前よりも、その厚さが増しているような気がした。

「ちゃおっすただいま帰りました……華は?」

「聞き取りの書類を積み上げてからまた出ていった」

「瑞希たちは」

「書類を出してくれて、あとはテニス部。……帰りにも書類を持ってくるらしいけど」

珍しく泉理が疲れた様子でこぼしたのを見て、雛絵はうわおと驚いてみせた。書類の厚さが増しているのは気のせいではなかったらしい。雛絵はその束を適当に取って、会室に以前から据え置きのPCに向かい、いくら埋めても終わる気がしないエクセルを立ち上げ、書類の内容を打ち込み始めた。

「担任から終業式の発表、がんばれってプレッシャーかけられました。保護者が期待してるんですって」

「……どうせまた誰かの親から電話がかかってきたんでしょう」

学生自治研究会を設立してから数週間。当初の想定を遥かに上回る作業量に、雛絵たちは忙殺されていた。

きっかけはささいなことだった。会長になった華が最初に言い出したことが、「学校の皆が症候群についてどう思っているか、どんな想いをしているのか聞きたい」というものだった。雛絵も泉理も賛成した。この研究会は、「元カオスチャイルド症候群者を取り巻く環境について考える」という題目の元に設立された研究会だ。華の言葉はその題目の第一歩として適切なものに思えた。

学校の許可を得て、全校生徒に研究会の設立を告知するとともに、アンケート用紙を配った。症候群に関することならなんでも書いてください、という漠然としたものだったが、これが想定外の回収量を見せた。提出は任意であったにもかかわらず、想像以上に症候群に関する想いが学生たちに蓄積していたのか、それとも「なるべく提出してください」と言った泉理の女帝としての迫力が強かったのか、初日から相当数が会室に届けられた。

以降は日を追うごとにその数が増えていった。メールで提出してくださいと言えばよかったと後悔しても手遅れだった。さすがに数週間が経った今ピークは過ぎているが、この期に及んでも「一枚じゃ裏面使っても書き切れなかったので、もう一枚用紙ください」と言ってくる生徒があとを絶たなかった。加えて真偽があいまいな内容や気になったことを書いてきた生徒に、直の聞き取りを行ったことも忙しさに拍車をかけた。いつの間にか「なんか研究会が症候群のことについて、いろいろ話を聞いたり質問に答えたりしてくれるらしい」との噂（うわさ）が広まり、手当たり次第に雛絵（ひなえ）たちは声をかけられるようになってしまった。それにより得られるものがあるのも事実なので、雛絵たちはあえてその噂の訂正はしなかった。

　すると今度はその噂を学校側が聞きつけた。即座に「そこまで大がかりに活動しているのであれば、終業式にその結果を発表するように」との命令が下った。断れる状況ではなかった。

　雛絵たちは役割分担を行い、華（はな）と初山瑞希（はつやまみずき）、それから同じく委員会に入った二谷麻知（にたにまち）の一年生三人が聞き取りを担当し、雛絵と泉理がその聞き取りとアンケートの結果をデータ化することになった。入力の速さからすれば雛絵より華のほうが打ち込みに慣れており、また本人もそちらのほうがいいとかなり強硬に訴えたのだが、「会長はあなたなんだから、あなたが矢面に立ちなさい」という泉理の一声でその主張は取り下げられた。

　学校側あるいは生徒自身から、保護者側にも終業式の発表のことは知らされているようで、詳細を求める電話などが連日かかってきているらしかった。

「……そういえば先輩、先輩方の学年の進路希望ってどんな感じなんですか」

雛絵は打ち込みの手を止めないまま訊（き）いた。

「どんな感じって？」

「進学か、就職か」

「今のところ、ほとんど進学ね。就職の人は学年で数えるくらいだったかしら。……まあ、卒業するころにどうなっているかはわからないけど」

二〇一六年十二月現在、雛絵は碧朋（へきほう）学園高等部の二年生、そして泉理は三年生に属していた。世間一般で言う通常の高校生活を送っているのであれば、すでに今年の三月段階で泉理は学校を卒業し、四月には雛絵が三年生に進級しているはずであった。だが症候群とそのリハビリの影響により、学校の再開後、全生徒はリハビリ前に属していた学年のまま復学する措置が取られた。そして泉理たち三年生に限っては、復学から卒業までが間もないという理由で、もう一年長く高校に通うことになっている。

「そのとき、私たちの代は二十歳になっているから。何か物思う人も出てくるんじゃないかしら」

「呼びかた決まってないって聞きましたぜ。四年生、でいいんすか？　来年四月から」

さあ、と泉理（せんり）は肩をすくめた。来年の四月には中等部の三年生が新たに高等部の一年生として入ってくることになっていた。一時的に高等部には四学年が所属することになる。

「……まさか先輩と同じタイミングで卒業することになるとは思いませんでした」

「それも今のところでしょう。法や社会がどうなるかわからないけれど、もしかしたらあなたも四年生になるかもしれない」

「先輩は五年生すか」
それはさすがに勘弁してほしいけど、と泉理がぼやくのを見て、雛絵(ひなえ)は苦笑いを浮かべた。
このようなややこしい措置が取られているのは、結局のところ元症候群者たちの扱いを社会がどうするか決めあぐねているのが根本の原因だった。学生の多くが進学を希望しているのは、現状だと就職より進学のほうが、元症候群者に対する差別や偏見などが社会的に少ないと考えられているからだ。通常の大学や専門学校であれば、受験して入学する場合、過去の精神疾患罹患(りかん)歴が入学資格に影響することは少ない。
だが就職となると話は違ってくるし、加えてカオスチャイルド症候群というものが、精神疾患の一種であるということ以外は明確に解明されていないこともあり、であればそもそも元症候群者たちが通う碧(へき)朋(ほう)学園を、通常の私立高校として認めて良いのかどうかという疑問を呈する声もあった。
一向に減っていかない書類を見て、雛絵はため息をついた。
「どうしてくれますかねえ……」
「どうしましょうね」
しばらくして指と目が疲れたのか、泉理がコーヒーを淹(い)れに席を立った。雛絵が「あざす」と言って自分の分を受け取ると、泉理は目を泳がせるような仕草をして、席には戻らず雛絵の傍に立ったままコーヒーを飲んだ。

また珍しいな、と雛絵は泉理を見上げた。何かを切り出そうとして躊躇(ためら)っているようだった。こういったとき泉理はふだんの頼れる姉から、年相応のあるいはそれより若い妹のように見えるのが、雛絵はずるいと思っていた。

「どしたんですか?」

なおも泉理は落ち着かない様子をしていたが、ややあってコップを両手で包み込み、その中に視線を落としながら言った。

「その……告白、どうなってるの?」

「……え」

その突然に、雛絵(ひなえ)は唖然(あぜん)とした。泉理(せんり)は雛絵の反応にやはり驚いていた。

「なんで知ってるんすか」

「え、昨日、告白されたんじゃないの?」

「いや、されましたけど……」

同学年の男子だった。クラスは違ったが友達の友達という奴で、顔も名前も雛絵は以前から知っている相手だった。

「……私も、されたんだけど。昨日」

「はあ?」

訊けば泉理に告白した男子は、「今ごろ俺の友達の後輩も、女帝の友達の有村さん呼び出して、告白してるはずだから」と言っていたそうだ。

男子二人は示し合わせて告白し、週末にダブルデートを計画していたという。

雛絵は呆れた。

「なんですかそりゃ」

「断ったの？」

「もちろん。先輩もでしょ？」

泉理は気まずそうに視線を逸らした。まさか、と雛絵は表情を変えて身を乗り出した。

「……保留にしてるの」

まじか、と雛絵は言葉を失った。泉理がそんな決断をするとは思わなかった。

「え、どうするんですか」

「……デートは、してみようと思っていて」

「……好きなんですか？」

自分の声の調子が下がったことに雛絵は気づいていた。
が、どうしようもなかった。楽しい恋愛話、という括りの会話には感情が入っていかなかった。

「……そういうわけじゃないんだけど」

「じゃあなんで」

はっきりと責める口調で追及した雛絵に、泉理は表情を濁した。

そうしなければ整理をつけられないとでもいうように、コーヒーをゆっくりと飲み、椅子に戻って慎重に腰を下ろし、自分の手をさすった。

「なんて言ったらいいか、難しいんだけどね」

ややあって話し出した泉理の声には、いつものような自信と強さはなかった。

「いろいろあったけど、今は私を受け入れてくれている人が学校にはいるわけでしょう」

「……その姿のことですか」

ええ、と泉理（せんり）は頷（うなず）いた。

カオスチャイルド症候群に冒されていた長い期間、泉理は症候群の代表的な症状である身体の老化現象に加えて、かつての友人である来栖乃々（くるすのの）の姿に変化するという特異な現象を発症していた。症候群から快復すると同時にその両方が改善されたのだが、それまで来栖乃々としてまわりから認識されていた自分が、南沢（みなみさわ）泉理として生きられるかどうか、快気した直後の泉理はわからなかったという。

無理もないと雛絵（ひなえ）は思っていた。なぜ泉理が乃々の姿に成り代わったのか、なぜそんなことが起こったのかを事件の真実とともに知っている仲間たちはともかく、事情を知らない人からすれば、簡単に受け入れられることではないのは明らかだった。

泉理は地道に理解を求めていった。最初は同学年の友人から始め、次に他学年で交流のあった者、次に同じタイミングでリハビリを行っていた者と、真実を明かすことはできなかったが、とにかく症候群の影響

で身体が変化していた、ということを説明して回った。雛絵たちもそれを手伝った。

　退院するころには、少なくとも泉理と学園で距離の近かった人間は、泉理のことを乃々の名前で呼ばずにいることが多くなっていた。

「告白してくれた子は増田（ますだ）くんっていって、同じクラスの子で。増田くんは当然、今まで私のことを乃々ちゃんとして見ていたわけだけど、今は南沢泉理として見てくれているのね。まあ、呼びかたは何度言っても〝女帝〟から変えてくれないけど。……その、初めてだったから。南沢泉理として、男の子から好きだって言ってもらえたのは」

「……そうなんですか」

「だから、ちゃんと考えたうえで返事をしたくて。つい、デートくらいならって」

　苦笑しながら「……自分のことは難しいね」と続ける泉理を見て、雛絵はバツ悪く顔を逸らした。

　昨日、告白されたときのことを思い出し、雛絵は泉理との距離を遠く感じた。

　強さを見せつけられた気がした。

「……泉理先輩は、拓留（たくる）先輩のことどう思ってるんです？」

　意地が悪い口調にならないように注意しながら、雛絵は訊（たず）ねた。

　泉理は即答した。

「好きだけど」

「……男としてですか。それとも、弟として？」

「さあ。どうかしらね」
「わからないんですか?」
「あなたは?」
　う、と雛絵はたじろいだ。
「……好きか嫌いかで言ったら、好きですけど」
「それは、男性として?　それとも戦友として?」
　唐突な単語だった。けれどそれは素直に雛絵(ひなえ)の腑(ふ)に落ちた。雛絵はその単語を確認するように頷(うなず)いた。
「戦友としては、間違いなく好きです。大好きです。男性としては……よくわかりません」
　そう、と泉理(せんり)は笑みを深めた。
「姉として、鼻が高い評価ね。ありがとう」

　下宿先の家に帰ると、叔父夫婦が夕食の支度をして待ってくれていた。
　大根となめこの味噌汁(みそしる)が食卓に並んでいるの見て、雛絵はばれないように苦笑して息を吐いた。これで三日連続だった。
「学校、忙しそうね」
「研究会の活動の知らせが来てたんだ。入ったんだって?」

会話を振ってくる叔母と叔父に、雛絵は笑顔を浮かべて当たり障りのない返事をし続けた。気を遣われているのがわかった。味噌汁にしても、雛絵が好物だと言ったからに違いなかった。そして雛絵はこの味噌汁が嫌いではないが好きでもなかった。三日前に味の感想を求められ、好物なんだとつい言ってしまっただけだった。

部屋に戻ると、雛絵はベッドに寝転んだ。

スマホを取り出し、石綿啓介の名前を表示させた。

告白してきた男子だった。いつ番号を交換したかは覚えていなかった。おそらくはまだ症候群の影響によって、自分が相手の言うことを嘘か本当かわかってしまっていたころだろうなと雛絵は思った。

放課後の校舎裏だった。

緊張でわずかに強張っている口をなんとか動かしながら、石綿は言った。

「前から、有村のことが好きだったんだ。付き合ってください」

「んおっと、ごめんよ。好きな人がいるんだ。許してくれい」

自分の言ったことを思い出し、雛絵は枕を自分の顔に押し付けた。息ができなくなるまで上から押しつぶし、足をばたつかせた。

嘘だった。はっきりと恋愛対象として好きな男性の顔など、あのとき雛絵の頭の中には浮かんでいなかった。石綿はあっけにとられて、そのあと苦しそうに顔を歪めた。

なにやってんだか、と雛絵は枕の下で呻いた。

学校が再開して以来、雛絵はそれまでと変わらない社交的な人柄で友人たちと付き合っていた。しかしその付き合いかたは以前とは違うと、身に染みて感じていた。症候群から快気し、相手の言っていることが本当か嘘（うそ）かわからなくなったことが大きいのだろう。何から何まで冗談を振りまいていたあのころとは違い、以前よりも地の性格を出す機会が多くなった。はっきりと本心で向き合えるのは、事件の経験を共有した華（はな）たちだけだが、それでも他の友人たちとも前よりは深い付き合いかたをしていた。浅くて広かった付き合いが深くて狭いものにと言ってしまえばそれまでだが、その変化は雛絵（ひなえ）にとって大きなものだった。

叔父夫婦との距離も変わった。いまだにお互いに気を遣いあっている微妙な間柄だが、それも症候群のただ中にいたころにはあり得ないことだった。叔父や叔母から距離を詰めようとしてくれていることも、そしてそのことを雛絵自身が反発せずに受け入れていることも、以前は想像すらできなかった。社交辞令的なやり取りや感情は、かつての雛絵が最も嫌っていたものだった。

あれだけ疎遠だった両親とも、時折だが電話で話すようになった。

前に進んだと思っていた。

しかし告白されたときに、雛絵がとっさに口に出した返事は、まるきり冗談と適当で固めたそれだった。

「……ちくしょうめ」

本当を鎧（よろ）わず、まわりの空気に調子を合わせながら、しかしその空気を心の中で疎外していたあのころのキャラクターそのものの姿だった。

石綿（いしわた）は顔を歪（ゆが）めていた。自分の適当な態度で、傷つけてしまった。

好きだと言われたときに、どこかで戦友の彼と何かを比べてしまっていたのだろうかと、雛絵は思った。

泉理（せんり）はきちんと向き合っていた。彼とあれだけ近かったにもかかわらず、告白されたときに今の自分としてそれを受け入れ、考えていた。うきが「姉さんには敵わない」とよくこぼしているのを雛絵は思い出した。

勢いよく身を起こし、雛絵はスマホを再び手に取った。

「もしもし、石綿くん？　有村（ありむら）ですけど」

用件を告げ、電話を切った。

雛絵は習慣から、読みかけの本を鞄（かばん）から取り出して目で追った。皮肉にも女性の主人公が二人の男性の間で愛情を揺れ動かしていた。

中身はさっぱり頭に入ってこなかった。

「先輩……」

「……なに」

「どしたんですか、その格好とメイクは」

「小森(こもり)さんが張り切っちゃって……。うきもそれに悪乗りしちゃって……」
待ち合わせ場所についた雛絵(ひなえ)は、いつもどおり律儀に時間より早く来ていた泉理(せんり)の姿を見て目を細めた。泉理は疲れ切ったように肩を落としていた。
ふだん前髪で少し隠れている泉理の顔がはっきりと出ていた。サイドに括(くく)った髪を前に流し、シュシュでまとめていた。ふだんは下地とリップ程度の化粧も、アイメイクと薄いチークが足され、より大人びた印象が強調されていた。服装もコートはいつもどおりだが、首元から覗(のぞ)いている服は泉理にしては明るめの色の高そうなものであり、挙げ句にヒールが高いブーツを履いていた。
「そんな服持ってたんですね」
「上着以外、服もメイクも全部小森さん。この靴なんて、あの人昨日わざわざ買ってきたの。何考えてるんだか……」
訊(き)けば昨日の夜と今日の朝は、ほとんど小森とうきの着せ替え人形だったという。たびたび強制的に感想を求められた結人(ゆうと)が身の置き場に困っていたと言う泉理に、雛絵は苦笑した。
待ち合わせの時間ちょうどに、二人の相手はやってきた。
泉理に告白したという増田康太(ますだこうた)は、失礼にも唖然(あぜん)とした表情を浮かべた。
「……どしたん女帝、その格好と髪型。いや、嬉(うれ)しいけどさ」

身長は男子の平均ほどだが、ややがっちりとした体格に黒縁の眼鏡をかけていた。目が大きく、寝癖と見分けがつかない癖っ毛と相まって愛嬌（あいきょう）のある顔立ちをしていた。

泉理はうんざりとした様子で答えた。

「放っておいて。家族にやられたの。あと女帝はやめて」

一方の石綿（いしわた）は一言で言って整った顔立ちをしていた。背もすらりと高く百八十センチを超えており、適当に流している髪がセットされているように似合っていた。

石綿は心なしか諦めたように微笑んで言った。

「……有村（ありむら）は、ふだんどおり?」

「そだよ。中身がいいから必要ないの」

訊けば二人は小学校からの友人だそうで、家も近く、家族ぐるみでの付き合いをしているということだった。

「あーてかごめん、俺たち他に場所あんまり知らなくってさ」

増田が言ったのに合わせて、石綿も頭を下げた。

待ち合わせたのは昼過ぎの、見慣れた渋谷駅前だった。今日の時間と場所は男性陣に一任していた。

本当に申し訳なさそうにしている二人に、「気にしなくていいっすよ」と雛絵は笑顔を返した。

初めに連れていかれたのは、渋谷駅から歩いて五分程度のところにあるプラネタリウムだった。「星好きなの？」と雛絵が訊ねると、「や、別に。ただ映画より短いし、混んでないし」と石綿は苦笑しながら答えた。へえ、と雛絵は思った。そういえばデートというのはそういったことを考えるものだった。入ってみるとなるほど悪くなかった。おそらくは小学校の何かのイベントで来て以来だったということもあるのだろうが、今夜の星空の解説という単純なプログラムでも、雛絵はわりと新鮮に楽しめた。

雑貨屋とCDショップを冷やかすというので、雛絵と泉理はそれに従った。CDショップはともかく男子高校生が雑貨なんか興味あるのだろうかと雛絵は思ったが、気を遣ってコースを考えてくれたのだろうから、遠慮なく楽しむことにした。

道々の石綿との会話は、ほどよいものだった。もっとぐいぐいといろいろなことを訊いてくるかと雛絵は思っていたが、案外とわきまえていた。雛絵はそれがありがたかった。一方の泉理と増田は、聞こえてくる限りどうやら増田が一方的に泉理に叱られたり怒られたりしているようだった。増田がお調子者のようで、泉理は「あのねえ……」とため息を繰り返していたが、本気で呆れているわけではなさそうだった。学校でもああいったやり取りをしているのだろう、会話に慣れのようなものがあった。

雑貨屋はプラネタリウムから歩いて十分ほどの駅の反対側、井の頭通り近くのビルに入っていた。

エレベーターの扉が開いた瞬間、四人は同時に身を固めた。

原因ははっきりしていた。雛絵は自分たちの後ろに並んでいた他の利用客が訝しんでいるのを感じ、先んじてエレベーターに乗った。他の三人も無言で後に続いてくれた。「雑貨とか興味あるの？」と雛絵は誤

魔化しぎみに石綿に訊いた。「じつは雑貨屋自体初めて」と乗っかって答えてくれた石綿に、皆で軽く笑った。

雑貨屋で雛絵は泉理とともに卓上小物を冷やかした。泉理はウサギをあしらったメモホルダーに目を留めていた。「相変わらずうきたちがウサギ作戦実行中なんですか」と訊くと、「名前の候補まで出してるの。オスメス別にたくさん」とため息をついた。案の定、男性陣は手持ち無沙汰ぎみだった。

その困ったような顔に免じて、雛絵たちは早めに雑貨屋を出た。

帰りはもちろん階段を使った。

もう一度あのエレベーターに乗る気にはなれなかった。

雑貨屋からほど近くにある大手のCDショップを見たあと、さらに少し北上して公園通り沿いのエスニック料理屋に入った。数席あるカウンター以外は、不揃い(ふぞろ)いに並べられた大小さまざまなソファが客席になっているお洒落(しゃれ)なところだった。店内の装飾や薄くかかっている音楽も雰囲気が良かった。石綿曰(いわ)く、よく利用しているとのことだった。

似合わないなあと雛絵(ひなえ)は思ったが、メニューを見て納得した。値段は高校生が日頃飲み食いするにしては少し高めだが、主食のものほとんどすべてに「大盛り注意」量が多いです」と注意書きがされていた。泉(せん)理(り)も同じことを思ったのか、苦笑いを向けてきた。時間はランチタイムを過ぎた十五時ごろだったが、休日は深夜の閉店時間まで通し営業しているらしく、数組の若者やカップルが先客として座っていた。

確かに一人ではとても食べきれないだろう大盛りのタコライスを、雛絵が泉理とシェアしていると、石綿（いしわた）が言った。
「有村（ありむら）と……南沢（みなみさわ）先輩は、どういう知り合いなんですか？」
「どういうって？」と、雛絵。
「や、今は研究会が一緒だけど、前は違ったんだろ？　昔から知り合い？」
「いんや。高校入ってから」
「有村は文芸部の部長で、私は生徒会の会長だから。その関係で話すようになってね」
補足するように言った泉理に、雛絵はなるほどと思った。確かにそれは事実だった。
そうだったんですか、と石綿は頷（うなず）いた。
「有村、意外と今の研究会、がんばってるよな」
「意外ととはなんだい、意外ととは」
「や、まじな話。前はそういう活動みたいなの、そこまでちゃんとやるようなキャラじゃなかったじゃん？」
う、と言葉を詰まらせた雛絵に、泉理が「よく見てるのね」と楽しそうに返した。
石綿は照れ臭かったのか誤魔化すように頭を掻（か）いた。
「……まあ、キャラがまったく変わらなかった奴なんて、碧朋（へきほう）にはあんまいないですけど」
それとなく石綿が続けた言葉に、自然と沈黙が下りた。

しばらくして「ま、な」と継いだ増田の表情はどこか硬いものだった。たぶん自分も同じ顔をしているんだろうな、と雛絵は思った。

大きなコップに入ったラッシーを雛絵が啜っていると、近くの席に座っているカップルの声が聞こえてきた。目をやると、おそらくは同年代の高校生と思われるカップルだった。

進学と就職の話をしていた。

聞こえてきた内容に、雛絵は気持ちがはっきりとささくれ立つのを感じた。顔に出ていたのか、つんと泉理から軽く眉間を突かれた。

さすりながら視線を戻すと、石綿と増田もどこか居心地が悪そうにしていた。

「……そういえば。研究会に俺らの親から、なんか要望みたいなの、いろいろ届いたりしてる？」

しばらくして、石綿が話題を変えるように言った。

雛絵はカップルの声を耳から追い出すように、大きめの声で答えた。

「あー、結構来てるよ。なんか学校側にも直接言ってる人がいるみたい」

「そっか。悪い」

「悪いって、なんで？」

「俺の母さんがそういうのにやたら熱心でさ。なんか他の親といっしょにグループみたいなの作っていろいろやってんだよね。この前も……」

と、石綿は言葉を濁して顔を歪めた。誤魔化すように水を口に運んだ。

「どしたん?」と、雛絵。

「や、たいした話じゃないんだけど、せっかくデートしてんのにさ」

すると泉理(せんり)が「気にすることない」と、口を挟んだ。

「何か、私たちの研究会とか症候群についての話なんでしょう?　別に大丈夫」

それでも石綿は言いづらそうにしていたが、もう一度泉理が手で促すと、「……はい。すみません」と頷(うなず)いて話し始めた。

「ほんとたいした話じゃないんです。少し前、コウちゃんといっしょにバイトの面接に行ったんですけど。コンビニの」

コウちゃん?　と思わず雛絵が口に出すと、増田(ますだ)が自分を指差し、「俺おれ。増田康太(こうた)」と言い添えた。

「なんか若い店長がやってる適当っていうかアットホームっぽいところで。バイト志望ですって言ったら、二人ともすぐに採用みたいな感じになって。人が足りないから助かった、みたいな。で、いちおう履歴書とか親の同意書見せてって言うから、持ってった書類見せたんですけど……」

そこまで聞いた段階で泉理は「……なるほどね」と頷いた。雛絵も内心そう思った。

「急に、あ、しまった、みたいな感じになって。どこかに電話とかかけ出したりして。それで、とりあえず今日はいったん帰ってくれ、採用するかどうかは改めて電話するからって言って」

「……それで、結局落とされた?」

泉理が後を引き取ると、石綿は「はい」と頷いた。

「まあ、碧朋の奴だってことがわかった時点で、絶対ごたごたするんだろうなとは思ってたんで、別に驚きはしなかったんですけど……。ただ、それを知った母さんがなんか怒っちゃって。コンビニに電話とかして、なんで落とされたんだってクレームつけ始めて。や、ほんとそれだけの話なんですけど」

　雛絵は「……うわあ」と大きく呟いた。

　歯に物が挟まったような表情を浮かべて、泉理が言った。

「確かに、ずいぶんと熱心な親御さんね」

「まあこいつん家、母ちゃんと二人きりだから」と、増田がフォローするように言った。

　なるほど、と雛絵は思った。

　雛絵自身、人の家庭事情を珍しがるような環境ではないが、直截に母親のことを話題に出す男子高校生は稀だと感じていた。母子家庭だと、そういった意識は違ったりするのだろうか。

「てかどうなん女帝、こういうのって研究会に相談したほうがいいの？」

　泉理は飽きた儀式のように「女帝はやめて」と増田に前置いてから、

「何とも言えないかしら。もちろん、とても参考にはなった。私の知ってる限りでは、現在進行形でバイトの面接に行った子は碧朋にはいないから。ただ、仮に研究会に持ち込まれたとしたら……」

　考え込む泉理を見て、雛絵も頭の中でいろいろとシミュレーションをしてみた。

　結果はすぐに出て、雛絵は泉理に訊いた。

「……難しいですよね？　正式に雇われたうえで理由なく不当に解雇された、とかならともかく」

「……そうね。私も有村(ありむら)も詳しいわけじゃないけれど、判をついてない段階の口約束で雇うってことを言われてるだけだと、どうにもならないと思う」

厳しい表情をする二人を見て、石綿(いしわた)は慌てた様子で手を振った。

「いやいや、わかってます、大丈夫です。別にどうこうしようって思ってないですから。ただ、なんていうか……なんだかなあって」

呟(つぶや)かれた声をかき消すように、近くの席のカップルの声がまた大きくなった。

進学と就職の話は終わったのか、笑っていた。

なんだかなあ、と雛絵は石綿の言葉を無言で繰り返して頷(うなず)いた。そして、むしゃくしゃしてきた気持ちに逆らわず、自分の飲み物を掲げた。

「乾杯しましょう」

え、と他の三人が雛絵を見た。

「とにかく乾杯です。私たちのなんだかなあ、に。はい飲み物持ってー」

おずおずと飲み物を持つ三人の戸惑いには構わず、「かんぱーい」と雛絵はコップを打ち鳴らした。

その後はカラオケに行って解散となった。雛絵はまったく気にしなかったが、「まあ、無難なコースなんでしょうけど……」と泉理は若干食傷ぎみだった。先日雛絵が強行したカラオケでの、五時間半にわたる軟

禁がまだ尾を引いているらしかった。

　男性陣と別れたあと、泉理が訊いてきた。

「そういえば今日、石綿くんにはなんて言ってデートを了解したの？　告白は断ったんでしょう？」

　雛絵は多少ばつが悪そうに答えた。

「……ちょっと、もう一度ゆっくり考えさせてほしいって。だから、付き合うのがオッケーっていうわけじゃなくて、その……。とりあえずのデートというか」

「そう。あの子、いい子じゃない。格好良いし」

「そうっすか？　増田先輩こそ、いいんじゃないですか、にぎやかで」

　言ってから泉理を見ると、何やら微妙な表情を浮かべていた。雛絵はなんとなく気持ちがわかり、仕方なく笑った。

「なんか、合コンのあとの品評会みたいでイヤですなあ。女が下がってる気がぐいぐいしますよ」

「……そうね。慣れないことはするなってことかしら。というかあなた、合コンしたことあるの？」

「あるわけないじゃないですか。あれ何が楽しいんですかね」

　家に帰ると、思っていた以上に気を張っていたのかどっと疲れが出て、雛絵は叔父夫婦との会話もそこそこに部屋に戻った。

ベッドに横になり今日のデートのことを思い返した。薄情にも浮かんできたのは石綿たち当人のことではなかった。

雑貨屋のエレベーターのこと。

居合わせたカップルのこと。

そして石綿が話したアルバイトのことだった。

なんだかなあ、と漏らした石綿の言葉が案外とてつもなく自分の気持ちに対して正鵠（せいこく）を射ていたのかもしれないな、と雛絵は思った。

ふと、進路希望調査票のことが頭に浮かんできた。

週明けである明日に提出することになっていた。雛絵はまた「なんだかなあ」と呟（つぶや）き、疲れた身体を無理やり起こして、机に向かった。

翌日から、学生自治研究会は忙しさがさらに増した。

活動の発表の場である終業式が来週末に迫り、せめて今週中にはすべての質問や要望をデータ化しておかなければ間に合わないと判断されたためだ。雛絵と泉理は引き続きペースを上げてデータをまとめ、瑞希（みずき）と麻知（まち）はテニス部をいったん完全に休んで聞き取り調査に専念してくれることとなり、華（はな）は今のうちに発表の草案を作成して学校側に許可を得ることとなった。

「泉理（せんり）先輩、ちょっとすみません」

研究会室でその草案を、持ち込んだノートPCで作成していた華（はな）が言った。
「おおざっぱには出来たかも……なんですけど」
「どうしたの？」と、泉理。
「ん……それぞれの委員会の委員長とか部長からのコメントが、別枠にして書いてあったほうが、それっぽいかなって。委員会や部からの意見として見やすいかもだから。それで、そのコメントの聞き取りは私より生徒会で面識のある先輩のほうが……」
「……へえ」
泉理はデータを打ち込む手を止めて、華のほうを見た。
「私を使うなんて、頼もしいね」
「ご、ごめんなさい」
「違う違う、皮肉じゃなくて本当に感心してるの。良いアイデアだし、正しい判断だから」
じゃあさっそくと言って泉理は、華が「そんな、今すぐじゃなくても」と止めるのも聞かずに出ていった。
雛絵（ひなえ）も内心感心していた。
思わず、華を目で追ってしまっていた。
「……華、なんか変わった？」
「なにが？」
「いや……なんとなく……なんとなくというか……その、なんとなく」

なにそれ、と華は笑うと「今のうちに瑞希（みずき）たちから書類貰（もら）ってくるかもだから」と言って、せわしなく席を立った。

雛絵は変わらずそんな華を見ていた。視線に感情があったわけではないだろうが、何かを感じ取ったのか、出ていく前に華は振り返って言った。

「……んん。変わったなんて思ってないけど。ひな、前に言ったじゃん。『大切だからこそ、しかし我々は離れなければならない。大切なものに甘えて、その大切さをまさに自分たちの手で貶（おとし）めてしまう前に』。……合ってるよね？」

「え？　う、うん、たぶん」

雛絵はつらつらと出てきた言葉に、いささか気圧（けお）されながら頷（うなず）いた。先月だったか、華が瑞希のことで悩んでいたときに、確か劇場で言った言葉だ。その場で思いついて言ったため、正確には覚えていなかった。

「この考えかた、私結構好きかも、だから」

どこか照れたように華はそう言い、部屋を出ていった。

一人残された雛絵は言われた返事が響くままに黙らざるを得なかった。作業の手を止めたまま、しばらくそうしていた。

知らない場所で迷子になったような不安を雛絵（ひなえ）は感じた。

「……よく言ったもんだ」

そう呟（つぶや）いて、雛絵は鞄（かばん）から進路希望調査票を取り出した。

白紙だった。結局書くことができなかった。担任には「研究会の活動で忙しくて」と事実だが本心からは遠い言い訳をして誤魔化した。
泉理（せんり）は看護師を目指すために、進学で提出したと聞いた。そして華（はな）は理系の大学に進学を希望していた。具体的になりたい職業などは決めていないらしいが、少なくとも進学に迷いはないようだった。
全員が動いていた。
「そうして最後に私だけが残った……ってか」
以前であればたいした迷いもなく進学を希望して、自分の学力にあった適当な大学の名前を書いていただろうなと雛絵は思った。というより、取り立てて大事なこととは考えなかったかもしれなかった。たかが進路希望調査票、紙切れ一枚だ。仮に進学と書いたからといって絶対に進学しなければいけないわけではない。あとでいくらでも変わっていくことだ。
けれど今は、そう考えられなかった。そう捉えてはいけない気がした。
雛絵は今までに読んできた小説のことを漠然と思い返した。こういった状況の登場人物は何人もいたはずだ。そのとき、彼らや彼女らはどういった決断をしてきただろうか。決断を下したときに、何を思っていただろうか。
——そして、戦友の彼は。
と、出し抜けに携帯電話が鳴った。

表示された発信者を意外に思いながら、雛絵は電話を取った。物思いに沈んでいた自分を引き上げるために、ことさら明るい声で言った。
「ちゃおっす石綿くん。どったの？」
「……いきなり悪い。ちょっと相談したいことがあって」
　代々木にあるＡＨ東京総合病院に雛絵が着くと、正面入り口のロビーで石綿が申し訳なさそうな顔をして待っていた。
「ほんとごめん。迷惑だって止めたんだけどさ……」
「いやいや、いいよ。そのこと自体はともかく、連絡してくれたのは助かった」
　雛絵たち元カオスチャイルド症候群者にとっては馴染みの病院だった。症候群の治療と研究を一手に引き受けている病院であり、今も特に精神的に快復できていない症候群者たちが多く入院している。雛絵自身も、半年近く前はここのベッドに寝ていた。
　つい先ほどのことだったという。
　石綿が義務付けられている定期健診にやってきた際、おそらく週刊誌と思われるマスコミが取材に来ていた。それ自体は珍しくないことだったので、向けられたレコーダーを無視してやり過ごし、石綿はいつもどおり健診を受けた。

が、健診が終わって出てくると、いつも必ず付き添いで来ているという母親がマスコミの取材を受けていた。母親は浴びせられる質問に答えながら、元症候群者の保護者の有志たちで集まって、この病気の問題に対して取り組んでいる旨を話し、そこで学生自治研究会の名前を出したというのだ。

学校側も症候群の当事者である学生主体の研究会というものを作り、私たち保護者の集まりもそれと連携して問題の解決に取り組んで行く、という発言の流れだったらしい。マスコミ側はその研究会という単語に食いつき、母親はマスコミが食いついたことに食いついた。マスコミが研究会のことを知りたいのであれば、研究会側もマスコミに対して症候群の現状をいろいろと逆に取材したほうが今後の活動のためになるだろう、と考えた母親は学校側に電話で連絡しようとした。

思わず石綿はそれを止めた。しかし母親はこんな機会なかなかないんだからと聞き入れず、仕方なく石綿は研究会員である雛絵（ひなえ）に連絡を入れたということだった。

「学校側はなんて?」と訊（き）いてきた石綿に、雛絵は悩ましく眉を寄せた。

「今は余計なことは言わないようにって。まあ今の研究会に言えることなんてほとんどないんだけど。そもそも出来てからまだ一ヵ月経ってないしね。とりあえずそれだけ直接伝えに来たんだ。で、お母さんとマスコミどもは……もしかして上?」

「ああ。五階の精神科。あの、いつも健診で待たされる小さなロビー」

うわお、と雛絵は大げさに呻（うめ）いた。病院に入り込むだけでもマスコミは結構な許可やら手続きやらがいるはずだが、そこまで行くとは見上げたものだった。

すっかり顔馴染(かおなじ)みになっている総合受付の看護師に軽く会釈し、雛絵と石綿は階段で五階へと向かった。

「ほんとごめんな、なんか巻き込んだ感じになって」

「全然。何度も謝んなくていいって。もし母君から学校側に直接連絡行ってたら、もうちょっと大騒ぎっていうか大事みたいになって、結局は研究会のほうに面倒な形で飛び火してたと思うから。助かった助かった」

入院中にリハビリも兼ねて何度も往復し、段数まで完全に覚えてしまっている階段を上がりきると、優しい配色のベンチが数脚置いてあるロビーに出た。その隅でスーツを着た女性と、二人組の中年の男たちが話し込んでいた。マスコミだろう。雛絵が目で問うと、石綿は頷(うなず)いた。

近づいて、まず雛絵は驚いた。

石綿(いしわた)の母親を、なんとなく勝手に口うるさくて厳(いか)つい外見をしている女性だと雛絵は想像していたのだが、およそそれと真逆だった。セミロングの落ち着いた髪型が似合っている人当たりが良さそうな美人で、すらりとしたモデル体型だった。石綿の母親なのであれば、どんなに若くても四十歳に近いだろうに、とてもそうは見えなかった。三十代前半で十分通るだろう。

「母さん」

石綿が声をかけると、母親はすぐに振り向いて雛絵(ひなえ)に目を留めてきた。

　正面から見てもやはり美人だった。一瞬、気が引けそうになったが、先手先手だと雛絵は胸中で呟(つぶや)いて自分から頭を下げた。
「はじめまして。石綿くんの友達の有村(ありむら)雛絵と言います。碧朋(へきほう)の学生自治研究会に所属してます。えっと、このたびは……」
　どこから切り出すかと、躊躇(ちゅうちょ)したわずかな時間だった。いきなり母親が雛絵の腰に手を伸ばしてきた。そのまま抱かれるような形で雛絵は引き寄せられた。
「ほら。こんなかわいい子だっているんです。外見でどうこうなんて言えないでしょ？　伝染する病気でもないんですから――見て、全然平気です」
　次に手を恋人同士が繋(つな)ぐように絡めてきた。そしてその手を、目の前にいるマスコミに見せつけるように掲げた。
「母さん！」
　石綿が諫(いさ)めるように小さく怒鳴ると、母親はあっさりと手を離した。雛絵があっけにとられていると、どういう反応を求めているのかわからない笑顔を向けてきた。
　うっ、とこみあげてきた感情が表に出ないように雛絵は必死で耐えた。
　この距離の詰めかたはやっかいなタイプだ。以前の自分であれば先ほどの母親の言葉が嘘(うそ)か本当かを判断し、それを元に母親が気に入るような行動を取るんだろうなと雛絵は思った。

あえて愛想笑いを雛絵は浮かべなかった。わずかに母親の表情が硬くなるのがわかったが、それは無視した。事務的な口調を強調するように雛絵は言った。

「先ほど、この件について学校側に確認を取りました。学校側――というか研究会側としては、今の時点でマスコミの皆さんにお伝えできることは特にありません。申し訳ないですが」

マスコミの二人組は怪訝（けげん）な顔を浮かべた。が、声を上げたのは母親が先だった。

「どういうこと？」

「そのままの意味です。今、研究会は全校生徒の意見を訊（き）いてそれをまとめる作業をしている最中です。発足して間もないので」

「どういった意見が出ているの？」

「ですから、それをまとめている途中なんです」

すると、ごめんねとマスコミの一人が口を挟んだ。手にはレコーダーを持っており、それを無遠慮に近づけてきた。

「研究会を学生主体で設立した、というのは事実なんだね？」

「はい」

「君は、そこの責任者なの？」

「いえ、単なる会員の一人です。すみません、あまりいろいろ喋（しゃべ）るなと学校側から言われていますので、取材なら今度学校を通して改めてお願いできますか」

　二人組は食い下がってなおもいろいろな質問とレコーダーを向けてきたが、雛絵はひたすら「今度改めて」と繰り返した。こういった取材を受けるのは初めてではなく、対応に雛絵は慣れていた。とにかくこちらの言葉やそれに込められた感情を、相手に渡してはだめなのだ。

「待って。じゃあ、あなたからマスコミに訊きたいことやお願いしたいことはないの？」

　母親が言った。場をとりなそうとしているのではなく、雛絵の態度が気に入らないといった様子だった。

　雛絵は即答した。

「ありません」

「……あなたたちは症候群の問題に対応するための研究会なんでしょ？　意見の聞き取りも大事だけど、もっとこういう機会を利用したらいいのよ。気兼ねすることないわ、この人たちはそれが仕事なんだから。そうですよね？」

　母親が笑いかけると、二人組はもちろんそうですと頷いた。笑顔だった。

「私たち保護者もね、ようやくいろいろと動き出したの。前から病院側といっしょに症候群への理解を求める講演会を定期的に開こうっていう提案をしていてね。その取材をさっきお願いしていたところなの。あなたたち研究会もいっしょに取り組んでくれるととても助かるのよ」

　講演会。雛絵は初耳だった。

「すみませんが、また改めて」

「……有村さん、だったわよね。学校からいろいろ言われてるかもしれないけど、本当に良い機会なのよ。こういうときに――」
「母さん、もういいだろ。有村、行こう」
石綿が限界だというように割って入り、雛絵の腕を引いてきた。
素直に雛絵は従い、階段へと向かった。するとマスコミの二人組の一人が近寄ってきて、何かを差し出してきた。名刺だった。
雛絵が仕方なしに受け取ると、男が言った。
「君さ、それで大丈夫なの？　あの人の言うとおり、もっと積極的に動いたほうがいいと思うよ」
見下ろしてくる男の視線に、雛絵は動けなくなった。
何も返せないでいると、「じゃ、なにかあったらそこの番号によろしく」と言って男は戻っていった。
「有村？」
隣にいる石綿の声が遠かった。
それで大丈夫なの、という問いが雛絵の頭の中で回った。
自分は大丈夫なのか。
大丈夫なはずがない。雛絵は唇をわずかに嚙んで、階段を下った。

渋谷に戻ると、完全に日が落ちていた。

雛絵は学校に戻って研究会の作業を続けるつもりだったが、石綿がどうしてもお詫(わ)びに何か奢(おご)りたいというので、甘えることにした。

コンビニであんまんと熱いお茶を買い込み、駅近くで簡単に休める宮下(みやした)公園に向かった。

「そんなんでよかったの?」と、石綿。

「十分。コンビニのあんまんは馬鹿にできんぜ」

適当なベンチに二人並んで腰掛けた。

雛絵にとっては見慣れた公園だった。相変わらず夜でも強い照明で明るく、ホームレスの人たちがたむろしていた。寒い外気に合わせてだろう、公園の奥で汁物の炊き出しの準備がボランティアの人間によって進められていた。

石綿が気まずそうにしていたので、雛絵は自分から切り出した。

「美人なお母さんじゃないですか」

「……ああいう人なんだよ」

困ったように石綿はため息をついた。

「自分に自信があるんだ。今は芸能事務所のマネージャーだけど、もともとはモデルだったらしくてさ。自分が綺麗(きれい)だってわかってんだ」

「……まあ、そんな感じだったけど」

雛絵は頷いた。マスコミの二人組と話しているときに、明らかに自分の容姿を武器にしている節があった。

若い外見と空気を持っているからだろう、自分の子どもに対して兄弟や友達のように付き合っていけるタイプだ。石綿が平然と母親のことを話題に出す理由が雛絵はわかった気がした。

「確かにあの人だと、バイト先に電話の一本くらいはしそうですな」

「……昔っから、言ってることとかやってることとか、いちいち正しいんだよ。でもなあ……」

続く言葉はなかったが、なんとなく訴えたい空気が雛絵にはわかった。

「なんだかなあ」

以前に石綿が言ったことを雛絵が呟くと、石綿は笑った。

そして「ほんとだよ」と言って飲み物を呷った。

雛絵も笑顔を返した。そのときに初めて、少し石綿に興味がわいた。

改めて隣にいる石綿の顔をじっくりと見ると、確かに泉理の言うように格好良い部類に入るのかもしれなかった。母親の血だろうか。

唐突に目が合った。雛絵は誤魔化すように訊いた。

「えっと……あ、石綿くんは、進路希望調査票出した？」

「あー……いちおう。就職で」

「え、嘘」
雛絵は驚いた。一学年上の泉理の学年もそうだが、雛絵の学年も希望はほとんど進学だった。学年に数人だけいる就職希望者も、確か全員が自営業で家業を手伝うという形だったはずで、もちろん石綿はそうではないだろう。
「有村は？」
「……まだ出してないんだよね。せっつかれてるんだけど」
「迷ってんの？」
「うーと……うん。そうだね。迷ってる」
「……俺もだよ」
えっ、と雛絵がこぼすと、石綿は肩をすくめた。
「就職で希望は出したけどさ。……や、もう今さらだから言っちゃうけど、母さんの勧めなんだよ、就職って。別に勉強したいこともないし、まあ、今まで迷惑かけたから。就職で全然いいんだけど」
母子家庭だと増田が言っていたことを雛絵は思い出した。そして、症候群のことも。迷惑をかけられたと母親が思っているかどうかは知りようもないが、確かに女手一つで症候群の息子を育てるのは並大抵のことではないはずだった。
「本人も学のある人じゃなくて。大学とか専門学校の単位を一つ増やすより、バイトを一つ経験することのほうが絶対将来役に立つってのが口癖で。例のコンビニの件も、母さんが言い出したことなんだ」

「……そっか」
「でもまあ、これでいいのかなって。……有村は？　勉強したいこととかないの？　興味あることとか」
　勉強したいこと。ぱっとは出てこなかった。小説を読むことが好きだから、出版や編集といった方面に興味があるといえばあった。しかし専門的に勉強して、将来の道としてどうこうというところまでは、雛絵（ひなえ）は考えたことがなかった。
　仮に進学で調査票を出すとしたら、希望する大学や学部を書かなくてはならない。素直に考えれば文学部なのだろう。就職で出すとすれば出版社とかなのだろうか。しかし高卒で入れるところとなると限られてくるはずだ。そもそも碧朋（へきほう）の卒業というものが、単純に高卒の資格として問題なく認められるかどうかも疑問だった。
「……難しいなあ」
　何に対してそう呟（つぶや）いたのか雛絵は自分でわからなかった。けれどそのままベンチを立った。そろそろ戻らないと本日分のデータをまとめきれるか怪しくなってしまう。石綿（いしわた）もそれ以上深くは訊（き）いてこなかった。
　公園を出ようと入り口近くに差し掛かったとき、雛絵は足を止めた。
　もともとは駐車場の入り口脇のスペースだったところだと聞いた。そこにぽっかりと何もない空間が広がっていた。
「………」

そこにはかつて、一台のキャンピングカーがとまっていた。今は警察に車両ごと持っていかれ、何も残っていなかった。立ち入り禁止のテープや間仕切りのコーンなども置いていない。

公園中に住み処を探しているはずのホームレスの人たちも立ち入っていないようだった。

「――りむら。有村？」

はっと雛絵は我に返った。

「ん、なに？」

「や、どうかな？」

「……どうって？」

どうやら石綿は何かを訊いていたらしかった。雛絵は慌てて取り繕うように手を振った。

「ごめんごめん、ちょっとぼーっとしてた。どしたの？」

「……や、いいんだ。なんでもない。今日はほんとごめん。また学校で」

手を上げて歩いていく石綿を雛絵は見送った。

学校に戻ろうと足を向けかけたとき、何もないスペースに空き缶が一つ転がっているのが目に入った。

雛絵はそれを拾い上げた。その拍子に、ポケットから何かが落ちた。

先ほど貰った名刺だった。

それで大丈夫なのか。

雛絵はため息をつき、拾った空き缶を近くのごみ箱に捨てた。

そして通りがかった顔見知りのホームレスを見つけ、声をかけた。
ゲンさんという、日によって言い出す過去が変わる賑(にぎ)やかな人だ。少し世間話をしたあとに、ライターを借りた。公園にある喫煙の区画まで案内してもらって、置いてある灰皿でその名刺を燃やした。
学校に戻って泉理(せんり)と華(はな)に病院での出来事を説明したころには、名刺に書かれていた記者の名前すら雛絵は忘れていた。

その週はひたすらデータのまとめに追われた。
日曜日にまで研究会の五人全員が学校にやってきてなんとか目処(めど)をつけたころ、雛絵は病院でのことを思い出して学校側に確認を取った。が、マスコミから取材の連絡などは来ていなかった。
しかし週明け、いよいよ週末に迫った終業式の発表に向けて準備を進めていたとき、唐突に連絡が入った。
「雑誌社が終業式の研究会の発表を取材に来るそうだ」
放課後、職員室で雛絵にそのことを知らせたのは担任の教師だった。やはり進路希望調査票を書くことができず、期限である終業式まで待ってくださいと伝えた矢先、そう切り出された。
雛絵が窓ガラスの反射に顔をしかめていたときだった。
「二年の親御さんから雑誌社に連絡が行ったらしくてな。きちんと頁(ページ)を割いて特集してくれると言っていたぞ」

「……二年の?」
　嫌な予感がして雛絵は聞き返した。
「ほら、お前が先週病院に呼び出されたときの、あの親御さん」
　やはりか。雛絵は感情を隠すことができず、つい顔をしかめた。
　すると教師はわかってるというように苦笑して、机に置いてあった書類の束を持ち上げた。
「確かにずいぶん熱心な親御さんだな。この書類も、研究会と学校側に対しての提案書みたいなもんなんだ。さっき直接持ってこられた」
「……まじすか」
「ちょっと強引な気もするけど、保護者と学校が連携するのは悪いことじゃない。この提案もかなりしっかりしたものだぞ?　というか、いい提案だ。学校側も気に入ってるみたいでな、前向きに進めようかと思ってる」
「学校側も気に入っているって、校長先生とかってことですか?」
「ん?　ああ、まあそうだな」
　動きが早いなあ、と雛絵(ひなえ)は半ば呆(あき)れぎみに感心した。
　さっき直接届けに来て、もう校長の感想まで出ているというのはどういうことなのだろう。そういえばこの担任も校長も男だったか。
「ちょっと見せてもらっていいですか」

「ああ、もちろん。というか持っていってくれ。それ、研究会用のコピーだから」
　雛絵はその場で書類に目を落とした。
　確かに事細かにいろいろな要望や提案が書いてあった。ざっと目を通していると、大きなフォントで強調されているものがあった。研究会に対する二つの提案だった。
『症候群の悲惨さを訴える講演会を病院と共同で定期的に催してはどうか』
『症候群に関する正しい情報を発信する媒体の作成や、症候群に対する研究協力などを通じて、将来的に元症候群者のみで運営、経営できる団体を目指してはどうか』
「……なるほど」
　なるほど、と雛絵は思った。学校側はこれを気に入っている。前向きに進めようと思っている。
　なるほどな。

「遅かったじゃない」
　雛絵が研究会室に行くと、泉理（せんり）がやはりキーボードを叩（たた）いていた。
　終業式で発表する際のスピーチ原稿の作成だ。華（はな）たち一年生トリオは、発表で取り上げる具体的な相談や所感が決まったので、実際にそれらを書いてきた生徒のところに行って、発表しても良いかどうか、本当に訴えたいニュアンスは間違っていないかなどの確認作業に行っているはずだ。
「すみません、これでまた絞られておりまして」

手近な椅子に座りながら、雛絵は進路希望調査票を机に置いた。未練たらしく自分の名前だけは書いてあるが、肝心の希望欄は空白のままだ。

泉理はその空白を見ると、どこか納得するように優しく「……そう」と頷いた。

「何を言われてもいいから、期限ぎりぎりまで使いなさい。終業式まででいいって言ったのは向こうなんだから」

さすが女帝、と雛絵は思った。本当にありがたかった。

少し気持ちが軽くなった雛絵は、多少冗談めかした口調で続けた。

「で、そこでこんなん受け取りました」

「なにこれ」

「すごいですよ、石綿くんのお母さんは」

雛絵は先ほど職員室で聞いた話を泉理に伝え、受け取った書類を手渡した。

『症候群の悲惨さを訴える講演会を病院と共同で定期的に催してはどうか』

『症候群に関する正しい情報を発信する媒体の作成や、症候群に対する研究協力などを通じて、将来的に元症候群者のみで運営、経営できる団体を目指してはどうか』

泉理はざっと一読すると呟いた。

「……なるほどね」

雛絵は苦笑した。自分もこんな顔をしていたのだろうか。

「どう思います？」
「どうって言われてもね……」
　泉理はもう一度書類を読み直しながら、ぽつぽつと言いづらそうに言葉を選びながらだが、はっきりとした感想を言った。
　それを聞いた雛絵は頷いた。まったく同感だった。
「私も、そう思います」
「さて。どうしようかしら。無視するわけにもいかないでしょうし……」
　言いながら泉理はそれまで書いていた原稿を一気に削除した。書き直すらしい。
「それにしても……コンビニに電話を入れるのも納得ね、こういう人なら」
「あ、それ私も思いました。ていうか言いました、石綿くんに」
「そういえば、どうなってるの？　石綿くんと」
　どうって、と雛絵は困った。別にどうもなってはいない。あれ以来学校ですれ違ったら挨拶くらいはするが、それだけだった。告白に対してもう一度考えさせてほしいとは言ってしまったものの、正直考える暇も心の隙間もなかった。
　そのままに泉理に伝えると、「確かにちょっとばたついてるものね」と忙しなくキーボードを叩いた。
「先輩こそ、どうなってるんですか？　えっと……そう、増田さんと」
「同じ。どうもなってない」

「そうなんですか？　最近、昼ご飯いっしょに食べたらしいじゃないですか」

泉理のキーボードを打つ手が止まった。

「どうして知ってるの」

「先週廊下かどっかで増田さんとすれ違ったときに、女帝とこれから食事だばいばい、ってなんか通り魔みたいに報告してきましたけど」

「何考えてるのあの子は……」

泉理は呆れたようにため息をついた。気持ちはわからないでもなかった。

「別に、本当にどうもなってないの。ただ――」

そのとき、会室のドアがノックされた。

はい、と雛絵が返事をすると、ドアが開いた。

「失礼します。学生自治研究会はここですか？」

入ってきた女性を見て、あっと雛絵は腰を上げた。

石綿の母親だった。先日と同じスーツ姿だった。手にはずいぶんと高そうな菓子折りをぶら下げていた。

目が合うと、微笑みかけてきた。

「職員室に用があってね。校内をいろいろと見せてもらったついでに、差し入れに寄らせてもらったのよ」

「あ、ありがとうございます」

雛絵は礼を言ってそれを受け取ると、両者を知っている者として泉理（せんり）と母親の間に立ち、挨拶を済ませた。

「コーヒーでよろしいですか?」と、泉理。

「大丈夫よ、ありがとう。本当に差し入れに来ただけなの。忙しいでしょ」

手を振って固辞した母親は、なにか規模を確認するように部屋中を見回した。そして机の上に目を留めた。先ほどの提案書が広げられていた。

「あ、もう来てるの。読んでくれた?」

問いかけられた雛絵は頷（うなず）いた。

「どう?」

「ええと……」

「悪い提案じゃないと思うんだけど」

「え、ええ、先生方はそう言ってたんですが……」

とたんに、母親の顔が曇った。

「じゃあ、有村（ありむら）さんはそう思ってない?」

う、と言葉を濁した雛絵は助けを求めて泉理へ視線を泳がせた。すぐに意図を察してくれたようで、泉理は「そうですね……」と場を繋（つな）ぐように口を開いた。

「まだじっくり読みこめていないので、研究会としての意見は終業式の発表の際にお伝えできればと思うのですが……一つお聞きしてもよろしいですか？」

「……なに？」

　不満そうに母親は言った。

　いいから今答えなさいよ、という本音がわかりやすく顔に書いてあった。泉理はそれに気づいていたようだったが、あえて目を合わせたりはせず、提案書に目を落としたまま続けた。

「この、病院での講演会という提案なのですが。ここに、今も入院している症候群者にも協力を募ってと書いてありますが……これの、当人たちの許可は？」

「取ってあるわよ。全員じゃないけど、少なくとも私といっしょに活動してくれている保護者の子たちのは、みんな」

「ちょ、ちょっとそれは……！」

　つい雛絵は叫んでいた。思ったより声が大きくなってしまった。

　泉理も母親も驚いていたが、すぐに怪訝な表情を母親は浮かべた。

「なに、有村さん」

「いえ、その……。少し、厳しいかなって。精神的に不安定だから、まだ退院できないんであって」

「気持ちはわかるけどね」

　ぴく、と雛絵と泉理の表情が同時に固まった。しかし母親は気づいていないようだった。

「なんとかそれを乗り越えなくちゃいけないの。もちろん私たち保護者もいっしょにね。啓介（けいすけ）は――私の息子は、乗り越えたから退院したの。あなたたちもそうでしょ」

自然と雛絵は母親を睨（にら）むような目つきになっていた。せめて声だけは荒らげないように雛絵は応じた。

「……石綿（いしわた）くんもそうですが、私たち症候群者は自分たちの病状のことを少なからず後ろめたく思ってます。迷惑をかけたと思ってます。許可を取ったっていうのは、それぞれの親御さんから当人に『協力してくれる？』ってお願いしたってことですよね？」

「……そうよ？」

「それは結果的にですが、その後ろめたさにつけ込んでいるということにはなりませんか。ただでさえ症候群に関することはいろいろわからなくて、みんな不安なんです。頼れるのは保護者しかいないっていう人がほとんどなんですから」

母親の顔がはっきりと苛立（いらだ）ちに変わった。口元が歪（ゆが）み、雛絵を睨み付けてきた。

雛絵は視線を逸らさずに耐えた。先に力を抜いたのは母親だった。鬱陶（うっとう）しい、という感じで自分の首元をさすり、「……まあ、すぐにわかるわよ」と吐き捨てるように言った。

出ていくためだろう、母親が踵（きびす）を返そうとしたとき、ふとその動きを止めた。そして唐突に言った。

「……有村さん、まだ決めてないの？」

母親は机の上を見ていた。

　そこには雛絵の名前だけ書いてある進路希望調査票が載っていた。しまった、となぜか雛絵は反射的に思った。

「……別にあなたと言い争うつもりはないんだけど。あなた、私たち保護者の気持ちがわかる？」

　雛絵（ひなえ）は答えなかった。わかるはずがなかった。

「いきなり自分たちの子どもがあんなことになっちゃって。まわりもなんだか頼りなくて。どれだけいろんなことに耐えてきたかわからないでしょ。私たちは一刻も早く、この問題を解決したいの。……自分の足下もおぼつかない子には理解できないかもしれないけど」

　そう言い捨てると、石綿（いしわた）の母親は会室から去っていった。

　巨大なものが崩れたあとのような沈黙があった。その重さに耐えかねた雛絵が倒れるように椅子に座りこむと、椅子がきしんで悲鳴を上げた。

　切り出したのは泉理（せんり）だった。

「……コーヒー飲む？」

「……うーい。貰（もら）います」

　なんだか痺（しび）れたような感覚が頭にあり、雛絵は淹（い）れてもらったコーヒーに砂糖を多めにぶち込むと、一気にそれを呷（あお）った。

「大丈夫？」と、泉理。

「なにがですか」

「……なにがだろうね」
　自嘲ぎみに泉理は肩をすくめた。
　雛絵はそれを見てふっと力を抜くと、自分で白湯（さゆ）を入れた。今度はそれを、気持ちを腹に落とし込むようにゆっくりと飲んだ。
「……まあ、足下がおぼつかないっていうのは事実なんですけど」
　雛絵は机の上の進路希望調査票の端をつまんで持ち上げた。息を吹きかけ、ひらひらとたわむれに揺らした。
　しばらくして、いつもどおり甘めのコーヒーを飲んでいる泉理が言った。
「そう？　そうは思わないけど」
「何がですか？」
「足下が、って話。さっき、あなたいきなり怒鳴ったでしょう。入院している子たちのことで」
「ああ……いや、お恥ずかしい」
　あれは雛絵自身も驚いた。まさに口をついて出た、という感じだった。
「……入院している子はまだたくさんいるからね。退院の目処（めど）がまったく立っていない子も」
　泉理は何かを堪えるように目を伏せていた。
　ふと雛絵は思い出して訊（き）いた。
「そういえば、川原（かわはら）先輩はまだ……？」

「……ええ。お見舞いには行ってるんだけど」
「……そうですか」
川原雅司は泉理と同学年の幼馴染みだった。一連の出来事があって入院する前までは、生徒会の副会長を務めていた。――そのときは来栖乃々の姿をしていた、泉理の右腕として。
南沢泉理、来栖乃々にまつわる真実を川原に対して泉理がどう説明し、そして川原がどう理解したか雛絵は訊いていなかった。簡単には踏み込めなかった。けれど退院することができていないことから、ある程度事情は透けて見えてしまっていた。
時間が必要なのだ。真実をどう受け止めるにしても。
「……ん？　それで、どう繋がるんですか？」と、雛絵。
「なにが？」
「私の怒鳴り声とおぼつかないステータスが」
ああ、と泉理は頷いて切り替えるようにコーヒーを飲み干した。そして作業に戻りながら言った。
「あそこでつい怒鳴っちゃうような気持ちがあるのなら、足下はしっかりしてるんじゃないかしらって思ったの」
「……そうですかねえ」
気休めでもその言葉は嬉しかった。雛絵はついはにかんでしまった顔を誤魔化すために机に頬をくっつけて突っ伏し、また息を調査票に吹きかけてひらひらと遊んだ。

自分の作業に戻らない雛絵を、泉理は咎(とが)めなかった。
母親が置いていった差し入れの菓子折りが机にあった。ぼーっとそれを眺めていると、なぜか石綿(いしわた)のことが雛絵の頭に浮かんできた。
同時に母親の言い分を思い返した。
はっきりと悔しかった。
けれどいちばん苦しんでいるのは石綿くんかもしれないな、と雛絵は思った。

二〇一六年十二月二十二日木曜日。終業式当日。
今年の夏ごろから断続的に復学してきた在校生たちにとっては、学校が再開して初めての長期休暇である冬休み前の、最後の登校日だった。
体育館に集められた生徒たちの数は再開前の七割にも満たなかったが、休み前特有の解放感のためか珍しく浮かれた雰囲気に包まれていた。もっぱら話題は終業式後にどこに遊びに行くかということと、体育館の後ろに大勢陣取っている保護者たちのことだった。
保護者用に用意された椅子はすべて埋まっており、立ち見が出ていた。学校再開後、出席可能な全生徒が一堂に集まった最初の集会ということもあるのだろうが、口々に研究会に関して噂(うわさ)しており、その発表を楽しみにしていることが嫌でも伝わってきた。
「やっぱやだ。帰る」

そして当の研究会員である雛絵は、壇上に上がって発表する予定の華の悪あがきをなんとか押し留めていた。

「帰れるんだったら私だって帰りたいよ。しかしそれは無理だ。腹を括らんかい」

「こんなにたくさん来るなんて聞いてない。倒れるかも。帰る」

発表のある雛絵たち研究会員は、あらかじめ生徒たちの列から外れてステージ脇の用具置き部屋で待機を言い渡されていた。ここで自分たちの出番まで待つことになっていたのだが、軽く体育館の様子を窺った華が、保護者の数が増えていくにつれて顔色を悪くし、とうとう立ち見まで出たところで限界に達したらしかった。

「まあ確かに、引きこもりゲーマーだったあんたに、いきなりこれだけの人数の前で喋れっていうのは酷かもしれないけど――」

「帰る。トリだなんて聞いてない。帰る」

「あーもー聞いてない聞いてない帰る帰るって」

研究会の発表は終業式の最後に予定されていた。教師に問い合わせた泉理曰く「保護者の皆さんが期待しているから、ですって」ということだった。初めに学校側からの挨拶があり、その後これからのカリキュラムの説明や学校経営の展望紹介などを挟んでから、満を持してという体で研究会の発表となっていた。



「ちょっと、何してるの。外まで声が響いてる」

発表で使う機材の確認に行っていた泉理（せんり）が戻ってきた。同じくそれを手伝っていた瑞希（みずき）と麻知（まち）は、雛絵（ひなえ）たちの様子を見て状況を察したのか、苦笑いを浮かべた。

華（はな）が懇願する口調で言った。

「瑞希、代わって。私帰る」

「だめ。会長は華でしょ?」

「じゃあ、麻知」

「え、本気で代われるって思ってんの?」

「じゃ、じゃあ二人で。あ、それいいかも。私帰るから二人で発表してくれれば――」

「香月（かづき）」

いきなり泉理の右手が伸びて華の顔面を鷲掴（わしづか）みにした。どういう握力をしているのか、そのまま一歩も動かずに泉理は華の顔を自分の眼前まで引き寄せた。

笑顔を浮かべていた。はっきりと強調するように泉理は続けた。

「もう一度言うけど。外まで、声が、響いてるの。静かにしてくれる?」

はい、と華の口が動いた。が、頬（ほお）を掴まれているために声が出ないようだった。

「会長はあなたなの。あなたが発表しなくてはだめ。確かに順番は最後になっちゃったけど、あなたの発表のあとに、私が生徒会長として全体を総括したものを発表することになってるから、大トリは私。何かあってもフォローするから。わかる？」

わかるしかないだろう。雛絵はものすごい速度で首を小刻みに動かして同意を示す華を見て微笑んだ。瑞希と麻知はまだ慣れていないのか泉理から数歩後ずさっていた。

泉理が手を離すと華は無言で部屋の隅に行き、壁を殴り始めた。音が響いた。「香月？」と泉理が言うとすぐに止め、「死にたい……」と肩を落としてまったく動かなくなった。

「機材は大丈夫ですか」と、雛絵は泉理に訊(たず)ねた。

「ええ。それは大丈夫なんだけど……」

泉理は言いよどんで、雛絵を手招きした。ドアのところまで連れていかれると、泉理はわずかに隙間を開けて、体育館を視線で示した。

「あそこ」

なんですか、と雛絵は泉理の目を追った。

生徒たちの後ろ、保護者用の席が並んでいる最前列に石綿(いしわた)の母親の姿が見えた。足と腕を組み、まだ誰も登っていない壇上を見つめていた。

「臨戦態勢って感じでしょう」

泉理の言葉に雛絵は頷(うなず)いた。

そして気づいた。母親の隣にいつかの雑誌社の二人組が腰掛けていた。こちらもいつでも来いというように、手にはメモとペンが握られていた。

雛絵(ひなえ)は肩をすくめた。

完全に母親が二人を取り込んでいるように見えた。たいしたもんだな、と雛絵は思った。

スピーカーが鳴り、司会の教師の声が響いた。

「それでは時間になりましたので始めたいと思います。ご着席できる方はご着席ください。まず開会の挨拶を、教頭から――」

華(はな)の発表は開始直後から冷や冷やしたものとなった。

名前を呼ばれ、ステージ脇から登場した華の顔色は青白さを通り越してなんだか緑がかっていた。持っている原稿は緊張した手で握り潰されて、足は震え、おまけに手足が同じ側から出ており、あろうことかマイクが置いてある演台を一度通り過ぎた。

思わず雛絵が「なんかああいうおもちゃ見たことありません?」と泉理(せんり)に言うと、軽く頭を小突かれた。

「学生自治研究会会長をやっています香月(かづき)華といいますよろしくお願い致しますまずはこちらをご覧ください」

今まで華の口からは聞いたことのない速度の第一声から、発表は始まった。

「これは事前にお配りして皆さんに書いていただいたプリントの内容をまとめた円グラフになります日常生活における不安の訴えが最も多く次に進路に関する――」

突然、ボン！　という大きな音がして華の口上を遮った。

ステージ下の脇に陣取っている泉理だった。置いてあるマイクを叩いたのだ。

一瞬あっけにとられた華は、「あ……」と、ようやく背後のプロジェクターに何も映っていないことに気がついたようだった。泉理は華に頷きかけると、ゆっくりとした動作であらかじめ用意してあったタブレットを叩いた。

プロジェクターに円グラフが表示された。

くすくすと会場が笑う声が雛絵の耳に聞こえてきた。腹が立ったがまさか怒鳴るわけにはいかなかった。雛絵は壇上で固まっている華に向けて「だいじょうぶ」と大きく口を動かした。

華はなんとか頷き、プロジェクターの内容を確かめてから、もう一度ゆっくりと喋り出した。

「こ、これは事前にお配りして皆さんに書いていただいたプリントの内容をまとめた円グラフになります。ん……と、日常生活における不安の訴えが最も多く、次に進路に関する悩み、それから、け、健康上の問題、と続きます」

華の声は震えっ放しだったが、基本的に言わなければいけないことはすべて手元の原稿に書いてあったので、小さく間違えることはあっても大きくつっかえることはなかった。映像の表示も間が欲しいところ

や、華の口上を先行させたほうが効果的なところなど、さすがに泉理は生徒会の活動で慣れているのか、如才なく指示を出した。
　最初にあったざわつきや失笑めいた声も、次第に静まっていった。
　途中から私語はいっさいなくなり、全員がプロジェクターを注視していた。
「お、多かった質問に対して、この場でいくつか回答します。まず、マスコミや記者の人に症候群に関して何か聞かれた際、それに答える義務は私たちにはありません。病院に勤めている方に聞かれたとしてもそれは同様です。必要であれば、『学校側に問い合わせてください』と言ってくださって結構です。ん……と……次に……あ、頭痛やその他の身体の痛みに関することについては、病院側から症候群が原因だとしている症状はないとのことです。実際に頭痛などを訴えて病院に行かれた方が何人かいらっしゃいましたが、そのすべてが精神的なものと診断されています。まだまだ不明なことが多いのは事実ですが、どうか慌てず――」
　真剣に発表を聞く生徒たちの様子に、雛絵は大きな手応えを感じていた。「人に話を聞かせるときに必要なのは、物語と具体例なの」とは、華の原稿を作成した泉理の弁だ。
　他ならない自分たちの声が反映されている発表に、生徒たちはどこか緊張すらしているようだった。むしろ保護者たちのほうが、話し声などはないものの、注意が散漫なような気さえ雛絵はした。
　途中、華が前後を軽く間違えたり、そんな華のために泉理が映像を多めに出したり繰り返し表示したりした結果、大幅に発表時間は延びてしまったものの、とりあえず無事に発表は終わった。

「以上に……なります。……どうも……ありがとう、ございました……」
体力が尽きかけて息も絶え絶えになった華が最後の一言を言うと、拍手が起こった。
壇上で華が礼をすると同時に、雛絵たち四人も頭を下げた。
幽鬼のようにふらふらと足を引きずってステージ脇にはけていく華を見送ると、泉理が咳払(せきばら)いを一つした。
大トリの出番だった。
ばっちりシメてきてください、と雛絵が言おうとしたときに、司会が言った。
「以上、学生自治研究会会長からの発表でした。えー次が最後の発表なのですが、その前に少し休憩を入れたいと思います」
は？　と雛絵は思い司会を見た。休憩など挟む予定はなかったはずだ。
司会は体育館後方の保護者たちを見ていた。立ち見の保護者たちの中に壁に寄りかかっている者がおり、顔に疲れが浮かんでいた。
「十分後に再開いたします。保護者の方、もし席をお譲りできる方がいらっしゃいましたらよろしくお願いいたします」
なるほど、と雛絵(ひなえ)は頷(うなず)いた。時間が大幅に押してしまったためだろう。
「……仕方ないか。有村(ありむら)、香月(かづき)に飲み物でも買ってきてあげて」と、泉理(せんり)。
「飲み物ですか？」

「ええ。出てこないからたぶんステージ脇でへばってるんでしょう。飲食は本当はいけないから、こっそり隠してね」

確かに華(はな)は用具置き部屋から出てきていなかった。鈍い音が聞こえないので壁を殴っているわけではないだろうが。

了解しやした、と雛絵は頷いて体育館の入り口に向かった。

そのとき、席に座っていた石綿(いしわた)の母親と目が合い、雛絵は足を止めた。

「…………っ」

雛絵は息を呑(の)んだ。

母親は、笑っていた。雛絵はそれを嘲笑に感じた。

——このくらいのことなの？

そう言われている気がした。席を譲る気はないのだろう、相変わらずどっかりと足を組んでいた。

雛絵は手を握り込み、目を伏せた。

親友の飲み物を買いに行かなくてはならない。床の板目を数えるように顔を下に向けたまま、雛絵は体育館を出た。

「有村」

購買脇の自販機でペットボトルのお茶を買ったとき、不意に雛絵は声をかけられた。

振り返ると石綿が立っていた。雛絵を見て「……どうした?」と眉をひそめていた。
雛絵は一つ大きく息をつき、応じた。
「うんにゃ、なんでも。どしたの?」
「……発表、良かったよ。めちゃくちゃためになった」
「おお、まじかい。華が聞いたら喜ぶよ」
「ああ、がんばってたもんな、あの子」
石綿が笑うのに合わせて雛絵も微笑んだ。確かにがんばってはいた。
雛絵が足を体育館のほうへ向けようとしたが、石綿は動かなかった。何か言いづらそうに上目で雛絵を見ていた。
「どしたの?」
「や、その……あのさ、もしかして母さん、有村に何か言った?」
「え?」
「ほんとはすぐに訊くべきだったんだろうけど、有村忙しそうにしてたからさ。……何日か前だったかな。帰ってくるなり、あの研究会はまだまだダメだわっていきなり言い出して」
「ああ……それ。月曜日じゃないかな」
母親が菓子折りを持ってやってきた日だろう。
「有村と、なんか話したんだろ? 詳しく教えてくれなかったけど、そんなようなこと匂わせてたから」

「……まあ、いろいろ。研究会のこととか、私の進路のこととか」
「……っ。まじかよ」
石綿(いしわた)はくしゃくしゃと頭をかき、悪い、と呟(つぶや)いた。そして、突然何か思い当たったように顔を上げた。
「そっか……それでかもな」
「何が?」
「……俺さ、就職で希望出したろ」
うん、と雛絵(ひなえ)は頷(うなず)いた。
「卒業したら、母さんのところで働くことになりそうなんだ」
は、と喉の奥から息が漏れた。
「え、どういうこと」
「母さんが働いてるとこの事務。話は通したんだって。……研究会の活動は待ってられないっつって」
「………」
めき、という音が雛絵の耳に届いた。買ったペットボトルを握りしめていた。
自然と訊いていた。
「──石綿くんは、それでいいわけ」
「いいっていうか……。……そうだな、あれだよ、なんだかなあってやつ」
石綿は笑っていた。めきめき、と音が続いた。

「……そうだね、なんだかなあ、だね」
繰り返して、今さらながらその滑稽さに雛絵は腹を立てた。
なんだかなあ。
自分の将来が、なんだかなあ、だ？
「──石綿くん。それは、ダメだ」
え、という石綿の顔と声は雛絵に届かなかった。
雛絵は走り出していた。

「代わってください」
泉理（せんり）たちが待っていた用具置き部屋に突入すると、雛絵（ひなえ）はそう切り出した。
「……どうしたの」
やはり部屋でうなだれていたらしい華（はな）の介抱をしていた泉理（せんり）は、雛絵の様子に顔をしかめた。瑞希（みずき）と麻知（まち）、そして華もただならない様子を感じ取ったようだった。
「先輩の発表、私にやらせてください」
「待ちなさい。どうしたの。何かあったの？」
「……石綿（いしわた）くんの母親です」
「何か言われたの」

雛絵は先ほどのことを説明しようとした。けれど上手くその理由を言葉にできなかった。
気持ちが昂(たかぶ)っていた。そちらを表す言葉はすぐにわかった。
怒りだった。
その大きな原因の一つはすぐに思い当たり、雛絵は言った。
「先輩、覚えてますか。今週の月曜日、石綿くんの母親が研究会に来たときのこと」
泉理は頷(うなず)いた。
「そのとき、どういう会話の流れかは忘れちゃいましたけど、こう言われたんです。『気持ちはわかるけどね』って」
先ほどの石綿の諦めたような笑顔を雛絵は思い出した。母親は石綿のためを思って行動したのだろう。
そして石綿はそれを受け入れようとしていた。
勝手に決まっていく将来を認めようとしていた。
「いいですか、あの人は『気持ちはわかるけどね』って言ったんです。私に対して」
今は近くにいない大切な戦友の彼も、かつていちばん大事な人のためを想って行動した。
その大事な人のための将来と、やりたいことを何よりも優先して。
雛絵は思うままに言葉を荒らげた。

「あいつはそう言ったんです。私たちがこうやって正しく苦しむことができてるのが誰のおかげか知ってる私に、それを見せつけられたこの私に、症候群者でもないあいつが言ったんです。こんなのは揚げ足取りです、けどねえ、あいつは全部わかってるみたいな顔して言いやがったんですよ、はっきりと、『気持ちはわかるけどね』って！」

　狭い室内に自分の怒鳴り声が反響するのを雛絵は聞いた。視界がいつの間にかわずかに滲んでいた。瑞希と麻知は怯えた表情をしていた。

　泉理と華は違った。その顔は優しかった。

　雛絵の目の前に、泉理が原稿を差し出してきた。

「やりなさい」

　一瞬、雛絵はなんのことかわからなかった。感情が沸騰していた。

「やってきなさい。生徒会長としての総括も入っちゃってる原稿だから、そこは無視していい。都合のいいところだけ使いなさい。時間がないからほとんど即興になっちゃうでしょうけど、あなたはそういうの得意でしょう。ふだんあれだけ喋ってるんだし、文芸部の部長なんだから」

「あ……」

　言われて、初めて思い当たった。大トリである泉理は、生徒会長として発言しなくてはならなかったのだった。

　泉理はわかってる、というようにかぶりを振った。

「気にしなくていい、なんとでもなるから。というより、次の発表が最後って言ってしまってるんだから、どうもできないでしょう。いいから、言いたいことを言ってきなさい」

「…………」

女帝は格好良いなあ、と雛絵は泉理を見て思った。

手に持っていたペットボトルのことをようやく思い出し、雛絵は華にそれを差し出した。

が、華はそれを断った。

「いい。飲んでいいよ。がんばって」

「……さんきゅ。愛してるぜ」

休憩時間が終わる旨を告げるアナウンスがドアの向こうから聞こえてきた。

雛絵は泉理の原稿に目を落とした。

そしてそこに書いてあった内容に少なからず驚き、部屋から出ていこうとしている泉理を呼び止めた。

「先輩、これ……」

雛絵は原稿を指差した。泉理は微笑んで答えた。

「少しはあなたの言いたいことと重なっていた？」

こくん、と雛絵は頷(うなず)いた。まさか泉理が生徒会長としてこんなことを言うつもりだったとは思わなかった。

「言ってなかったけどね。私も気持ちはわかるって言われたことは、正直言って腹に据えかねていたの。というか、むかつく」

むかつく。

泉理にしては珍しいその単語と言いかたがかわいく聞こえ、雛絵は笑った。

「最後の発表になります。学生自治研究会副会長であり、生徒会会長の南沢泉理さん、よろしくお願いします」

司会の声が響くと同時に、雛絵はステージ脇から演台に向かった。

すぐにざわつく声が生徒たちから聞こえてきた。雛絵と泉理の顔と名前が一致していない保護者たちも、生徒たちを見て不審がる様子だった。

ステージ下の脇に華たちといっしょにいる泉理に、司会の教師が慌てて何事か囁いていた。しかし泉理は動かなかった。雛絵のほうを見て目で合図を送ってきた。

雛絵は頷いて一礼し、マイクに近づいた。

「学生自治研究会会員の有村雛絵です。南沢さんに代わりまして、わずか一ヵ月の活動しかしておりませんが、会員としての所感を述べさせていただきます」

ざわめきが大きくなり、泉理の元に別の教師たちが駆け寄ってきた。

泉理は慌てず応対しながら、やはり「早くしなさい」という感じに手をひらひらと振ってきた。止められるわけにはいかなかった。

どこから切り出すかと思ったとき、生徒の列の中で唖然（あぜん）としている石綿（いしわた）の姿が雛絵の目に飛び込んできた。

そうだ、そこから始めるか、と雛絵は胸中で頷いた。

どうあれ、今自分の中でくすぶっている感情は、彼と彼の母親が原因の一端だった。保護者席の母親と、その隣にいる二人組の記者に目を移すと、不穏な目で雛絵を見据えていた。

上等、と思いながら雛絵は泉理の言葉を思い出した。「人に話を聞かせるときに必要なのは、物語と具体例」。

一席ぶとう。口火を切った。

「先日、私は友人三人といっしょに出かけました。正直に言ってしまいますと、デートでした。ダブルデートです」

ネタにしてごめんと、石綿と、列の中のどこかにいるだろう増田（ますだ）に雛絵は頭の中で詫（わ）びた。横目で泉理を見ると、ぽかんとしていた。

さらに会場のあちこちで不審がる声が上がった。雛絵は構わず続けた。

「女性の友人は同じ研究会の会員で、何度もいっしょに出かけていましたが、男性の友人二人とはそのとき初めていっしょに出かけました。行き先は渋谷。決めてくれたのは男性陣で、駅前に集合したときにま

ずこう言われました。『ごめん、俺たち他に場所あんまり知らなくて』。とても申し訳なさそうでした。学生の皆さんはそのときの気持ちがわかると思います。ここにいらっしゃる保護者の方、先生方は気持ちがわかりますか？」

不意に生徒の一部が静まり返った。

「現在、碧朋（へきほう）の学生が遊びに出かけるときに、積極的に渋谷を選ぶ人はほとんどいないと思います。症候群にまつわる影響があちこちにあり、否応なく自分たちの症状のことを思い出すからです。場所そのものの風景は当然として、関連書籍はいまだに渋谷の書店では平積みされていますし、あの事件の現場を見物にやってくる人たちもいます。私は彼らに気にしなくていいと言いました。それがデートの始まりでした」

石綿（いしわた）に目をやった。

唖然（あぜん）とした表情はなくなり、ただ雛絵（ひなえ）の言うことに耳を傾けていた。

「ビルに入っている雑貨屋さんへ行くために、エレベーターに乗ろうとしたときでした。全員が乗り込む瞬間に、わずかに身を竦（すく）めました。誰も何も言いませんでしたが、感じていることは一緒だと思いました。理由はわかりますか？　鏡です。エレベーターの中の大きな鏡に映った自分に、私たちは一瞬ですが確かに緊張しました。病院で鏡を見たときのことは絶対に忘れられません。ここにいる学生全員がそうです。そのときのことが原因で、鏡に対する恐怖症を患ってしまった人もおり、退院できずに病院で治療を続けている人もいます。症状が重たい人はガラスや磨かれた金属など、わずかに姿を反射するものすら見ること

ができません。先生方は、以前より教室のブラインドやカーテンが閉まっているのが多いことに気がついていますか」

　雛絵ははっきりと教師たちのほうへ顔を振った。

　倣うように生徒たちの一部が同じ方向へ視線を投げた。泉理のそばにいた教師たちは急に気まずそうにして、問い詰めていた泉理（せんり）から少し距離を取るように下がった。

「男性陣の行きつけだという、少しお洒落（しゃれ）な店で食事をしました。近くの席に、同じ年頃のカップルが座っていました。聞こえてきた会話の内容から、違う学校に通っている高校生だということがわかりました。二人は進路の話をしていて、女の子は進学するつもりのようでしたが、男の子は迷っているようでした。男の子がこう言いました。『別に就職でも進学でもどっちでもいいんだよな。良い大学出て良い会社入っても社畜だろうし、いきなり就職したってどこもブラックだろ』。自分のことを棚に上げてしまいますが、ガキだなと私は思いました。そして、私たちとは違うなと思いました」

「先日、三学年全体に進路希望調査が行われて、ほぼ全員が進学を希望しているという結果が出ました。理由はおわかりかと思いますが、元症候群者が社会に出て働くうえでの準備が、法の面でも正しい認識の面でもできていないからです。私はカップルに腹を立ててました。私たちはそれどころじゃないんだ、幸せそうにしやがってと思いました。嫉妬も少なからずあったと思います。断っておきますが、これらのことは特別なことではありません。私たちの日常です。デートは楽しいものでした。けれどデートの最中にそういうことを思ってしまうのが、私たちの日常なんです」

生徒たちはいつの間にか静まり返っていた。

雛絵（ひなえ）は泉理（せんり）の原稿に目を落とした。その場で自分の言葉に変換しながら続けた。

「先ほど会長である香月華（かづきはな）からも簡単に説明がありましたが、学生自治研究会設立の際に、多くの保護者の方からご意見をいただき、活動内容に関して具体的な提案もいくつかいただきました。その中に、次のような提案がありました。『症候群の悲惨さを訴える講演会を病院と共同で定期的に催してはどうか』。『症候群に関する正しい情報を発信する媒体の作成や、症候群に対する研究協力などを通じて、将来的に元症候群者のみで運営、経営できる団体を目指してはどうか』。なるほど、と私は思いました。先生方に確認すると、学校としてもこの提案は気に入っており、前向きに進めようと思っているとのことでした。私はまた、なるほどと思いました」

雛絵は原稿から顔を上げた。

保護者席にいる石綿（いしわた）の母親をはっきりと見据えた。こちらを見ていた。まわりの保護者たちはその提案に関して納得するように頷（うなず）いていた。

「――あくまで個人的な見解なのですが。失礼ながら私はこう思いました。なるほど、この人たちは今の私たちをまるで、何一つ、わかっていないと」

とたんに保護者席と教師たちがざわついた。

母親の表情が怒りのそれに変わり、組んでいた足が解けて一瞬腰が浮かび上がるのを雛絵は見た。

泉理を確認すると、こっそりと司会のスタンドマイクの前に陣取っているのがわかった。やめさせないためだろう。

今の言葉は、以前雛絵が母親の提案に対して、感想を求めたときの泉理の言葉だ。

まったく同感だった。

「繰り返しますが、私の個人的な見解です。リハビリで入院していたとき、私たちは看護師さんからこう言われました。『がんばれば全部元通りになるからね』。それは嘘（うそ）だと、言われた全員がわかっていたはずです。あえて侮蔑的（ぶべつてき）な言葉を使いますが、元症候群者であるというレッテル、碧朋（へきほう）学園に通っているというレッテルが貼られている以上、元通りになどなりません。お洒落（しゃれ）な店にいたあのカップルの立ち位置に、私たちは戻ることなど一生できません。そして先ほどの提案の中の、『症候群の悲惨さを訴える』、『元症候群者のみで運営、経営できる』という部分。これは病院で言われたことと真逆です。元症候群者であることを自覚し、利用して、私たち以外とは線を引いて付き合っていけということです。ですが私たち以外に同じ症状の人がいないこの症候群の悲惨さを訴え、まるで自分たちから檻（おり）に閉じこもるように同族でまわりを固めてそれ以外を相手取ることに、私は意義を見出せません。もっと直接的に言います。そんなことを、心の底から本気で取り組む気に、今の私はなれません」

どこかから、「ちょっと！」という女性の声が聞こえた。

石綿（いしわた）の母親かと思ったが、そうではなかった。母親は厳しい形相で、ただ雛絵（ひなえ）を睨（にら）みつけてきていた。もしかすると、母親といっしょに活動をしているという保護者の声かもしれなかった。

後を追うように「なにそれ」「どういうこと」という声が聞こえてきた。しかし雛絵の見る限り、生徒たちは誰一人喋（しゃべ）っていなかった。

「静粛に願います」

突然、きわめて硬い泉理（せんり）の声が響いた。陣取った司会のマイクを使っていた。

雛絵は目礼して泉理に応じ、わずかに静まった隙間に続きを置いた。

「もう一度言います。私の個人的な見解です。もし先ほどの提案に心から賛同し、取り組んでみたいと思う学生の方がいたら、会のほうにお越しください。歓迎します。会として手伝うことを約束します。ですが、当事者である私たちの誰かが心底からやりたいと言わない限り、私は拒否します。保護者の方や先生方の提案のみで会を動かすことは、断固として拒否します。何様だと思われるでしょうが、私たちは守られ養われていますが、生きていくのは私たち自身です。一般人と同じに生きろと言われ、一般人とは異なって生きろと言われ、一般人の中で生活しながらも一般人とは違う自分を、他ならない自分から見せつけられている今の私には、先ほどの提案に心から賛同することはできません」

雛絵は再度石綿を見た。

相変わらずまっすぐに見てくれていた。

「デートのお相手の男の子が、コンビニのアルバイトの面接に落ちたことを教えてくれました。コンビニ側は不採用にした理由をはっきりとは言わなかったそうですが、元症候群者だからということを匂わせていたそうです。私はその場で、会員の女の子と会として動けることはないか相談しました。結論はすぐに出

ました。ありませんでした。雇われたうえでの不当解雇ならともかく、その時点で私たちができることはありませんでした。こう思われていると思います。ではいったい、私たち学生自治研究会は何をする会なのか」

一拍おき、今度は母親を見た。

怒りの表情が混乱とない交ぜになっているようなそれになっていた。石綿とのデートのことは知らなかったようだった。

「設立の際の概要に明記しました。元カオスチャイルド症候群者を取り巻く環境について考える会であると。これは考えるだけで何もしないという意味ではありません。けれど私たち碧朋（へきほう）学園の学生は、まず第一に考えることが必要だと思っています。私はカップルに嫉妬しました。羨みました。おそらく今見てもそうでしょう。幸せそうにしやがってと絶対に思います。ではなんで私は嫉妬して羨むのか。相手が元症候群者ではないから。その苦しみを知らないから。私たちと違って自由に進学か就職かを選べるから。おそらく全部です。けれど私はあの二人の名前も年齢も知りません。幸せかどうかも知りようがありません。もし二人が私の知らない難病を乗り越えて結ばれたカップルだったと聞いたら、嫉妬もしなかったかもしれない。もちろんそんなことは思っていませんが、相手の状況一つを聞いただけで印象が変わるなら、私はそもそも羨む必要があったのか」

「私たちは考えなければいけません。鏡やガラスを怖がり、同じ年頃の一般人を見て気持ちがざわつくのが嫌なら、そういった自分を変えたいなら、考えなければいけません。根本には、私たちが一般人と比べて

不利な立場にあるということがあるのでしょう。けれど私たちが『あなたたちより不幸な、今日食べるものにも困っている人たちが世界には大勢いる』と言われても、だからなんだと身勝手にも思ってしまうように、私たちがこんなに不幸なんだということを並べ立てても、まわりは何も変わりません」
泉理(せんり)の原稿の主旨はここで終わっていた。
会場は静まり返っていた。
雛絵(ひなえ)は原稿から顔を上げ、自分の気持ちを表す言葉を探し、手前の学生たちに語りかけた。
「……生徒の皆さん。症候群の原因はよくわかっていません。これからもわからないかもしれない。けれど事実として、私たちは自分たちの症状に気づかなかった。見て見ぬふりをしていました。たとえそれが症候群のせいだったとしても、あのときと同じ自分ではいけないと思いませんか。都合の良い声だけを受け入れていた結果が、あのときの自分だとは思いませんか。考えなければいけません。私たちはこれからどう将来と向き合って、どうしていきたいのか。私たちは真剣に、考えなければいけません」
最後に雛絵は会場全体を見渡した。
全員が壇上を見つめていた。
受けて雛絵は、頭を下げげつつ告げた。
「保護者の皆さん、教師の皆さん、いろいろ失礼なことを言いました。けれどどうか、私たち元症候群者自身が、一人残らずしっかりと考え、悩むことができるよう、力を貸してください。これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました」

ほう、と息をつき雛絵は頭を上げた。
緊張と沈黙が残っていた。
そのままはけようとしたときだった。
小さく拍手が響いた。
驚いて雛絵は足を止め、拍手が聞こえてきたほうを見やった。
石綿だった。手を叩いてくれていた。
数秒遅れて、明らかに場違いな囃す口笛と拍手が続いた。見ると、増田だった。端のほうに並んでおり、気づかなかった。
仕方なく苦笑して、雛絵は手を振った。するといきなり生徒たち全体が拍手をした。それまででいちばん大きな拍手だった。響いた増田の口笛に触発されたのか、クラスメイトの連中が口々にふざけて「ひなー!」「有村ー!」と黄色く叫ぶのが聞こえた。
我に返った教師たちは慌てて、泉理が陣取っていたマイクを奪って「静かに!」と叫んだが拍手と囃し立てる声は止まなかった。
雛絵はステージ脇ではなく、壇上からそのままぴょんと飛び降りて泉理たちの元へ向かった。
泉理は呆れたように笑っていた。
「言ったった。言ったりました」

雛絵は手を上げた。軽く振りかぶると、泉理は「まったく……」とため息をつきながらも手を上げてくれた。

ばちんとハイタッチぎみに打ち鳴らすと、後ろにいた華たちも手を上げてきた。そのままばちんばちんと雛絵は手を合わせた。

保護者たちは会場の様子にあっけにとられていた。

教師たちは「静かにしなさい！」と繰り返したが、生徒たちは雛絵を含めて誰一人聞いていなかった。

「……結局、進学か」



終業式終了後。
雛絵は職員室に呼び出されていた。泉理や華たちもそれぞれの担任に呼び出され、研究会の発表に対して説教を食らっているようだった。
ひとしきり小言を言われたあとに、雛絵は進路希望調査票を取り出して担任に手渡した。
進学に印をつけていた。
つい先ほど書いたものだった。
「すみません、どこの学校を志望するかはまだ決めてません」
終業式が始まる前までは進学か就職か結局決めきれておらず、担任に頭を下げてもう少し待ってもらうつもりだった。しかし自分で大演説をやらかしたあと、不思議と雛絵は自分の気持ちが定まっていることに気がついた。
自分で言ったとおり、考えなければいけなかった。
そのためにはもう少しの時間と、正しく学べる環境が必要だ。
「先生方は年内、もう少し出勤しますよね？　それまでには決めてきますから」
すると担任は、いや、とかぶりを振った。
「年明けでいい。というか、冬休み明けでいい。それまでじっくり考えてくれ」
「……え」

雛絵がきょとんとした表情を浮かべると、担任は歯切れが悪い様子で頭をがりがりと掻いた。そしてふと思い当たったように立ち上がり、窓際に向かった。
　振り返らないまま担任は言った。
「……終業式のあとな。何人か生徒が訊いてきたんだ。提出した進路希望調査票、返してもらうことってできますかってな」
「……まじですか」
「面倒だと思ったが、返したよ。そいつらは冬休み明けに再度提出してもらうことになってる。だからお前もそれでいい」
　担任はカーテンを閉めた。
　窓の反射が遮られた。
「ありがとうございます」
　雛絵は頭を下げ、自分の進路希望調査票を持って職員室を辞した。
　歩きながらひらひらと調査票を振ると、そういえば何かの小説でこういう書類で紙飛行機を作って飛ばす描写があったなあ、と雛絵は思い当たった。
　それほどの自由はないとわかっていた。
　けれど担任はカーテンを閉めてくれた。
　こういうところから始めていきますか、と雛絵は思った。

翌日、冬休み初日。

雛絵（ひなえ）は石綿（いしわた）を呼び出した。

ダブルデートで使ったあの小洒落（こじゃれ）た店だった。渋谷以外にしようと雛絵は思ったのだが、このあと用事があるという石綿が近くのこの店を提案してきた。

「告白のことだけど。あなたとは付き合えません。ごめんなさい」

雛絵はまっすぐに石綿を見てそう告げ、頭を下げた。

苦く気まずい感情があったが、以前のように適当な空気をまとうわけにはいかなかった。

「……そっか」

雛絵が頭を上げると、石綿は薄く微笑んでいた。

「いいんだ。わかってたから」

「え」

失礼ながら意外に思った雛絵は驚いた。

石綿の母親のことでいろいろありはしたが、はたから見ればそれがきっかけでそれなりに距離は縮まったように思っていた。

「前さ、有村（ありむら）を病院に呼び出したことあったじゃん。その帰りに、公園に寄ったときにそう思ったんだ」

「……私、なんかすげなくしたっけ」

「宮代（みやしろ）先輩だろ？」
　あ、と雛絵は思い出した。そういえば別れ際、かつて宮代のキャンピングカーがあった場所を眺めていたとき、石綿はなにかを言おうとしていた気がした。
「あのとき、病院に呼び出したお詫（わ）びを口実にして、週末デートに誘うつもりだったんだ。『週末予定ある？』って訊（き）いたんだよ」
「ご、ごめん、無視したわけじゃなくって――」
「や、わかってる。だから、宮代先輩だろ？　あそこに住んでいたことくらい誰でも知ってる。そんときの有村の顔見たら、なんとなくわかったから」
「いやいやいや、それは早とちりで」
「そうなの？」
　訊かれて、雛絵は言いよどんだ。
　確かにそれは早とちりだ。しかし、宮代が理由の一つであることは間違いなかった。
　自分とは違う場所にいる戦友の彼と、石綿ではなく自分自身を比べたときに、今の自分で誰かと付き合うということが、雛絵はどうしても上手く腑（ふ）に落ちなかった。
「いや……まあ、宮代先輩なのかもね」
　ほんのわずかに諦めぎみに笑った雛絵（ひなえ）が言うと、石綿（いしわた）は頷（うなず）いた。
「じゃあ、俺行くわ」

突然席を立った石綿に、「え、もう？」と言いかけて雛絵は口をつぐんだ。そう言うのはあまりに気が利いていない。
微妙な表情をしていた雛絵に、石綿は慌てて手を振った。
「違う違う、その、怒ってるとかじゃなくて。これから母さんの職場に行くんだ。勉強のためにさ」
「……勉強？」
ああ、と頷いた石綿は笑っていた。
「昨日母さんに言ったんだ。将来、母さんのところで働くかどうかはもう少し考えさせてほしいって。久しぶりに喧嘩(けんか)したよ。それで結局、実際に職場を見せてもらうことになって。他にもいろいろ見れるところがあれば見てみようと思ってんだ。もしかしたら、就職じゃなくて進学することになるかもしれない」
「……そっか」
「有村(ありむら)の発表、良かったよ。母さんはずいぶん腹立ててたけど、なんか思うところはあるみたいだった。昨日家で記者の人に、有村の発表は一言一句そのまま載せろとか電話で怒鳴ってたから」
「……まじで？」
聞いていなかった。穏やかな内容ではなかったはずだ。またやっかいなことになりそうだな、と雛絵は思った。
石綿が手を振った。
「んじゃ、また学校で」

「うん。あ、そうだ石綿くん。発表のとき、ありがとね」
「……なにが？」
「最初に拍手してくれたじゃん」
ああ、と石綿は思い出したようだった。照れくさそうにしていた。
「別に、たいしたことじゃ」
「――いいや。それは違うぞ、石綿少年」
怪訝（けげん）そうにした石綿に、雛絵は言った。
「いつだって、最初の人がいちばんしんどいんだ」
雛絵はそれを知っていた。
戦友に告げられなかったことだ。直接言えなかったことだ。
「君はたいしたことをしたんだよ」
少しの心地良い沈黙があり、石綿は「そっかな」と呟（つぶや）いた。雛絵は「そうだよ」と頷いた。
「んじゃ」
「うん。あでぃおすぐらっしあ」
改めて手を上げた石綿（いしわた）に、雛絵（ひなえ）は手を振って応えた。
店を出ると、雛絵は駅に向かって歩きながら携帯を取り出した。

泉理（せんり）に石綿の告白を断った旨をメールし、ふと思い出して「そっちはどうなってます？　増田（ますだ）さん」と付け足した。

気温は容赦ない寒さを叩き出（たただ）していたが、冬休み初日にふさわしい晴れ間が広がっていた。

今年は明日のクリスマスイブが週末に重なっていた。雑踏は心なしかいつもより浮かれており、赤と白の飾りつけがそれを助長していた。

突然、身体を動かしたいような、大声を上げたいようなうずうずとした気持ちが雛絵の中に膨れ上がってきた。

懐かしい気持ちに雛絵は微笑んだ。

今なら久しぶりに何かを書けるかもしれなかった。

間章

南沢(みなみさわ) 泉理(せんり)

その四

結果的に見れば終業式での私たちの発表は、研究会にとって良いものになったと思います。正確に言えば、私たちの発表というより有村(ありむら)の発表かしら。方々から怒られはしたけど、会のこれからの方向性の指針になったし、少なくとも私はけっして小さくない力を貰(もら)えた。それは香月(かづき)も同じだったと思います。
私たちと同じ気持ちを学生の皆が持っているとは思いません。けれどそれに近い気持ちを抱えている、もしくは近い気持ちを持とうとしてくれている動きはあると思っています。まあそのせいというかそのおかげというかで、取材や相談事が増えていて、会の忙しさに拍車がかかりそうなんだけれど。香月の愚痴が増えて逃げ出そうとするのは目に見えているので、なんとかしなくちゃとは考えているんだけどね。

そうそう、有村と例の石綿(いしわた)くんなんだけれど、ダメだったみたい。お似合いだとは思っていたんだけど……正直、そうなるだろうなともどこかでわかってはいたの。あの子ああいう性格だから、わりとなんでも器用にかわしたりこなしたりできるんでしょうけれど、最近いろいろ悩んでいたみたいだから。でも、後ろ向きに決めたわけではないみたい。昨日うちにご飯を食べに来たとき、「イケメンの誘いを断ってしまいました。私は女としてランクが上がりました」ってよくわからないこと言いながら、すっきりした顔で笑っていたから。
そういえば、有村が何か私と増田(ますだ)くんのことを勘違いしている節があるの。増田くんは想像どおりというかひょうきんなキャラクターどおりというか顔が広い人だったから、ご飯を食べながら学生の皆の意見

や考えていることを、研究会の活動としていろいろ訊いていただけだったんだけれど。それとも、あれはわかっていてからかっているのかしら。

……さて、大切な報告が一つ。

日取りが決まりました。

十二月三十日に、伊藤くんが医療少年院に移送されます。

移されること自体はすでに知っていたと思うけれど、症候群の研究に協力している私たち関係者にも、本日正式に連絡がありました。

本当に、ごめんなさい。警察への証言で可能な限りのことはしましたが、決定は覆りませんでした。伊藤くん自身が決定を受け入れていることは知っています。けれど私たちは動かずにはいられなかった。けれど、覆らなかった。

ごめんなさい。私なんかより、あなたのほうがよほど心を痛めているのはわかっています。けれどこのことを知らせないのは、してはいけないことだと思うから。

どうかご自愛を。

四章

久野里（くのさと） 澪（みお）

その光景が目の前に広がった瞬間、これは夢だと澪は判断した。

見慣れた場所だった。以前アメリカにいたときに所属していた認知科学研究所だ。清潔に保たれている室内に並べられたいくつかのベッド。注射器や喉頭鏡、採血のときに使うチューブなどが銀色のトレイに並べられていた。実験区画。澪はそこに立っていた。

夢だとわかっているのに激しくなる動悸に澪は顔をしかめた。汗がふき出しどうしようもなく焦り、何かを叫んだ。おそらくやめろという意味合いに類する何かだ。取り乱してベッドに取り付いた。同時に自分の頬に涙の感触があった。この夢では飽きた感触だった。

ベッドに寝ているのは小さな女の子と男の子だった。二人とも知っていた。笑い合った仲だ。一緒の時間を過ごした友人だった。日帰りだったが旅をしたこともあった。ご飯をいっしょに食べた。友人と呼べる知り合いがほとんどいない澪にとって、彼女たちは心の貴重な部分を占有している存在だった。

澪は女の子の手を取った。顔を覗き込んだ。瞳孔が振動し散大していた。涙で目がにじんでいる自分より視界があいまいだろうとわかった。あるいはすでに見えていないのかもしれない。心拍と血圧を示す機器から異音が響いていた。

震える声で、おい、と澪は呼びかけた。同時に覚めるなと自分に叫んだ。

しかし叫びは届かず、いつものように世界が白み始めた。

女の子の口が開いた。

「――」

おそらくはたった一つの言葉。
しかしやはりそれがなんだったのかわからないまま、白が飛び、夢が終わった。

C：あなたは何者なんですか。
K：お前と同じだ。
C：どういう意味です。
K：宮代拓留（みやしろたくる）と伊藤真二（いとうしんじ）の信奉者だ。そうなんだろ？
C：調べたんですか。
K：お前は潜るのに慣れているようだが、潜られる側としての対応はかなりお粗末だな。調べたと言い切る手間もかからなかった。
C：通報する気ですか。
K：何を聞いてたんだ。協力すると言っただろう。
C：信じられません。
K：それでいい。ここで信じるような馬鹿なら協力する価値もない。
K：お前の調べた情報。それは合っている。
C：情報？

K：二〇一六年十二月三十日。時間はまだわからないが、その日に伊藤真二は関東医療少年院に移送される。
C：なぜあなたは知っているんです。
K：理由を言ったところでそれの正当性をお前はどう証明する気だ。こちらに潜るか？　言っておくがこちらはお前が今までに相手をしてきたような阿呆(あほう)じゃないぞ。
K：お前の計画は現状では確実に失敗する。というか、実現まで至らない。
C：そんなことない。
K：脅迫電話と素人の爆弾程度ではどうにもならないんだよ。第一その後の決め手はこれというものを考えついていないんだろう。手伝ってやる。
K：伊藤真二の身柄を警察が移送中、それを襲い、こちらの手に奪還する。

　澪(みお)が布団で目を覚ますと、胸元に違和感があった。
「……お前な。勝手に入るなと言ってるだろ」
　正体に気がついて呆(あき)れた声を出すと、布団の中から呑気(のんき)に「にゃあ」という返事が返ってきた。一匹の黒猫だった。以前電気ストーブが壊れてしまったときに、寒さに耐えきれず湯たんぽ代わりに部屋に招き入れた野良猫だ。とうにストーブは直っていたが、それ以来部屋に入れるまで窓を引っ掻(ひか)き続けるようになってしまった。

渋谷のアパートの一室だった。家賃は間違いなく渋谷で最安値の部類に入る金額で、その安さに見合った狭さと古さのワンルームだった。清潔に使えば少しはみすぼらしさがましになるのだろうが、生憎澪(みお)は部屋が散らかっていても自分の生活の邪魔にならなければ気にならない性質(たち)だ。あちこちに脱ぎ散らかした衣類やデータ化を後回しにしている書類などが散乱していた。

寒さを十分に遮ってくれない煎餅(せんべい)布団を跳ね除け、抗議の声を上げてきた猫の首根っこをつかんで部屋の隅に放り投げると、澪は風呂場に向かった。

ふだんより頭が重かった。数時間前までチャットをしていたせいか、おもしろくない夢を見たせいか。両方だろうなと澪は毒づくと、シャワーの温度を高めに捻った。湯煙で曇る鏡の中で肩口の古傷が目に入った。しっかりと目を凝らさないともうほとんどわからなくなっているが、それはかつて歯型だった。

大切だった女の子につけられた傷だ。

「…………っ」

夢の内容を思い返そうとし、澪は頭を振った。どうせ思い返すことなどできないに決まっていた。もう何度も試したことだ。

風呂場から出てメールや澪自身が管理しているいくつかのサイト、大手マスコミのサイトなどを巡っていると、家を出る時間になっていた。

「今日はイブだ。チキンを食い溜(た)めるなら、浮かれた連中が集まってる公園や繁華街に行くんだな」

そう言って澪が猫を窓から放り投げると、慣れた様子で猫は向かいの塀の上に着地し、まるで了承するように一声鳴いて姿を消した。

クリスマスイブ。

くだんの十二月三十日まで一週間を切っていた。

「……問題ないな。これから移送の前日までもう一度精密検査らしいが、おそらく形だけのものだ。何も出ないだろ」

モニタに表示されたデータを見ながら澪が言うと、神成は安心したように頷いた。

代々木にあるAH東京総合病院の一室。

カオスチャイルド症候群に関する研究という名目で、警察経由で澪個人に貸し与えられた部屋だ。定期的に看護師が清掃に入るため、澪が資料やデータを広げている机回りを除けばアパートと違って清潔が保たれていた。病院全体でそうする方針なのか、窓際に先日まではなかった小さな作り物のクリスマスツリーの鉢が置いてあった。

モニタのデータは澪にとって見慣れた人間のものだった。

伊藤真二。

一連の事件において宮代拓留とともに実行犯の一人とされており、特に橘結衣の命を奪った犯人とされた人物だ。犯行そのものは残虐を極めたが宮代に教唆されたこと及びカオスチャイルド症候群者で

あることが鑑みられ、医療少年院送致の決定が下された。

データはこれまでAH東京総合病院も含めてさまざまな専門機関をたらい回しにされて出てきたものだった。中にはバウムテストやロールシャッハテストのような投影法と呼ばれる心理テストの結果までもが含まれていた。

澪（みお）はため息まじりに言った。

「この分だと、医療少年院に移送されてもすぐに研究機関に引っ張り出されるだろうな」

すると神成（しんじょう）は怪訝（けげん）な表情を浮かべた。そしてモニタを覗（のぞ）き込むようにして言った。

「データが芳（かんば）しくないのか？」

「正直なところ、頭打ちだ。各機関もそうだろうな。心理テストなんぞをやっているのがいい証拠だ。こんな観察者の主観によって結果が変わってくるものを成果として出してきている時点で行き詰まっている。何々と思われる、なんて語尾で終わってる報告書をいくつ読んだと思う」

「彼自身の体調はどうだ。大丈夫そうか？」

「会ってないのか？」

神成からの問いに、澪は問いを返した。すると神成は表情を暗く落とした。

「もうずいぶんな。ご両親ですら面会謝絶の措置がとられてる。せめて移送される前に声をかけてやりたいんだが……」

「……あんたはもう少し上手く立ち回れると踏んでたんだがな」

「無茶言うな。いろいろと綱渡りなんだよ、これでもな」
神成が警察の上層部から圧力をかけられていることを、澪は前々から聞いて知っていた。一連の事件に関して、刑事の中で最も踏み込んでいたのは神成だ。だが事件が一先ずの収束を見たそのあとの管理は、警察という機構そのものに預けられた。神成は事件の真相すべてを警察に話したわけではなかった。話したところでどうにもならないどころか、余計な騒ぎを起こして、真相の裏に潜む蛇をつつくことにもなりかねないからだ。

そういった態度や動きを感じ取られたのだろう、神成は徐々にだが事件に関連する物事から意図的に遠ざけられていた。

その影響は神成が協力を仰いでいる澪にも及んでいた。澪自身も、伊藤とはしばらく直接顔を合わせていなかった。研究にかこつけてというお題目も、成果を上げられずに効かなくなっている。

今日からの精密検査も澪は担当から外されていた。

「やはり移送は担当しないのか」と、澪。

「ああ。その件自体の連絡はあったが、ほとんど事後承諾だった。当日の移送そのものも別部署の人間がやる。……まあ、こっちに断りを入れてくるだけまだましだけどな」

自嘲ぎみに笑って言う神成だったが、忸怩たるものがあるのか声は沈んでいた。

やはり神成は移送を担当しない。

仕方ない、と澪は小さく呟いてから言った。

「神成さん。あんた今日は何時まで仕事だ」
「ん？　なんで」
「今日はイブだ。相手はいないんだろ。何か奢ってくれ」
「……どういう気まぐれだ。というか、そこは相手がいるのかどうか確認するのがマナーだろ」
「いるのか」
　神成はしばらく黙ったあと、高いものは期待するなよとばつが悪そうに言った。

「あとハラミとギアラとハツ刺しを二つずつ。それから野菜の三種盛りとチャンジャと冷麺」
「はい。ただいまクリスマス限定で生親子丼がお安くなっていますが……」
「じゃあそれも。あと私にウーロン茶のお代わりを」
　かしこまりましたと告げて去る店員を澪が見送ると、差し向かいに座っている神成と目が合った。
「なんだ」
「少しは遠慮を……いや、なんでもない……」
　代々木にある焼き肉屋に入ってすでに一時間が経過していた。学生がふだんから通うほどではなく、かといって本当の味を求める人間が行きつけにするほどでもないといった店だった。週末のイブにもかかわらずカップルはおらず、殊勝にも仕事帰りのサラリーマンで店内はごった返していた。

追加で運ばれてきたものを手当たり次第に澪がぱくついていると、先ほどから酒ばかり飲んで箸がまったく進んでいない神成が呆(あき)れたように言った。
「……で？」
「なんだ？　食べないのか」
「何の用なんだ」
ぴたりと澪は箸を止めた。
「用とは？」
「あんたが何の理由もなく飯に連れてけなんて言うわけないからな」
「そう見えるか？」
聞きながらも澪(みお)は笑った。確かに今まで神成(しんじょう)と飯を食べに出たことなど一度もなかった。
神成は馬鹿馬鹿しい、という感じにビールをあおった。結構飲んでいるはずだったが、存外に強いのかまったく顔色は変わっていなかった。
「当たり前だろ」と、神成。
「じつはな」
澪は食事を再開し、律儀に神成が育ててくれていた肉を遠慮なく数枚掻(か)っ攫(さら)いながら言った。
「――今月はピンチなんだ」
「……は？」

「百瀬（ももせ）さんのところの仕事は基本的に出来高で波があるからな。そこに来ていろいろ物入りが重なった。つまり金がない」

「もう食べるな」

　網の上で箸がぶつかった。澪は舌打ちして冷麺に手を伸ばした。

　神成は呆（あき）れたようにため息をついた。

「……飯の見返りに勝手にあんたが何か動いてるんだと思っていたんだがな」

　ふん、と澪は鼻を鳴らした。

「それは私に期待しすぎだな。ああ、上ミノとカシラと長ネギ二つ。あとウーロン茶」

「頼むんじゃない！　どこにそんな入る余裕があるんだ」

「奢（おご）りは別腹なんだ。アメリカにいたときからな」

「……そんなんだからイブに相手がいないんだぞ」

「あんたに言われたくない」

　運ばれてきたウーロン茶を澪が一息に飲むと、神成は「……好きにしてくれ」とうなだれて席を立った。

　その姿がトイレの中に消えた瞬間、澪は動いた。

　見慣れた神成の鞄（かばん）を開け、中に入っていたタブレットを立ち上げると同時に外部メモリを差し込んだ。把握しているパスワードを打ち込むとあっけなく開き、データのコピーが始まった。

「……悪いな」

　届くはずのない断りを入れ、澪はキーを叩いた。

K：時刻は午前十時過ぎだ。AH東京総合病院を出て、府中の関東医療少年院に到着予定が高速を使って午前十一時。おそらく通勤ラッシュ後の時間帯に合わせてということだろう。

C：どうやって調べたんですか。まさか警察のデータベースに潜ったわけじゃないでしょ。

K：さてな。使われる車両の画像とナンバーはあとで送る。移送に当たる警官は運転手を入れて四人。車両自体は一台だが、はっきり言って一年以上前に終わった事件の犯人を医療少年院送致するだけにしては異常な厳重さだ。

C：それだけ伊藤さんがたいした方だってことです。絶対に助けなきゃ。

K：明日にでもそちらに爆弾の材料が届く。中に入っている資料どおりに組み上げろ。

C：嘘だ。ちょっと待ってどうやってこちらの住所を。

K：潜られる方はお粗末だと言ったはずだがな。

　十二月二十五日。クリスマス。

　澪が病院での作業を終え、陽が落ちたころに本来の仕事場である信用調査会社フリージアに出向くと、そこには意外な客人があった。

「お邪魔しています」
　南沢泉理（みなみさわせんり）だった。フリージアの社長である百瀬（ももせ）と談笑でもしていたのか、ソファの前のテーブルにはコーヒーが二つ並んでいた。
　苦手な相手の姿に、澪は表情を硬くして言った。
「……何をしに来た」
「クリスマスってことで立派なお菓子を持ってきてくれたのよ。ほら、座って」
　答えたのは百瀬だった。澪が泉理を苦手としていることを感づいているのか、どこかからかうような笑みを浮かべていた。
　テーブルの上に置かれた箱には少々値が張っていそうなケーキが並んでいた。百瀬がコーヒーを淹（い）れに席を立った。自分の分だろう、と思った澪は諦めてソファに座った。
「泉理ちゃん、あなたのこと待ってたのよ」
　遠くからの百瀬の声に泉理が肯定するように会釈した。澪はとたんに凝ったような気がした首を鳴らして促した。
「何の用だ」
「クリスマスのお祝いも兼ねて年末のご挨拶に。それと結人（ゆうと）がたまにここで勉強の面倒を見てもらっているから、そのお礼を百瀬さんと久野里（くのさと）さんに」
「……別に面倒など見ていない」

泉理は苦笑した。

「結人はそう思っていないみたいだけれど」

ち、と澪は舌打ちした。

結人がたまにフリージアに顔を出すようになったのは、結人たちがＡＨ東京総合病院でのリハビリを終えて退院した直後からだった。

そもそものこれというきっかけに、澪（みお）は心当たりがなかった。事件のときに面識自体はあったが、深く話したことはなかった。その後も特に密な会話をした記憶はない。ただ病院でのリハビリの際に、カオスチャイルド症候群の研究を通して、結人（ゆうと）を含めた宮代（みやしろ）の関係者と澪は共に過ごす時間が多かった。

確かにそのときに結人が将来弁護士を希望しているという話は聞いていた。結人たち入院患者が看護師に希望する個人的な品の中に、弁護士に関する本を見つけそれがあまりにためにならない参考書だったので、もう少しましな本を薦めてやったりはした。しかし交流と言えばその程度だった。

だが退院以来、結人はフリージアに顔を出すようになった。ふだんは友人たちとよく図書館に行っているようだが、わからない部分や疑問点があると澪に訊（き）きに来るようになったのだ。

「澪ちゃんは小さい子には弱いからねえ」

「そうなんですか?」

コーヒーを持ってきた百瀬（ももせ）がおもしろそうに言うと、泉理（せんり）は意外だ、というふうに目を丸くした。

「ちょっと、百瀬さん」

　余計なことは言うなとはっきりと咎(とが)める口調で澪は言った。が、百瀬は「いいじゃないの」と明らかに楽しんでいる様子で受け流し、続けた。
「アメリカにいたときにね。澪ちゃんは子どもたちの面倒を見ていたの。保育士的なことじゃなくて、あくまで研究者としてだけど。それでも結人くんより小さい子たちを、何人もね」
「なるほど。……それでですか」
　と、泉理は何かに納得したように頷(うなず)いた。澪はそっぽを向いてコーヒーを啜(すす)った。
「結人がたまに言うんです。久野里(くのさと)さんはなんだか担任の先生みたいだって」
　とたんに百瀬は軽く吹き出した。
「先生にしては口が悪いけどねえ」
「ほっといてください」
　澪が口を尖(とが)らせると、泉理は薄く微笑んだようだった。そしてわずかに身を乗り出すようにして言った。
「数日前、結人がここにお邪魔したときだと思うんだけれど。……伊藤(いとう)くんの移送の件を、結人に教えてくれたでしょう?」
　わずかに澪の肩が跳ねた。視線を泉理に戻すと、澪は目を伏せる程度に頷いた。
「ああ」

「そのことも、お礼が言いたくて。私がすぐに言うつもりだったんだけれど、正直……思い切りがいることだったから」

皮肉か、と澪は思い泉理を凝視した。私に何の断りもなく、という透けた気持ちを見てやろうと睨み続けたが、そこから感じ取れたのは確かに申し訳なさそうなそれだった。

澪はまた居心地の悪さを感じて身じろぎした。

「……結人は、何か言っていました？」

心底心配している声。泉理のこういったところが澪は苦手だった。

何を心配しているのか。考えるまでもない、結人本人のことだ。家族のことだ。それを見せつけられるたびに澪の感情はざわついていた。そして、それがはっきりと不快だった。

澪が答えずに黙っていると、その沈黙をどう捉えたのか泉理は語気を強めた。

「どうなんですか？」

数日前の結人の表情を澪は思い返した。経過はどうあれ結果として自分の姉を殺した人間が遠くに行く。そう告げられたときの結人のあの顔。

溢れた何かをこぼすように言った一言。

「……いや。あいつは何も言わなかった」

「…………」

しばらくの間、泉理は耐えるように黙っていた。そして、そう、とだけ言ってほどなくフリージアを辞した。

澪はそれを見送ると仕事に戻ったが、あまりはかどらなかった。泉理と結人の顔がちらつき、手が止まっていると自覚するたびに舌打ちし、作業を再開しなければならなかった。

家に帰って部屋の電気をつけると、それを待っていたかのように猫が窓を引っ掻き出した。

ここ最近は流れ作業で窓を開けていた澪だが、なぜだかそうする気になれずに、かりかりと響いてくる音を聞いたまま部屋の真ん中で佇んでいた。

別段、泉理に嘘をつく必要はなかった。あのとき結人は小さな声で返事をした。澪はそのことが原因で、ここ数日寝不足だった。やっかいごとを抱え込もうとしていた。だがそのやっかいごとが何か泉理にわかるはずはなかった。結人がなんと言ったかくらい、伝えても良いはずだった。

泉理の心配している姿がまたちらついた。

「……面倒くさい」

あれはおそらく母親の目なんだろうなと、澪は思った。それも、映画や小説で言うところの、理想の母親のものだ。

澪はああいった目を親から向けられた記憶はなかった。親とは絶縁状態になって数年になる。極端ではなく、今生きているのか死んでいるのかすら知らなかった。もともとそうなる前から、お互いのことに興味を持っていない関係だった。

はっきりと絶縁の言葉を叩きつけたのは確かアメリカにいるときだった。電話越しだった。研究所の女の子の故郷へ行ったときだ。日帰りの旅行だった。

かりかりと引っ掻く音が大きくなった。

物思いに沈んでいた自分に気がつき、澪はため息をついた。やはり泉理と話すと調子が狂った。

窓を開けると猫は遅いと言わんばかりに部屋に飛び込んできて、図々しくも餌を求めて鳴いた。夕食に買ってきていたツナサンドの包みを開けて、中身のツナを放り投げるとたいしてありがたくもなさそうに猫はそれを食べた。

「………」

澪は服の上から肩口の傷を触った。

「――」

女の子が言った一言。

相変わらずそれがなんだったか、澪は思い出すことができなかった。

K：明日だな。仕込みは済ませたか。

C：もちろん。それで、どうするんですか。電話の内容は決まりましたか。

K：仕込みが作動したあと、前に送った携帯から以下の番号に電話をかけろ。090-XXXX-XXXX。

C：これは？

K：運転を担当する奴の携帯番号だ。まずいたずらだと思われないように、伊藤（いとう）の移送を中止しろとすぐに伝えろ。爆弾を車に仕掛けたとな。そして仕込みのことを教えてやれ。それで本気だと思うだろう。

C：そのあとは。

K：神成（しんじょう）という刑事をその場に呼び出せと伝えろ。

C：誰ですかそれ。

K：すべての元凶だ。こいつのせいで宮代（みやしろ）も伊藤も捕まった。警察の内部で、実質的に事件の捜査の陣頭指揮を執っていたのはこいつなんだ。

C：本当ですか。

K：間違いない。私はこいつが許せないんだ。

C：僕もですよ。本当にその人が？

K：ああ。だから伊藤を奪還すると同時に、こいつに復讐（ふくしゅう）する。

C：殺す気ですか。

K：当然だ。お前はこいつを殺したくないのか。

C：殺したいですよ。当たり前じゃないですか。

K：神成（しんじょう）がその場に来るまで、電話を繋（つな）いでいろ。ついでに、いかに神成が愚かなことをしたのか伝えてやれ。あとはこっちでやる。

C：待ってください。一つだけ教えてください。

K：なんだ。
C：あなたは、なぜここまでするんですか？
C：どうなんです？
C：ちょっと。見えてますか？
K：最初に言っただろう。宮代拓留と伊藤真二の信奉者だと。

　十二月三十日。

「おはようございます」
　澪が指定した午前九時過ぎに、結人はフリージアにやってきた。律儀なことに筆記用具を入れた鞄を肩からかけていた。
「……なんだそれは」
　澪が鞄を指差すと、結人はぽかんとした表情を浮かべた。
「勉強道具、ですけど……」
「誰が持ってこいと言った」
「勉強するんじゃないんですか？」
　素直な物言いに、澪は言葉に詰まった。すると見ていた百瀬が笑った。
「そうよねえ、結人くんが澪ちゃんに呼び出されたらそう思うわよねえ」

ばつが悪そうに澪は頭を掻いた。
「……まあいい。確かに少し時間はあるからな」
いつも使うテーブルで結人に勉強道具を広げさせ、澪は自分の仕事を続けた。
時折結人がしてくる質問に、澪は適当に答えてやった。今は基本的な学力を身につける時期で、理系と英語に特化した澪と結人の相性は良かった。そうでなくとも所詮は中学生の勉強範囲だ。澪が片手間に答えられる程度の内容だった。
そう、結局結人とは片手間で適当な関係なのだ。仮に結人が死んだとしても泉理のような顔はできない。けれど自分は馬鹿なことをしようとしている、と澪は面倒くさそうに顔をしかめながら時間を待った。
午前十時。
澪は仕事の手を止め、集中しているらしい結人の邪魔をしないようにフリージアを出た。
入り口の脇で数分待ち、電話をかけた。
出るまで何度でもかけるつもりだったが、意外なことに相手はワンコールで出て、間を置かずに言った。
『悪いが今立て込んでいる。あとでかけ直す』
「移送係の奴からあんたに連絡はあったか」
神成の息を呑む声が携帯越しに伝わってきた。
『……どういうことだ』

苛立(いらだ)った声だった。澪(みお)はそれに構わず続けた。

「あったんだな？」

『……ああ』

「あんたへの怨恨を匂わせていた――いや、今も電話口で移送係に匂わせているはずだ。あんたに犯人の心当たりがあるか確認が取れるまで、一時的だがあんたの指示待ちになってるだろう」

『ふざけるなよ。こんなことして――』

「伊藤(いとう)の安全確保が最優先だ。フリージアに回すように指示してくれ」

『説明しろ。どういうことだ』

「時間がないんだよ。とにかく――」

がん、という激しい音が澪の耳に届いた。神成が向こうで何かを殴ったらしい。

『説明しろって言ってるんだ！』

澪は口元を吊(つ)り上(あ)げた。誰かに怒声を浴びせられるのは久しぶりで、それが心地良かった。

「移送に使う車に爆弾がないことはすぐにわかる。警察署とAH近くの自販機の裏から上がってる煙が、爆弾のものではなく単なる煙だということもな。犯人は一時間もしないうちに逆探で捕まる。そうなって指揮系統が落ち着いたら終わりだ。時間がない。あんたが口出しできる状況のうちに、フリージアに伊藤を回してくれ」

返事を聞かずに澪は通話を打ち切り、電源そのものも切った。

室内に戻り、結人(ゆうと)の手が止まる切れ間を待って、澪は声をかけた。

「そこまでだ」

結人はぽかんとした顔を見せた。

「え」

「これからお前に客が来る」

「……お客さん？」

そうだ、と澪は頷(うなず)いた。

泉理(せんり)の顔がちらついた。らしくない、と自分に呟(つぶや)いてから澪(みお)は続けた。

「何日か前、お前に伊藤(いとう)が移送されることを伝えたとき、お前は言っただろう。会いたいと」

突然に結人(ゆうと)の顔から表情がなくなった。

「会って、どうする気だ」

「…………」

「言いたいことがあるんだろ。もしくは殺したいか？」

「そんなこと……！」

結人は立ち上がって声を荒らげた。最近年齢のわりには急に大人びてきたと澪は思っていたが、そのときの結人の目と身体の震えはまるで幼かった。

「まあなんでもいい。好きにしろ」

狙ったように来客を告げるベルが鳴った。結人は撃たれたように入り口のドアを見た。
「澪ちゃん、あなたねえ……」
百瀬が呆れた声を出した。澪がすみません、と会釈程度に頭を下げると、百瀬は「まったくもう」と諦めたように言って、インターホンの受話器を取らずに、直接応対に向かった。
「はい。どちら様？」
「警察です。開けてください」
百瀬が確認するように澪に視線を投げかけた。澪は頷いた。
「はいはい」
百瀬がドアを開けると、二人のスーツ姿の男が立っていた。手帳すら取り出さずに中に入ってきて言った。
「突然失礼します。私たちは――」
「神成ちゃんの同僚でしょ。何のご用？」
機先を制され、うっと言葉を詰まらせた男を見て、澪は苦笑した。どこにでもいる中年女性に見える百瀬だが、その実とことん狸なのだ。外見とのギャップもあいまって、あっという間に相手より優位に立つ。
男は何と言おうか迷っていたようだったが、やがてやけくそぎみな感じで言った。
「しばらく、ここに我々を滞在させてください。変な話なのですが、少年を移送中でして、それで――」
「いいわよ。どうぞ」

と、百瀬はあっけなく身体を脇にどけて道を開けた。男が呆然とした。

「え、いいんですか」

「そっちが言ったんじゃない。早く、寒いのよ」

「あ、ありがとうございます。あの、それと申し上げにくいのですが——」

「洗浄ね。散らかさないでよ」

洗浄とは安全確保のことだ。先に言い出されて男はまたもあっけにとられていたが、百瀬にもう一度促されると、「は、はい」とまるで部下のように頭を下げて、もう一人とともに室内に入ってきた。

男たちがトイレまで含めて、簡単に室内を確認する間、澪は手持ち無沙汰ぎみに壁に寄りかかっていた。隣にはいつの間にか結人がいた。下を向いていた。

数分もしないで確認が終わると、男は無線で連絡を入れた。ドアの向こうから、ほんのわずかに車のドアが閉まる音が聞こえた。

結人は動かなかった。

フリージアのドアが開いた。新しい男が二人、伊藤を挟むようにして入ってきた。

伊藤はスウェットにパーカーという休日の私服のような格好だった。おそらく警察から与えられたものだろう。少しやつれているが、一時期と比べると回復しているほうだ。移送される前に病院で体を拭いたばかりなのか、小綺麗に見えた。

「…………え」

中に入った伊藤は立ち止まり、目を丸くした。

「久しぶりだな」

澪は声をかけ、伊藤の前に立った。不審な目を向けてきた男たちに、百瀬が「カオスチャイルド症候群の研究協力をしてる、神成(しんじょう)ちゃんの知り合いの子がいるっていうのは知ってるでしょ。この子よ」と言い添えた。

何も言わない伊藤を澪は検分するように見た。

「その後、変わりないか」

澪の問いかけに、伊藤は返事をせずにわずかに頷(うなず)いた。無視をしているというわけではなさそうだった。伊藤の目は壁際の結人に注がれたまま動かなかった。

澪は伊藤の視線を追った。結人が顔を伏せたまま立っていた。

結人と伊藤が顔を合わせるのは事件以来だった。というより真相を知っている人間の中で、事件以降に伊藤と顔を合わせていたのは研究に協力していた澪と、捜査をしていた神成以外誰もいなかった。

伊藤の様子に、男たちが結人に目を投げて不審な顔を浮かべた。

しかし結人は動かなかった。

おい、と声をかけて促すのは簡単だった。しかし澪はそうする気になれず、結人の元へ向かった。

正面に立ち、結人の左肩に手を置いた。返事をするように、結人の鼻をすする音が聞こえてきた。肩に置いた澪(みお)の手に結人の手が重なった。震えていた。落ちた涙が結人の服に染みを作るのを澪は見た。

恨みはあるはずだった。悲しいはずだった。そして何より怒っているのかもしれなかった。
結果として伊藤が手をかけてしまった橘 結衣は、結人にとってどうしようもないほど大切な存在だった。たった一人の血を分けた姉。澪が泉理から漏れ聞いた話では、青葉寮に入り立てのころ、結人は寝るときですらけっして結衣の手を離さず、いつもそばにいたという。地震のあと異性には近づくことすらできなかった結衣も、唯一結人だけは受け入れていた。
二人はお互いを支え合っていた。本当に、家族だったのだ。
澪に踏み込む余地はなかった。
しかし引き合わせたのは自分だ、と澪は結人の手の温度を感じながら思った。らしくない。本当にらしくなかった。
澪はハンカチを持ち歩かない自分の性格に舌打ちした。仕方なく、指で結人の目を拭ってやった。
「言いたいことがあるんだろ」
やがて結人は頷いた。やんわりと澪の手を払うと、自分の服の袖で涙を拭った。
顔を上げて言った。



「……大丈夫、です。拓留(たくる)兄ちゃんも、きっと同じ気持ちだと思うから」

「――――」

　結人(ゆうと)の表情に、澪(みお)は動けなかった。はっきりと、目を奪われた。まるでこの場にいる誰よりも大人のような、そんな顔をしている気がした。

　結人はもう一度顔を拭うと、当然のように自分の足で歩いた。

　そして伊藤(いとう)の前に立った。

「伊藤さん」

「……結人」

　呻(うめ)くように伊藤が言った。そしてすぐに、見ていられないというように顔を伏せた。

　瞬間、澪は目を見張った。

　結人が伊藤の胸に抱きついていた。背中に手を回し、自分の身体を押し付けるように。

　結人の嗚咽(おえつ)をこらえる声が聞こえた。

「……っ」

　伊藤の顔がくしゃくしゃに歪(ゆが)み、膝をついた。抱き返しながら、伊藤は泣いていた。

「……ごめんな。ごめんなぁ……」

　結人は伊藤の肩に顔を押し付けながら、何度も横に振った。背中が震えていた。

澪からは結人の顔は見えなかった。しかしそれは泣いている姿だった。

結人のくぐもった声が響いた。

「いろいろ、本当に……。……本当に、ごめんなさい」

結人を掻き抱く伊藤の手にありったけの力がこもった。伊藤は顔を擦りつけるように激しくかぶりを振った。

抱き合っている二人に、その場の誰もが動けずにいた。

そして澪はやはり結人から目が離せなかった。

やがて結人が絞り出すような大きさで言った。

涙が混じった声だった。

「……ありがとう。ありがとう、ございます……」

その瞬間、澪の視界が明滅した。

泣き叫ぶ伊藤の声が聞こえてきていた。しかしそれはどこか遠くから響いてくるようだった。

白くなっていく目の前の光景に澪は逆らえなかった。

夢の光景だった。

アメリカ時代。実験区画。女の子が口を開いた。

「――ありがとう」

結人と伊藤のむせぶ声がかき消され、女の子の声が響いた。

澪（みお）は声もなく涙を流していた。
それは澪自身が気づかないほど、自然な涙だった。

ドアを開けた瞬間、澪は胸倉を掴（つか）まれた。
「なんで俺に何も言わなかった」
夜だった。
澪が自宅に帰ってからほどなく、ドアベルがけたたましく連打された。相手はわかっていたので、誰だと問うことなく澪はドアを開けていた。
神成（しんじょう）は初めて見るくらいに怒っていた。振り払う気力がなく、澪はされるがままだった。
「今さらだけどな。お前は何をしてもいいと――」
追及する神成の言葉が止まった。澪は無理やり下を向いたが、胸倉を掴まれたままでは満足にそれもできなかった。
「……どうしたんだ」
「……別に何も」
無駄だと知りながら澪はそう返したが、声に力は入らなかった。泣き腫らした目とそのまわりがひどいことになっているのはわかっていた。

神成は手を離し、玄関の中に入ってドアを閉めた。女の家に入るのに許可も得ないのかと軽口を叩(たた)きたかった。けれど気持ちが重く澱(よど)んでいた。

澪は無言で部屋の中に戻ると、神成も黙ってついてきた。猫が初めて見る闖入者(ちんにゅうしゃ)に警戒したのか落ち着きなく走り回った。

「……猫、飼ってたのか」

その気遣いに澪はようやく苦笑できた。切り替えるように頬(ほお)を軽く叩くと、開き直るようにひどいことになっている顔を正面から神成に向けた。

「飼ってるわけじゃない。そんなことを聞きに来たのか」

神成は唖然(あぜん)とした表情を浮かべると、複雑な気持ちにいちいち表情をつき合わせて顔の色を変えたあと、諦めたようにため息をついた。

「……脅迫まがいの電話と、出来損ないの爆弾を仕掛けた犯人は逮捕されたよ」

そうか、と澪は頷(うなず)いた。

そのまま沈黙が流れると、神成は腑(ふ)に落ちないような表情を浮かべた。そしてなおも黙っていたが、やがて言った。

「……何も聞かないのか」

「興味ない。というか、あんたが何か聞きに来たんじゃないのか」

神成は大きなため息を一つついてから、言った。

「捕まったのは横浜に住んでる未成年の男子でな。犯行そのものは認めているが、共犯者がいたというんだ。チャットのみのやり取りだったらしく、ハンドルネームはK。だが、押収したそいつのマシンを調べてみても、そんなログは残っていなかった」

さすがだな、と澪(みお)は心中で感心した。いっさいの足跡の消去を頼んだのは知り合いのスーパーハッカーだったが、相変わらずどうやっているのか見当がつかなかった。警察の捜査からも逃げおおせるやりかたを、澪は知らない。

「男子曰(いわ)く、すべてはそのKに扇動されてやったということらしい。なぜ、俺に何も言わなかった」

「私がKだという証拠はないんだろ?」

「俺に直接電話しただろうが」

「言い直す。私がKだという、公に使える証拠はないんだろ?」

「……言うつもりはないってか」

「犯人は捕まった。何か問題あるか」

Cと名乗る馬鹿男子が、伊藤(いとう)の移送に合わせて物騒なことを企んでいるという情報を澪がネット上で摑(つか)んだのは、伊藤の移送の日取りが決まった翌日だった。不出来な爆弾を車両に仕掛けて伊藤を救い出すという、失敗が目に見えている計画だ。Cがアクセスしているサイトの内容から、素人なりに自力で爆

弾を仕掛けることができるだろうと踏んだ澪は、そのことを最初に神成（しんじょう）に報告しようとした。伊藤は大切な研究対象だ。失うわけにはいかなかった。

　しかし結人（ゆうと）の件があった。

　無理やりでも神成に、移送に公式な立場から介入してもらう必要があった。爆弾を殺傷能力のないものに変更させるための材料を澪が送ったのだが、かなりの出費だった。言ったら反対するに決まっている神成には、何も言うわけにはいかなかった。

「……結人くんのためか」

「……さあな。ああ、そうだ一つだけ。伊藤は無事に移送されたんだろうな」

「滞りなくな。Kとやらがなにもしなかったんでな」

　嫌味に澪は肩をすくめた。しっしっと手を振ると、神成はもはや呆（あき）れた様子すら見せず、肩を怒らせてドアへ向かった。

　出ていく直前、振り返らないまま神成が言った。

「……確かに伊藤くんの立場を考えると、今後結人くんが自由に面会できるようになるかはわからない。だが、時間が経てば穏便に会えたはずだ。こんなことをしなくてもな。……あんたはもう少し、人に頼ることを覚えるべきだ」

　ドアが閉まった。

　鬱陶（うっとう）しい沈黙と寒さが部屋に残り、澪は力尽きたように寝転がった。

「わかってんだよ、そんなことは」

伊藤（いとう）が医療少年院に送致され、研究機関をたらい回しにされ続けるとしても、時間が経てばどこかで結人（ゆうと）は正式な手続きを踏んで伊藤と面会できたはずだ。

無理やりな計画を実行したのは勇み足だと澪（みお）は理解していた。しかしどうしても、できる限り早く、結人の願いを叶（かな）えてやりたかった。

アメリカにいた子どもたちと結人は違う。それもわかっていた。年齢はもちろん、背格好すら似ても似つかない。

強いて理由をあげるとすれば。大事な人間を奪われた結人が、奪った対象を前にして何と言うのか。どんな想いを抱えて、どんな行動を取るのか。

それを、澪は知りたかった。

「……ありがとう、か」

油断するとまた涙が出そうになるのを、澪は堪えた。

結人は事件の真相を知っている。伊藤は自らの意思で結衣（ゆい）を手にかけたわけではない。しかしそれでも結人はまだ子どもだ。すべてを割り切れるわけがない。

だが澪が目を奪われたあの表情は。

そしてアメリカにいたとき、あの女の子は――ベスという名前の、あのこまっしゃくれて生意気で、澪と同じく両親から疎まれ、流れ着いた研究所で研究の材料にされ、他ならない澪が加担していた実験によって

命を奪われたあの女の子は、絶命する瞬間、ありがとうと言ったのだ。
　加害者である、澪に対して。
　ありがとうと。
「くそ……！」
　流れ落ちてしまった涙を八つ当たりぎみに澪は拭った。
　時刻を見ると、日が変わっていた。
　三十一日。大晦日（おおみそか）。
　一年の最後の日。不意に自分はこれからどうすべきか、澪は思いついてしまった。

「……そう。いいわよ。澪ちゃんがそう決めたのならね」
「……あまり驚いてませんね」
「まあ、遅かれ早かれそうなるだろうなとは思っていたから」
　寝耳に水であろう決断を澪が告げると、百瀬（ももせ）はあっけらかんと言った。何事にも百瀬が動じないのはいつものことだが、どうもきな臭いものを澪は感じた。
「何か、知ってるんですか？　アメリカ時代の私のことを」
「そりゃ一通りはね。そう言ったから、澪ちゃんはウチに来てくれたんでしょ？」
「……」

どうも誤魔化されている気がしたが、澪(みお)はまあいいかとすぐに思い直した。これから直接確認すれば済むことだ。

「とりあえず着の身着のままで向かいます。必要なものがあったら連絡しますから、あとで送ってもらえますか」

「いいわよ。料金は持ってあげる。優秀な情報屋をこのまま手放すのは惜しいからね」

助かります、と澪は言ってしっかりと頭を下げた。なんだかんだ言って世話になった場所だ。比較的自由に動けたのは百瀬(ももせ)の性格と力に依(よ)るところが大きかった。

「ああそうだ、澪ちゃん。一つだけアドバイス」

出ようとしたところで百瀬が言った。澪が振り向くと、にやりという言葉以外がまったく似合わない表情で百瀬が笑っていた。

「あなたね、澄ましているときもすてきだけれど、たぶんいちばんかわいく見えるのは泣き顔よ。昨日初めて見て、そう思ったわ」

かっと頬(ほお)が赤くなるのを感じ、澪は慌てて向き直ってドアを開けた。

「うるさいですよ」

およそ別れにはふさわしくない言葉を叩(たた)きつけて、澪は乱暴にドアを閉めた。

フリージアから成田空港まではおよそ一時間半だった。

大晦日の昼の空港は新年を海外で過ごすであろう客でうるさく、徹夜明けの澪の頭にはがんがんと響いた。昨夜というか今日の日付変更とほぼ同時に思い立ったにしてはなかなかの行動力だよな、と澪は自分を褒めつつ、とにかく座れるベンチを探した。

キャンセル待ちで粘った便が飛び立つまではまだ間があった。手続きを済ませてから出発ロビーで休んだほうが静かだろうが、手続きの列に並ぶ人はおびただしいことになっており、挙げ句に先頭の人間が係員と揉めていた。あそこに並ぶ体力は澪には見当たらなかった。

しかしベンチはどこも埋まっていた。家族連れの嬌声があちこちで耳についた。澪はうんざりとして、いっそのことそこらに座り込んでしまおうかと思い、手頃な場所を探して視線をさ迷わせていると、いきなり肩を摑まれた。

振り向き、澪はまず呆れた。そしてそれを隠さない声色で言った。

「……なにしてるんだ？」

神成だった。走ってきたのか、肩で息をしていた。昨日の事件処理で同じく寝ていないのか、顔に疲れが出ていた。

「それはこっちの台詞だ。アメリカに戻るだと？」

「ああ。確認したいことができた」

「あのな……ＡＨでのあんたの研究と部屋はどうなる」

息を弾ませながら神成（しんじょう）が言った。澪（みお）が持っていた飲みさしのペットボトルを掲げると、ひったくるようにして神成はそれを受け取り、乱暴に呷（あお）った。

「いい加減頭打ちだと言っただろう。離れたところで誰も極端には困らない。落ち着く先が決まったら連絡するから、ネット上でのやり取りで十分だろ」

「手続きとか、いろいろあるんだよ。昨日の今日でいきなり言われてもな」

「そこらへんは好きにやってくれ」

「あのなあ……」

人の流れを遮っていたのか、行きかう人からうるさそうな視線が飛んできた。澪と神成は壁際に寄った。

神成の携帯が鳴った。呼び出し画面を見て神成は顔をしかめたが、結局出ずにポケットに戻した。

「現場からだろ。いいのか」

「あんたが言うな。……すっぽかしてきてるんだ。理由くらい教えてくれてもいいだろ」

上手く説明する自信が澪にはなく、黙った。神成は追及を重ねなかったが、それでもじっと待っていた。

感情がまとまらないまま、澪は言った。

「昨日の犯人だけどな」

「……うん?」

「ハンドルネームをCと言ったんだが」

神成が「認めてるんじゃないか」と小さく怒鳴ったが、澪は無視した。

「カオスチャイルドの頭文字から取ったそうだ。本人は症候群者じゃないから、それにあやかったんだと。宮代と伊藤の信奉者らしい」

「信奉者？」

「そのままの意味だと思うがな。殺人鬼を神だと崇める手合いと一緒だ。話を合わせるために私も信奉者だと名乗ったよ。だが、案外正しいんじゃないかと思ってな」

計画の前日の二十九日、なぜここまでするのかとCに問われて、澪は思わずキーボードを打つ手を止めた。答えに詰まったからだ。少し悩んで、宮代と伊藤の信奉者だと打ち込んだ。

「……アメリカに居たとき、委員会は私から大切なものを奪った。その復讐は必ずやり遂げる。だが、私が何を恨んでいるのか、大切なものが奪われたまさにその瞬間、私は何をしていたのか。正直……あいまいな部分がある」

「…………」

「今さらの話だ。だが、昨日の結人を見ていて、わずかに思い出したことがある。私はそれの全容が知りたい。今もまだ、何かを忘れている気がするんだ」

神成は黙って聞いていた。澪はいつの間にか消えていた眠気に気づかないまま続けた。

「何が起こるかはわからない。が、どうせろくなことじゃないだろう。私が泣いたんだぞ？　一大事だろ」

ふっ、という神成が吹き出す声が聞こえた。

「だが、宮代（みやしろ）も伊藤（いとう）も、知りたくもなかったことを受け入れている」

おそらくは結人（ゆうと）も。そして、事件の真相に関わった他の連中たちも。

「――私の番だ。今度は、私の番なんだよ」

見れば、手続きの列で揉（も）めていた者が消えており、少しずつだが列が動き始めていた。

相変わらずベンチは空いていなかった。出発ロビーに移動したほうがいいだろうと、澪は神成からペットボトルを奪い返した。

「じゃあな。いい加減座りたい」

ああ、と神成が手を振った。

列に並ぼうとして、澪はふと思い出した。

「ああ、そうだ。一つ頼まれてくれ」

言って、澪は財布から安アパートの鍵を取り出し、神成へ放り投げた。

「これは？」

「家の鍵だ。夜に帰れば猫が窓を引（ひ）っ掻（か）くはずだから、捕まえて誰か里親を探してやってくれ」

「……いいのか。あんたの猫だろ」

「飼ってるわけじゃないと言ったろ。たまに餌をやっていただけだ」

「珍しいな、あんたにしては」

何気なく言われて、澪は言葉に詰まった。

珍しいことだろうか。そうなのかもしれなかった。

不意に、結人が言ったことを泉理(せんり)に内緒にしていたことを澪は思い返した。伊藤に会いたいと結人が漏らしたことを泉理に黙っている理由はなかった。そもそも泉理には結人との生活の中で伝わっていることだと改めて思った。

なぜ泉理に黙っていたのか。

ある考えが浮かぶと同時に、馬鹿馬鹿しいと澪は苦笑した。

「いや、そうだな。もし大丈夫ならあんたのところで飼えないか？」

「……別に構わないけどな。実家でも猫を飼っていたから」

「一人暮らしでペットを飼うと婚期が遠のくらしいぞ」

「やかましい。……で、名前は？」

え、と澪は意表を突かれた。

「……名前？」

「そう、名前。どうあれ、あんたが拾って面倒を見ていた猫だろう。なんて呼んでたんだ」

「別に決めてなかった。おい、とか、猫、とか」

あのなあ、と神成(しんじょう)は呆(あき)れた。

「じゃあ、今決めてくれ。あんたの猫なんだから」

「だから、飼ってたわけじゃない」

しかし神成は引き下がらなかった。
澪（みお）はため息をついて、しばらく悩み、言った。
「……じゃあ、クロで」
「クロ？」
神成が目を丸くした。
そして、爆笑し始めた。澪は憮然（ぶぜん）として言った。
「なんだ。黒猫なんだからそれでいいだろう」
「いや、すまない。クロ。クロね。いいんじゃないか？」
にやにやとする神成に腹を立て、澪は背を向けた。
「やっぱりあんたが決めろ」
「や、悪かった。クロにしよう。ただ……」
「なんだ」
「意外とセンスないんだな」
うるさい、と澪は言って手続きの列に向かった。
出立する便への搭乗案内が響き、順に機内への誘導が始まった。
同時に、澪は電話をかけた。

するとすぐに留守番電話に繋（つな）がった。
時差を考えると向こうは夜だが、真夜中というわけではない。おそらくは研究で手が離せないんだろうと澪は思い、わずかに微笑んだ。
反論できない留守番電話は好都合だった。
「紅莉栖（くりす）。突然ですまないんだが、しばらく泊めてくれ。あと、金貸してくれ。そっちに行く飛行機代で文無しなんだ。よろしく頼む」
おそらくは聞いた瞬間に激怒するだろう友人の顔を思い浮かべながら、澪はそう告げた。そして予定の到着時間を教えたあと、電話を切ろうとして、ふとその手を止めた。
自分らしくなさが続いている。そう思いながら澪は続けた。
「……なあ、紅莉栖。そっちに着いたらいろいろと話したいことがあるんだ。いろいろあったよ。結局目的は何一つ果たせなかったけどな。それでも本当にいろいろあった。あんたが日本でいろんな連中と知り合ったように、私もそれなりに知り合った。そいつらの話をしよう。今まであえてあんたの知り合いの話は深く聞いてこなかったけど、よかったらそれも聞かせてくれ」



澪(みお)は自分の物言いに苦笑して電話を切った。
泉理(せんり)に隠していた理由。
もしかすると、どこかで結人(ゆうと)と秘密を共有することで真似事をしたかったのかもしれない。
おそらくは家族やそれに近い何かの。
搭乗を促すアナウンスが聞こえてきた。
時差の関係で、新年を迎えるのは向こうでのことになる。
悔いのない一年を。
そう呟(つぶや)いて、澪はゲートを通った。

五章

南沢（みなみさわ） 泉理（せんり）

前略

お元気ですか。

年が明けてからは初めての手紙になります。変わりなくいるでしょうか。

返事、ありがとう。

言われるまで気づきませんでした。私、毎回手紙であなたに謝っていたかしら。メールとかだったら、自分が書いたものはいつでも読み返せるんだけれど。何枚も書いていたからしっかりと思い返すことができません。でも、手紙が手元にあるあなたが言うのならそうなんでしょうね。

上手く言葉にできないけれど、それはとてもショックでした。

確かに私はあなたに負い目がある。すべてを背負ったあなたに対して、姉として、友人として、女として何もできなかった。いちばん近くにいたのは私なのに。けれどその事実に対して立ち止まってはいけないと、決断を通して伝えてくれたのはあなた。今も全身で訴え続けてくれているのはあなた。だから、そんなことじゃいけないのにね。

思えばあなたが去っていった十月から今まで、たった数ヵ月しか経っていないのに、リハビリで病院にいたときとは比べ物にならないほどいろいろなことがありました。それも私だけではなく、おそらく私たち全員にとって。

私と結人（ゆうと）、うきは小森（こもり）さんという人を家の一員として受け入れました。香月（かづき）は初山（はつやま）さん、二谷（にたに）さんといっしょに自分の委員会を立ち上げた。有村（ありむら）は石綿（いしわた）くんとの出来事を通して何かを吹っ切った。そして聞いているかもしれませんが、久野里（くのさと）さんは一度アメリカに戻るそうです。

おそらく他の人から見ればなんでもない日常の一部なのでしょう。けれど私たちにとってはなんでもないことなんかじゃなかった。あなたが勝ち取り、残していってくれた日常はけっしてそんなものじゃない。……まあ、久野里さんはどうかわからないけれど。でも、彼女もどこかで私たちと同じ部分があるんじゃないかと思っています。ここには書けませんが、そう思った出来事があったから。

私たちの日常は広がって、そして変わっていっています。

そうじゃなければいけませんよね。

少し不思議な話をしていいですか。

大晦日（おおみそか）から元旦にかけて、みんなで明治神宮に初詣に行きました。すごい人ごみで、私たちははぐれないように手を繋（つな）いでいたんだけれど、いつの間にか私が携帯電話を落としてしまっていたみたいなの。

届けてくれたのは、友達とやっぱり初詣に来ていたという同い年くらいの女の子でした。私が落としたことに気がついて、わざわざ人ごみをかき分けて届けてくれて。幸い私の携帯はちょっと傷がついた程度で壊れてはいなかった。けど、少し血がついていたの。その女の子が言うには、いっしょに来ていた友達が携帯を拾ってくれたときに怪我をしてしまったみたいで。ちゃんとその友達にもお礼が言いたかったんだけど、結局そのまま別れてしまって……。

なぜかしらね。そのときに私は、ふとあの子のことを思い出したの。

あの子のことを。

何の根拠もないけれど、あの子も私たちと同じように日常を過ごすことができている。そんなふうに、はっきりと感じたの。

私たちはきっとそうやって、過ごしています。

大切なあなたのおかげで。

ごめんねとは書きません。

ありがとう。

また、手紙書きます。

最後になりましたが、新年、あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願い致します。

草々

南沢（みなみさわ）　泉理（せんり）

終章

尾上（おのえ） 世莉架（せりか）

　どこかから聞こえていた除夜の鐘が響き終わり、年もとっくに明けてから一時間ほど。明治神宮は参拝客でごった返していた。
　列というより波になった人ごみの集団が、進んでいるのか下がっているのかわからないくらいの速度で蠢（うごめ）いていた。例年、日本で最も初詣に訪れる参拝客が多いのが、ここ明治神宮だった。その人数は三が日だけで三百万人を超える。
「う～……気持ち悪い」
　その波に飲まれて、もはや歩いているのか勝手に運ばれているのか判断ができないほど足下がおぼつかなくなっている尾上世莉架（おのえせりか）が呻（うめ）くと、挟むように陣取ってくれている友人二人が顔を覗（のぞ）き込んできた。
「ちょ、ちょっと世莉架大丈夫？」
「いつかみたいに吐かないでよ～……ってきっついこれ！」
　葵（あおい）と彩花（あやか）の二人だった。二人とも、世莉架が通っている横浜の高校の同級生だ。
　そもそもの失敗は、「元旦とか二日に行くより、大晦日（おおみそか）から元旦にかけてのカウントダウン参拝をしたほうが意外とすいてるらしい」という、どこから出た情報かわからないものを信じたのがいけなかった。事実、元旦や二日に比べるとすいているのかもしれないが、そもそもの比べる対象が間違っていた。
　人ごみの苦手な世莉架が足を踏み入れて良い時間と場所ではないことは明らかだった。
「ホットドッグ食べたときに帰れば良かった……」

恨めしそうに言って世莉架は屋台が立ち並んでいた広場のほうに視線を投げたが、たいして上背があるわけではなかった。すぐにどうやら酔っているらしい大柄な男性に阻まれて視界が遮られる。香ってくる酒気にもう一度世莉架は「う〜……」と呻いた。

「言っとくけど、何がなんでも参拝っていったのは彩花だからね」

世莉架の意見に賛同しているらしい葵が、横を睨（にら）みつけて言った。

「け、結局はあんたたちも賛成したじゃん！　彼氏欲しくないの？」

ざわめきに負けないように彩花が怒鳴ると、葵も怒鳴り返した。

「それはあんたのお願いごとでしょ！　いや、それもお願いするけど！」

「う〜……」

要は明治神宮に参拝に来ているのは彩花のそれが原因だった。ここのところまわりの友人たちが、駆け込むように彼氏を作ったのを見て焦ったらしかった。

世莉架といえば相変わらず浮いた話はなく、彼氏云々（うんぬん）も別にどうでも良かったのだが、初詣という行事には少し興味があった。一年の初めに願い事をする。すてきなことのような気がした。

だが、明治神宮という場所には少々難色を示した。聞いていた人ごみももちろんなのだが、ここは最寄り駅こそ渋谷駅ではないが、住所的には渋谷区だ。気軽に来て良い場所ではなかった。できれば他の神社に、と世莉架（せりか）は訴えたのだが、結果的には彩花（あやか）に押し切られた。

「まあ、一年に一度のことだっていうのはわかるけど……」

世莉架はぼやいて思い切り背伸びして前を見た。すでに列に並んで二時間ほどになる。着実に本殿に近づいており、もうそろそろというところまで来ているのだが、数分前と比べて進んだかどうかはわからなかった。
吐き気がひどくなってきた。自分だけ諦めて先に帰ろうか、と世莉架が思ったときだった。先にお参りを済ませて帰路に着く参拝客の一団が近くを通り過ぎた。人ごみにもまれながら、よろよろと歩いていた。
そのときに世莉架は気がついた。
反射的に動いていた。
「世莉架?」
葵の言葉に答えないまま、世莉架は並んでいた集団から飛び出た。転がるように地面に飛びついた。
「……っ!」
手を踏まれ、激痛が走った。世莉架は歯を喰いしばってそれを堪えた。顔を上げると、誰が踏んだのかわからないほどの人垣があった。
手の甲と指がひどく擦りむけて皮が破れ、血が流れていた。が、そんなことはどうでも良かった。世莉架は拾ったものを慌てて確認した。
携帯電話だった。大丈夫だった。ケースに傷はついてしまっていたが、液晶は割れていなかった。
「世莉架、どうしたの?　大丈夫、吐きそう?」

そばに来た葵が声をかけてきた。しゃがみ込んでいるのを見てそう気遣ってくれたらしい。世莉架は大丈夫、と立ち上がった。

すると葵が目を見開いた。

「ちょっと、血が出てる！」

「え、ああ、うん。痛いけど、平気。それより葵、これ」

世莉架は拾った携帯電話を差し出した。

「……スマホ？」と、葵。

「うん。これ、あの人たちが落としたみたい。踏まれそうだったから」

世莉架はそう言って、すでに遠くの人ごみに飲まれつつある集団を指差した。帰りの客はこれから参拝する客に比べて混んでいるわけではない。距離が開きつつあった。

「え、どれ？」

葵（あおい）は世莉架（せりか）の指を追った。

「あの、女の子同士で手ぇ繋（つな）いでる人たち。同い年くらいの」

「あーあの男の子も連れてる？」

そう、と世莉架は頷（うなず）いた。

「え、よくわかったね。この人ごみで」

「たまたま見てたから。ね、届けてあげてくれない？」

「え、私？」
「お願い。私、気分悪くって」
　いつになく強く言う世莉架に葵はおかしなものを感じた。が、世莉架がおかしいのはいつものことだ。いいよ、と葵は頷いた。
「あ、彩花が列の中で待ってる！　もう一度入れてもらえるかどうかわからんけど、戻ってみて！」
　そう言って、葵は走り出し、すぐに人に紛れて見えなくなった。
「う～痛ったい……！　ちくしょうめ」
　世莉架は指を舐めてからハンカチを傷口に当て、列に戻った。
　彩花は集団の端で待ってくれていた。世莉架が前後に気を遣って、「あのぉ……」と頭を下げると、二時間ほど苦楽をともにした近くの人の顔を覚えてくれていたのか、あっさりと横から入れてくれた。
　怪我に驚く彩花に世莉架が事情を説明すると、「ほんとよくわからんよね、あんたって……」と、感心するように半ば呆れていた。
　五分ほどすると、先ほどの世莉架と同じように葵が戻ってきた。
「届けられた？」
　世莉架が訊くと、葵は頷いた。
「うん、あんたにお礼言ってたよ。お大事にしてくださいって」
「え？」

「や、なんかあんたの血が少しついちゃってたみたい。で、事情説明したら、お大事にしてくださいって、お医者さんみたいに」
「そっか」
「喜んでたよ」
「……そっか。良かった」
それから世莉架は指の痛みに耐えながら参拝の順番を待った。ずきずきと痛んだが、代わりに吐き気は消えてくれていた。
午前二時過ぎに、ようやく世莉架たちの順番が来た。賽銭箱ではなく、大きな白い敷物が本殿前に敷かれており、そこに賽銭を投げ入れるようになっていた。そして投げ入れた人間がその場で二礼二拍手一礼をして去っていく。
参拝客の人数を考えればしょうがないことだが、情緒もへったくれもないなあと世莉架が思った瞬間、彩花が言った。
「情緒もへったくれもないじゃん、これ。こんなんで彼氏できんの?」
世莉架は苦笑して、葵といっしょにまあまあと彩花を宥めた。
金欠生活につき、世莉架は五円玉を取り出した。
投げ入れて、作法どおりに二回深くお辞儀。そして拍手二回。
「う~……と……」

そういえば肝心の願い事をまったく考えていなかった。どうしようかと悩んでいたとき、まさに世莉架の目の前にある、自分の血で少し汚れた手が意識に入ってきた。

「……うん、よし」

――みんなにとって、良い一年でありますように。

胸中でそうはっきりと告げ、世莉架は一礼した。

「じゃあもーとっとと行こう?」

葵の言葉に世莉架は頷いた。彩花にどんな具体的な彼氏をお願いしたのかふざけあいながら訊ねつつ、出口へと向かう人の波に入り込んだ。

階段に差しかかったとき、ふと世莉架は足を止めた。

「…………」

そのときのなんでもない光景に、世莉架は確かに動けなくなった。

地面が見えないほどの人がそこにはいた。その多くは微笑んでいた。新年を祝い合っているのだろう、笑みをお互いに向けていた。

「世莉架?」

葵の声が聞こえてきた。

なぜかにじんでいた目を拭って、世莉架はかぶりを振った。
「大丈夫、なんでもない。行こ」
元旦だ。
新しい年と時間の始まりだ。
世莉架は振り返らずに歩き出した。

了



梅原英司（うめはらえいじ）

シナリオライター。Production I.G 所属後、フリーに。主にアニメーションの分野を執筆。ゲームのシナリオは『Chaos;Child』が初となる。

Illustration
ささきむつみ

北国出身者なので冬に強いと思われがちですが、すばらしい防寒仕様住宅と諸々の耐寒装備に囲まれぬくぬくと育ってきたので、素の状態ではむしろ脆弱な存在なのです。

つまり寒い。

イラスト：ささきむつみ　デザイン：福永真未・小沼由季乃（RedRooster）

本作品は、二〇一七年三月、小社より講談社ラノベ文庫として刊行されたものを電子書籍化したものです。

◎本電子書籍内の外部リンクに関して

ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。また、リンク先のｗｅｂサイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく削除あるいは変更されることもございます。ご了承ください。

Chaos;Child（カオスチャイルド）
—Children's Revive（チルドレンズリヴァイブ）—

二〇一七年五月一日発行

原作：MAGES.（メージス）/Chiyo st. inc（チヨマルスタジオ）

著：梅原英司（うめはらえいじ）

発行者　森田浩章

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二-一二-二一

〒112-8001

17M0321E